絶壁

井上友一郎作

改造社版

绝壁

井上友一郎

昭和二十四年十月十日印刷
昭和二十四年十月十五日發行

絶壁

定價貳百圓

著者　井上友一郎
發行者　平田貫一郎　東京都中央區京橋一ノ三
印刷者　塚田忠雄　東京都港區芝田村町五ノ二五
發兌　改造社　東京都中央區京橋一ノ三
振替・東京八四〇二番
電話京橋(56)一六六一九〇

印刷所　東京都港區芝田村町五ノ二五
製本所　東京都港區芝南佐久間町一ノ二
印刷所　小高製本所
製本所　興三社株式會社

目次

絶壁……三
續絶壁……五七
魔女……一〇九
白夜……一四九
あしのまろや……一八七
三文ホテル……二一五
あとがき……二五三

裝幀　小穴隆一

絕

壁

欣也は、世に謂ふ、枕を高くして寝ることのない男である。夜なかに、突如、「う、う、う」と自分の聲で眠りを破つて、それがむなしい夢だと覺るや、ああ、よかつたと思ふ心で、神經的に、寢床をつらぬる彌千代の氣配をビクビクしながら窺はないではゐられなかつた。

「ああ、びつくりした……だが、ずゐぶん他愛ない夢をみたな」欣也は、暗がりに瞳を定めて多分彌千代が起きてゐるのをそれと覺れば、先手を打つて、相手の腹を探らうとする。

やや性質はちがふけれども、欣也以上に神經のはしツこい妻の彌千代は、じうその欣也の含みを持つた一ト言で、見るからにうとましい氣分に陷り、時ならぬ皮肉な問々を交へることが珍しいことではなかつた。

「眠れないの？」

「いや、寢てたんだ。しかし、うつらうつら夢をみて、うなされたやうだけれど、ぼくは何か變

なことといはなかつたかい」

「ウフフフ……」と夜具を顎まで引つ被つての冴えない含み笑ひを洩らしながら、彌千代は、そんな欣也のこまかい氣の配り方が氣に食はなかつた。「うなつてましたよ。いやな聲よ。――あなた、また氣にかかる女の人でも出來たんだわね？」

「飛んでもないさ。出來たら、きつと、のうのうと夜くらゐ愉しく寢らア……」

「あんなことを。――ぢやア、あの、きのふ掛つてきたあの電話はどういふ人なの？　あたくし、何もかも分つてるのよ。あれは、ちよつと普通ぢやアないわね。でも、いいわ。あたくし、どうせ街のつまんない女なんかは本氣で心配してゐないわ。今更、あなたも子供ぢやアあるまいし、あとさきは何でも心得て遊ぶ人だと思ふんですもの、人がいふ程、やきもきしたこと一度もないわ。だけれど、これだけは心得てゐてちやうだいね。お互ひ、輕い身分ではないのですわよ。あたくしたちは闘ひ拔いてきたわけなのよ。世間といふものとも闘つてきたのですし、又、あたくしにしてみると、かうして、あなたと一しよになるため、どんなに、自分の魂と闘ひ拔いたか知れやしない。――物笑ひはいいとしても、いまになつて妙ちきりんなことでもあると、あたくしの一生は元も子もなくなるわけですからね」

又、始まつたといふやうな暗い氣分が、少しづつ欣也の胸にひろがつてきて、彼は、彌千代が理に落ちた口上を述べ立てれば述べ立てる程、その裏にかくされた情念のまたたきを無關心で眺めやることが出來ないのである。欣也はことし四十二だが、彌千代は十一も齢上の五十三だ。本來、世間の標準から考へると、もう夙くに女のあがつた齢頃であつたけれど、さすがに若い美貌の男を射留めただけのことはあつて、ちょつとみると、彌千代を欣也とほぼ同年に思ひかねない人間さへゐて、五十三だよ、と聞かされると、へい、あの人が……やつぱり、女は魔物だねえ、と寧ろ驚嘆の眼をみはる人が多い。彌千代の前では、年齢のことを持ち出さぬのが禮儀であつて、親しい他人はもちろんだが、いまでは當の亭主である欣也までが、五十三であれ何であれ、すべて一切、年齢に關はつた話柄を口にすることさへ禁物にしてゐるけれど、周圍で、その種の神經を配つてゐるな、と氣付くことさへ彌千代の心を傷けることになるのだ。だから欣也は、日頃、努めて彌千代の齢を忘れたつもりでゐるのだつたが、今夜のやうに左程のきつかけもないところを、ああだ斯うだと理窟ッぽい厭がらせを聞いてゐると、やつぱり齢で、彌千代も、まさに女としては殘燭の消え果てんとする心境に似た苛立ちを持てあましてゐるんだわいと思はぬわけにいかなかつた。それはいいが、しかし欣也の身にしてみれば、彼女の嫉妬が、いつも一段高所から天

降り的に降り濺いでくることで、二タ言目にはお互ひに輕い身分でございませんの、かつて苦しく闘ひ取つてきた自分たちの戀愛だの、と勿體付けての束縛である。まして、その心根には、街の女給やダンサアなどといふ種類の女たちを、あたまから輕蔑してゐて、もし假りに欣也が、その種の女たちと若干の關はりでも持つとなれば、それで傷けられるのが彌千代ではなく、却つて當の欣也だらうと決め込んでゐる高慢ちきな論法を、欣也は何よりもいやらしく思ふのだつた。

しかし、欣也も彌千代に對してあたまのあがらぬ點があつて、それが二重に欣也を彼女に縛り付けてゐる節があるのだ。彌千代は、世間で、所謂知性ある新しい型の婦人だといはれてゐるが、二人の無理な不自然極まる結びつきも、實は、さういふ穴に陷ち込む情痴自體を世間の人は、やれ知性だの、封建主義へのプロテストだのといつてゐるが、探つたいのは欣也だけではなくて、內心、おそらく彌千代だつてチャンチャラをかしい筈であつた。二人が一しよになるまでは、彌千代は社會運動家として名のある新垣德三郎の夫人であつたが、この新垣の性的な或るルーズさに、あらぬ孤閨を悶々として過してゐたのを欣也の美貌と辯舌とがたやすく捉まへてしまつたのである。欣也はその頃、無名の音樂青年だつたけれど、三十二歳といふ年齡が含んでゐる不安定な憂鬱を、一種、才能の鬱勃たる未來性だと解した彌千代が、先き物買ひのその冒險を、欣也自

身の水もしたたるやうな美貌にすりかへての戀愛沙汰になつてしまつた。彌千代は十分滿たされなかつた性のやり場をいはば欣也の才能開發に仕向けたと思つてゐるが、それは動機で、結果ではない。又、眞の目的であつたか否かといふことさへ、なべて漠たるこの種の男女關係のさなかにおいては、當人にさへもよくわからなくなる事柄だつた。ただ、他人の窺ひ得られぬ兩人の祕密を土臺にいふなら、彼等が一しよになつた歡びを動物的に享受したのは彌千代である。彌千代は欣也が氣に入つたのだ。それは、いかに透徹した判斷と想像を以てしても、絶對に圖り知られぬ、又、圖り知られぬことが當然たるべき性の或る點について、氣に入つたのだ。つまり彌千代は、人間といふ動物として、この、みめ美はしい三十いくつの音樂青年の愛撫に捉まへられてしまつたわけだが、かかる官能の歡びを與ふ限り永續させたいといふ慾望が、彼女を驅つて、欣也を立派な音樂家に仕立てたいといふことになつてしまつた。この仕事は、すこぶる困難を極めるものだが、以來、十年といふ風霜にも挫けることなく、只管、彌千代が成し遂げてきた所謂世間的な闘ひの跡を辿ると、それは一應、曲りなりにも成功を示したといふことになるかも知れない。彌千代は、欣也の精神といふものを、つねに高級（ハイ・クラス）の狀態でわがものにするために、最も露骨な動物本能を利用して、先づ女好きする欣也を、性の、あらゆる幽玄な極致で滿足させようと努め

たし、又、その道を手落ちなく押し進めるため、彼女は、不斷に、自分が若くならなければならないと丹精した。彌千代にとつて、二人の齡が、十一も隔つてゐることは、不利でもあるし不快でもあつたから、先づその溝を埋めるために、彼女は最初の三年間で、三ツ若返る努力を果し、中頃の三年間で、又、三ツ、若返つて、更に、終戰このかたの三年間で、又、三ツ若返つたので、いまでは彌千代を四十二三に思ふ人間もあるくらゐになつてしまつた。しかし、彌千代は、さういふ金に絲目をつけない美容や服飾ばかりにウツツをぬかしてきたのではなく、欣也を、立派な音樂家に仕立てあげてしまふための努力さへ數々盡した。とはいへ、これは、前者にまさる困難な道であつて、肝腎の欣也自體の才能がヤクザなガラクタに過ぎなかつたらどうにもならない。欣也がガラクタであるか否か、これは、いまも欣也自身にはわからぬことで、又、彌千代にも本當のところがわからぬ。それなら世間の評價から推し量れば、その回答が曲りなりにも出さうなものであるのだけれど、まことに厄介極まることには、世間も、いつかう音をあげない驚の聲の美醜を論じることは出來ないのである。だが、そのやうに、たやすく音をあげない驚に仕込んでしまつたのは彌千代であつて、生れながらに手の込んだ商才を持ち合せてゐた彼女は、欣也が、世間に、美醜を乘り越えた評價を博すに至るには、やたらに美醜の判別を付けさせないのを得策

とした。おしなべて藝道や藝事の世界においては、理窟で解せぬ人氣といふものは立つものでい繪を書かずして畫壇に現れ、ろくに文章を弄することなく、文壇の名聲を保持して生きてゐる人間がある。彌千代が、どこまで、その理を意識下に辨へてゐたかどうかは疑問であるが、結果としては、まさしく欣也がそれに似た存在をかち得てきたのは事實であつて、又、そのやうな唄はぬ鶯といふものを、世間に對して押し立てていくために、彌千代は、そこでも、得意の商才を發揮して面白い事業を戰爭前から營んできた。

いま、彌千代が欣也と共同で經營してゐる東京音樂出版社は、彼等の豐かな生活を支へるために缺くべからざる財源になつてゐるが、同時に、欣也が一種の音樂評論家として世を渡つていくためには、絶對に必要な足場である。欣也は、音樂出版社から樂譜や數々の書物を上梓し、つねに、モーツアルトだの、チャイコフスキイだのといつてゐる人間どもと手厚い交りを結んでゐるが、彼等の樂壇における名聲が、少からず餘光となつて欣也自身の内なる輝きだと錯覺させるわけであつた。

けれども、彌千代は、欣也の資質を決して輕んじてはゐなかつた。彼女には夢があつた。動機や過程に、よしや多少の不純さがあつたとしても、詮じつめれば、この欣也には樂にすぐれた高

貴な藝術家魂が備はつてゐると信じてゐたし、信じたくてならぬのである。すでに金もたつぷり出來たし、彼の名聲の輝き出すのを手ぐすね引いて待ちかまへてゐる連中もある。だから彌千代は、欣也が立派な藝術家として伸びるための、あらゆる出費や心盡しを傾けて悔いぬ一方、もし、彼が、そんな彌千代を裏切つて、名もなき市井の泥臭い女給風情に、ウツツをぬかしはしないかと只管怖れてゐるのであつた。

「ねえ、あなた。あたくし、野暮はいはないつもりよ。――それが、ほんの遊びだつたら、あたくしも安心なのよ。でも、もし、あなたが、かりそめにも、下等な女に惹かされるやうなことがあツちや、あたくし、我慢が出來ませんよ。あなたは、それを、單にあたくしのやきもちと考へるかも知れないけれど、それは飛んでもない大まちがひよ。なぜなら、あたくしが傷つく前に、先づあなた自身が汚れるのよ。あたくし、それが何より怕いわ。それは、墮落よ。そして、あたくしの命取りだわ。ねえ、あなた、たとひ、どんなことがあつても、あくまであんな女たちを相手にする時、遊びといふことにもてちやうだいね。假りにも、本氣で惚れ込んだり、引きずり廻されたりなさらぬやうに、よくよく考へて行動して下さいな。もし、變てこな女なんかと一しよになつたら、もう、あなたの藝術もこれ以上は伸びはしないわ。きつと、それが命取りになつち

やふわ。あたくし、それだけが心配でたまらないのよ……」

欣也は、彌千代に搔き口說かれるだけはあつて、實は、これまで要領よく多少の漁色は試みてきたのである。しかし、つねに齡上の彌千代の瞳が光つてゐるので、思ひ切つたことも出來ず、さして未練はないながらも、まだ食ひ足りない淡い思ひを殘したまま、いつ果てるともなく袂を分つた女たちが何人もゐた。もつとも、それは彌千代に對する知らず識らずのゼスチュアがさせる業で、內心、欣也も、別れて氣懸りになる女もゐないわけではなく、又、事實、子を孕ませた女も一人ではない。彌千代に一切を嗅ぎ付けられて、その女との別れ話や生れた子供の處置などを殆んど彌千代が快刀亂麻の鮮かさで切り廻して納めてしまつた件もあるし、反對に、欣也が躍れて當の女とその子供を處理したり、或は子供が生れると承知しながら、金で片附けて逃げてしまつた例などもある。そのやり口は、概して要領のいい手際を示し、いかにも袖に振りかかつた露でも打ち拂ふやうなポーズに終始したし、欣也はそれを彌千代に對する一種の思ひやりだと信じてゐるのだけれど、案外、彼の生得の女性蔑視や人間蔑視が土臺となつてゐたかも知れない。しかし、とにかく欣也が女と遊んだあとで、さういふ相手を輕く片附け、さしたる拘泥を示さないのが、彌千代にすれば、せめてもの慰めにちがひなかつた。彌千代はさういふ消極的な自己滿

足だけで、その生き地獄の苦しさをやつと堪へた。欣也に女が出來たらしいと覺ると、彼女はあらゆる方法を驅使して、正確なその情報をキャッチしようと努めるし、一方では、そんな欣也をあの手この手でわが身に惹き付けてみようと焦る。齡甲斐もなく、彌千代が所謂ニュウ・ルックの毛羽立つやうな荒い格子縞のブラウスなんかを着込んで、ややもすると二十の娘も顏負けしさうな恰好で銀座などを歩いてゐるのは、何も單なる醉興ばかりとはいへなかつた。彼女は、欣也に出來た女が、どうやら洋裝のよく似合ふ女らしいと見てとると、その十倍もの金を掛けて、すぐさま見えざるこの敵との決鬪を企てるのだ。彌千代が望めば、いまの日本で手にし得る最高の服飾は、わけなく彼女の身邊を飾ることになるのであつて、いかに相手が逆立ちしても及びはしない。だいいち、欣也の對象になる女も、さして廣汎な層には及ばず、大概、女給かダンサアか、せいぜい音樂畑の若いジャアナリストといふ程度のものである。彼女たちは、氣違ひじみた彌千代の容姿を、蔭で大いに笑ひながらも、次第にそこから壓迫感を覺えてきて、あまりにも掛け離れた彌千代と自分たちとの暮しむきの相違から、意識せずして欣也の不實を探り出すやうになるのだつた。女給のアグリは、そのやうな女たちの一人であつて、世に謂ふ酸いも甘いもわきまへた女であつたが、やはり、欣也と關係を生じてから、彌千代の派手な身邊にやたらと反撥を感じ

ることが多くなつた。

「何さ。あなた、あの恰好は……。つい最近、あたし、まツ晝間、數寄屋橋から日劇のはうへ歩いてゐたら、ふいに日比谷のガードのはうから、シャナリシャナリと歩いてくる女がふたりゐるぢャアないの……」

「ああ、わかつたよ。その話はもう止さう」

「まア聞きなさいよウ。——見ると、一人は三十くらゐの女で、もう一人は、二十二三の娘らしい女なのよ」

欣也は、勘で、その話が大體どこへおちつくか想像がつくものだから、苦笑混りに耳をふさがうとしてゐるが、アグリは止めない。

「どつちも、相當、身に付いた洋裝なのよ。でも、あたし、バッタリ眞正面から顏を合すくらゐになつて、何と、そりゃ、おッたまげたわよ……」

「うちの奴か。さうだらう」と欣也も、自分が、普段、彌千代に感じつつある或るあきたりなさを、そんなアグリの言葉によつてまざまざと新たにするが、それを他人から指摘されると、不快になつて女房をかばひたくなる。「しかし、何も、おッたまげることはないだらう。女が、人工の

あらゆる條件を利用して、自分を美しく見せることは、ライフといふものを豐かにするものなんだ。それが生活に溶け込んだ教養といふものだぜ」

「御馳走さま。――えゝえ、お宅の奥さんは立派なお方でござアますよ。フン、だ。でも、ねえ、鷹取さん。あたし、ほんとにびつくりしたのよ。たしかに、あれは人間業ぢやアないんだもの……」

「ふん」

「若く見えるの見えないのといふ騒ぎぢやアない。たしかに、あれなら大したことよ。でも、まア、最後まで聞いてちやうだい。何と、あなた、その二人で並んでくる女をチョロリと見ると、三十くらゐに見える女は、お宅の奥さんぢやアないのよウ」

「何だつて？」

「反對なのよ、ウフフ……つまり、その人と一しよに歩くもう一人の、二十くらゐの娘さんが、實は、お宅だつたのよ、ウフフフ……」

「いつ會つたんだい」と、欣也も内心、その場のアグリの瞠目の情をアリアリと眼に描いて、ああ、あの彌千代の氣違ひじみた眞赤なワンピースかな、と心で思ふ。「ごく最近だらう。赤いドレ

ス、着てなかつたかい」

「ええ。それ、それ。眞赤ですよ、金魚みたい。それに、顏が手入れの行き屆いた廊下みたいに、いやにテカテカ光つてるのよ。じつさい、すれちがつていく人が、ぢいツと見てたわ。でも、お金や教育のある人は大したものだ。そんなことは、てんで氣にもしないで、實に悠々として四邊を壓してゐるやうだけど、何にしても、たまげちやつたわ」

「それで、アグリは、要するに、そんな女を否定してゐるのか認めてゐるのか」

と、故意に、さういふ高飛車な訊ね方で、胸をそりかへらせてゐる欣也は、元來、妙な見榮坊が負け惜しみな性質と溶け合つてゐて、心でどんなに慘めさを味はうとも顏には出さない。欣也は、實に痛いところを遠慮會釋なく衝いてくるこのアグリを、やはり、たかが女給風情と思ふせゐか、沸々として反感がこみあげてきて仕方ないのだ。彼はかうして自分を不快に陷れる人間を、つまりは教養の乏しさのさせる業で、少しも心理洞察をやれない女は仕方ないな、と考へてゐる。けれども、同時に、アグリに對する反感が昂まるに從つて、彌千代の例の金魚のやうな服裝が逆に彼女のどうしやうもない年齡をうとましく感じさせる結果になつて、ふいに暗い絕望感に蔽はれてしまふのだつた。その晩、欣也は酒を飲んで、アグリと一しよに所謂惡所へ泊り込んだが、

これがアグリの手となつてゐることまでは、見抜いてゐない。アグリは、欣也が考へてゐるやうには、チヤチな心理洞察家ではない。むしろ彼女は、意識せずして男を自分の身邊に惹き付けてしまふ魔力を備へてゐて、先づ彼をホテルや貸席へ誘つていく要求が生じると、いつも自然に彌千代の話を持ち出す慣はしになつてしまつた。欣也は、アグリとの關係を、さして深くは受け取つてゐないくせに、斷續しながら容易にさつぱり清算することが出來ずにゐた。もちろん、この目立たない關係も、いち早く彌千代は知つてしまつてゐた。動かぬ證據を突きつけられた欣也は、例によつて輕くその事實を認めたけれど、まだ何か安心しきれぬ彌千代は、折あらば欣也に泥を吐かせてやらうと思つてゐるから欣也としては夜もオチオチ眠られぬのが、自宅の共寢の場合であつた。欣也はアグリに寄せてゐる、一種、性的な或る滿足感を假りにも彌千代に嗅ぎ付けられまいと考へてゐる故に、夜半、「うわッ」とうなされてさへ、「ハテ、いま、おれは何か都合のよくないやうな寢言を聞かれはしなかつたらうか」と氣遣ふ心で、そんな魚類の交尾のやうな、はかない女との數々の接觸を、反省したり、仕方がないと思つてみたりするのであつた。

2

近頃、彌千代は、事業に馬鹿當りを取つたお蔭で、お金は溜まるし、申分ない邸宅は手に入れるしで、身邊いよいよ華かさを加へるけれども、氣付くと自分がめつきり老境へ近付きつつある淋しさが際立つてきた。而も、それは三十代から四十代へ踏み込んだといふ數字の上の變化ではなく、どうやら女の生命が決定的に絶たれるといふ、どうしやうもない或る寂滅の豫感である。月經は、すでに停つた。內股の筋肉もひつぱると垂れさがり、ぶよぶよ指さきに撓ふものは、もはや寧ろ筋肉といふよりもただの脂肪かとさへ疑はれる。しかし彼女は欣也と週に一度は寢てみた。性慾も無いわけではなく、時にカーッと胸を灼くやうな苛立たしさで欣也の腰骨を感じることはあるのだけれど、概して、それには心理の比重が重く掛り、いはば食べるべきものはおいしく食べねば、といつたやうな、食慾に近い要求に變つてきてゐた。

しかし彼女は、人生の第何幕目かが終りになつても、その緞帳をはねあげて、フットライトの輝きを滿身に浴びながら、あくまで見物に愛嬌を振りまく氣合ひで、若い欣也に立ち向はずにはゐられない。欣也は四十そこそこだから男盛りだ。根が脂肪質の體質だから、昔をよく知る女たちには、いささか見苦しさを加へたといふものの、生來の色白と、性の魅力をロース肉のやうにうちに湛へたムクムクした恰幅のいい美貌が、彌千代を痛く刺戟して止まないのである。彌千代

はこれをむざむざと泥臭い女給風情の玩賞の具に供されてはたまらぬと思ふ一方、この白ぶくれの肉體を引き留めておくためには、やはり自分が精神的に、手強く欣也と結ばれてゐないといけぬと思ふのだつた。彼女は、欣也を偉くしたくていつぱいだつた。欣也を偉くさせることで、せめて欣也の精神を所有したいといふ動機が、しかし彼女の官能の或る脱落感からきてゐることは皮肉であつた。

或る午後、欣也は、骨休めに一しよに熱海へ出かけるといふ彌千代を、ぼんやり青山高樹町の自宅の居間で眺め盡し、そのどぎつい暑苦しさ、とより云ひやうのない厚化粧と猿芝居じみた衣裳で、あツと心で瞠目の叫びをあげた。

「何だい、君は。……どうして、そんなに、胸をブックリふくらせてゐるんだい」他の部分には眼をつぶつても、欣也はせめてそれだけは指摘せずにゐられなかつた。季節も、そろそろ青葉にむかふ時分のこととて、彌千代が白いウールのボックス・コートを若々しく着こなすのはいいとしても、その胸もとにブックリ丸くふくれあがつたお椀のやうな小山は、どう考へても普通ではない。

「どうしたの？　何が可笑しいのかしら……」

と、眞赤に塗り込んだ十個の爪が鮮烈な斑點となり、白ウールの胸さきを南天の實のやうに、竝んで蠢く。八疊一間を隔てて見るなら、完全に三十女に見える感じだ。

「君、それ、ブラジャアを當ててゐるんだらう？」

「ええ、さうよ」

「ブラジャアのなかに、何をそんなに詰め込んだの。乳房だけぢやアないのだらう？」

「あら、そんなに可笑しいかしら。——又、氣のせゐでせう？」と、ちよつと暗い眼の色をして、恨むがごとく欣也を睨んだ。

欣也は、これをいはれるとクジタジとなる。日頃、こちらで、氣を使つて、なるべく齡には無關心を裝つてゐるつもりだが、或る場合には、彌千代はさういふ欣也の神經の配り方それ自體に、ふいに絶望的な氣分に陷ることがあるらしく、却つて、そんな欣也の憐憫といふものを卑しい性慾の裏返しのやうに取るのだ。いまも、彼女は、欣也が彼女の年齡にこだはつてゐるんだな、と思つただけで堪らなく氣分を害した。

「あなたは少し囚はれていらつしやるのよ。近頃、どうも、あたしのすること爲すことを見て、すぐ年甲斐もなく、といふ風に考へるんでせう？　俗物的よ……」

「俗物的はないだらう。ぼくは單に健康な常識からいつてるんだ」
「それが俗物じみて見えるんですよ。だつて健康といふものは、何も若い人だけの特權ぢやアないでせう？」
「おいおい、何の話だい」だが、欣也には何の話にむすびつくかは、よくわかつてゐた。焦點は若さにいくのだ。若さが彌千代には呪はしく、それを基準に物事を觀る欣也を、心にもなく俗物呼ばはりしなくては氣がすまぬわけであつた。
出掛けに、思はぬ氣分を害ねた彌千代は、青山から東京驛へ向ふハイヤーのなかでも、いやに頬ツぺたの溝を深くし、プリプリしてゐた。けれども、この種の不快さは、いはば自家中毒に似たもので、永く苛立つ矛先を欣也に向けてゐることの愚を誰よりもよく彌千代自身が辨へてゐた。熱海へ着くと、さつそく二人で、白いタイルの家族風呂へ入るのだつたが、湯氣のこもつた狹い浴槽のなかで見ると、年齡の小刻みな皺が消え失せ、ふと彼女が、じつさいに三十になるやならずの一個の美女に思はれてくる。欣也の心が、イキナリ、時を移すことなく彌千代の心にも投映するのか、「あなた、いま、あたくし、何を考へてゐるか、おわかりになつて？」と、作爲のポーズに、いかなる娘も及ばぬくらゐの媚態を湛へて、消えかかつては僅かにまたたく情念の微か

なほむらを、チラチラ男の視線のなかで燃やさうとするのであつた。
「さア、何を考へてゐるものやら。――もしかすると、昔、ぼくと一しよになつた時分のことでも思ひ出してゐやアしないの？」
「當つたやうで、當らないやうだけれど、氣分的に、まア、さういつたものかも知れないわね。ほんたういふと、あたくし、モーツアルトの或る曲を、あたまに茫とうかべてゐたの。だけども、その曲を考へてみることで、氣分的に、あなたとあたくしとの結び付きの美しさを、なつかしく思つてゐたのよ」
「モーツアルト？　ああ、モーツアルトか……」
「あなた！」
と、ザブンと浴槽内にさざなみが立ち、白い脂肪の輝いてゐるぶよぶよの細腕が湯のなかで密着してきて、
「あなた。きつと、いいお仕事なさつてちやうだい。あなたこそ、出來る人よ。あなたは自分をお粗末になさらうとするくせがあつて、心配だわ。あたくし、ただの嫉妬などでヤキモキしてると思はれては、あんまり可哀さうよ。そりや、あたくしも女です。女らしいこともいふわ。でも、

根本は、あなたの天才を信じるからよ。ほんとに、あなたは、無教養な女どもと、一しよにされちやア堪らないのよ。ねえ、あなた。ことしは、そろそろ作曲のお仕事もしてちやうだい。あたくし、立派に、そのお仕事のお手傳でもさせて頂くつもりですから……」

彌千代が感動をこめて喋つてゐるのを、欣也は、ちよつと美しいな、といふ風な眼で眺め盡した。なべて、この種の感動で胸をふくらませてゐる際は、人は、誰でも普段より美しくなるものである。欣也も、心で、さう考へてゐたのであるが、いい鹽梅に、彼は熱海へ出かけてくる直前、都合で何となく驅け違つて、ここ暫くは女給のアグリとも逢瀨を絶やしてゐるのであつた。それで欣也は、相手選ばずの要求に、全身をムヅムヅさせてゐた矢先とて、とりわけ五十三歳の彌千代の齡を忘れさうになりかかつてきた。欣也はなほも喋らうとする彌千代の肩さきをふはりと抱いて、思はず彼女が眞赤になつてしまふやうなふるまひに及ばうとした。

「ねえ、ちよつと待つてほしいわ」辛うじて、その荒々しい接近から身を斥けて、「一應、あがつてからにしませう。これぢやア無理よ。ねえ、あなた、もう、あがりませうよ……」

風呂場を出ると、宿の座敷はすぐ暮れてきた。南面のガラス窓から、まだ仄明るい海上が見渡せて、波がしらすれすれに白い海鳥の群れ翔ぶのを見つめながら、彌千代は、樂譜の記號を思ひ

うかべてゐるのだと欣也にいつた。たしかに淡い霞んだやうな水平線を、斜めに切つたり縱に切つたりして、ふはりふはりと浮き沈みするその海鳥の姿から、欣也も自然のメロデイは感じてゐた。默つてゐたが、しかし欣也の考へてゐた曲は、或種の低劣な流行歌からヒントを得たものであつた。彼はそれをうたひたかつたが、傍で彌千代があたまごなしに冷笑するのを感じると、無心にそんなものがうたへはしない。このもどかしさは折々欣也の感じつつあるところで、何も知らない彌千代のはうからモーツアルトの「ドン・ジョヴアンニ」などの話を持ち出されてゐる際に、まさかジャズ・ソングめいた鼻唄を口にすることは出來やしない。

夕食の膳にはコクのある日本酒が供された。藝術的な感動で胸をふくらませてゐた彌千代は、やたらに華やいだ聲を出して、その盃を重ねては欣也に勸める。欣也は元來いけない口で、よたよたしながら眼のふちを染めてゐたが、食事をすませて、九時頃、もう一度風呂に浸つてあがつてくると、欣也はすつかり動物になり切つてゐる自分を感じ、すぐさま押し倒すやうにして彌千代を絹布團のなかに入れると、彌千代が暫く逡巡の色をみせ、意外なことには、えらく苦痛をうつたへたりするのである。

「あツ、あたくし、どうしたのかしら——ねえ、あなた、惡いわねえ……」

「ナニ、いいさ、いいさ」と大上段に振りかぶつてみせた刀を、もとにをさめる吹ツ切れなさで、「しかし、いつたい、どうしたといふんだい。氣持があつても、身體が云ふことを聞かないのかい」

「わからないのよ。自分で、およそ何だかよくわからないのだけれど、まア、これは疲れてゐるのよ。一時的よ。でも、折角のたのしみなのに、あなたに悪いわ。あたくし、いいわ。あたくしも、そろそろ不自由な人間になつてくるのは覺悟してるわ。でも、あたくし、安心してるの。あなたが強い氣持をもつて精神的に生きて下さるといふんだから、あたくしも精神的に生きるわ。それは、あなたのお仕事を手傳つて、あなたを立派な藝術家に仕立てることよ。もし、このやうな天上的な結び付きが變らず生涯、續いていくなら、あたくし何も云やアしないつもりよ。ねえ、あなた。もし、よかつたら、アグリさんといふ人を、そつとおうちへ入れてみてもいいわよ……」

「えツ？」と欣也は度膽を抜かれて、毆られたやうな眼付きで彼女を見据ゑる。彌千代の腹が解しかねるその一瞬前の衝撃で、彼女がアグリといふ名を正確に知つてゐることへの驚きである。「えツ、いつたい、何だつて？　君は、今夜、どうかしてるぜ。それで、アグリといふ人間のこと、君は誰がにデマでも聞かされてゐるんぢやアないかね？」

「うそ。あたくし、一應は心得てるのよ。西銀座のクロフネの女給さんでせう。實は、あたくし、作曲家の本郷さんと一しよに、つい最近、クロフネへ飲みに行つたわ。オホホホ、そしたら、店にゴチャゴチャと樂壇關係の人たちがゐて、誰かが、そつとアグリさんのこと、口を滑らしてしまつたのよ……」

「つまらねえ俗物どもだ！」

「いいわよ。そんなに氣になさらなくたつて——」と彌千代は努めて冷靜な態度を崩さず、ふと勝ち誇つたやうな顏付きをしていふのであつた。「でも、あなた。實はあたくし、安心しちやつた。知らない時より、すつかり氣持がおちついて、一面、あーあ、情けないなと考へたけど、やはり、こんな女とならば、まさかあなたも本氣で熱をあげるわけがないでせうと、すつかり安心しちやつたのよ……」

「うむ」

「皮肉と思ふ？　さうぢやアないわよ。ほんたうの氣持を知つてちやうだい。あたくし、あなたが、あのアグリさんといふ人に、利用されてスポイルされるのが堪へられないの。でも、あべこべに、あなたが、決まつた必要で、ああいふ人を、道具のやうに利用するなら、別に何とも思は

ないわ」
「それで？」
「だもんだから、もし、あなたが、そんなあたくしを十分理解して下さるなら、あのアグリさんの一人くらゐ、家へ入れたつていいぢやアないの？」
「アハハ、むしろ、社の仕事で使つてやるはうがよくはないか」
「だめ。どうせ、まともな仕事なんか出來やしないわ。それに、家ならいいけれど、やはり、社では世間の口がうるさくツて……」
「それもさうだ。しかし、まア、どつちにしろ、そんな醉興は止めとかうよ。妻妾同居といふことは、どんなに君が聰明な人間だつて、きつと、うまくいきやアしないよ」
「さうかしら。でも、隱れてコソコソされるより、案外、氣持がよかアないかと思ふのよ。あたくし、ともかく安心ですもの。安心したわ。あの人が、さういふ人だと分つたら、いつそ氣持がサバサバしたわ……」と、さういひながらも、彌千代は白い枕に顏を埋めて、ふいに笑つてゐるやうな聲で泣きだした。
「おい、おい。止せよ。何泣くことがあるものか。何も泣くことはありやしないよ」

「オホホ……誰も泣いてなんかゐやアしない。あたくし、考へると可笑しくツて。オホホ、ウフフ、ウフ、可笑しいわ」

結局、その夜は、彌千代の身體が、いかなる愛撫にも堪へられぬと分つてしまつて、つい捨て鉢に、彼女は綺麗事を口にしたわけであるが、それはアグリといふ一女給への屈伏ではなく、日頃、彼女が精神だの藝術だのといつてゐた或る自負心が、自分自身に負けてしまつたことになるのだ。誰も彼女を打ち負かさうとは思ひはしない。彼女が自分に負けたので、つまり、それが彌千代のやうな女にとつては、一種、精神の老醜といふより他はないのであつた。

翌日、欣也はもう一晩、宿屋にゐたが、前夜あれ程、捌けた口上を述べ立てた舌の根が乾かぬうちに、彌千代は、不意打ちのやうな迫り方で、欣也の要求に應じてもいいと洩らすのだつた。二つ竝べた高さ一尺に近いやうな夜具の上で、彌千代は、いかにも淫蕩な眼を光らせて、「アグリなんか、アグリなんか！」と繰返した。欣也も前夜の手前があつて、無下に斥けるわけにいかず、ふと狂ほしいとも見えるやうな三十分を過したけれど、すでにそこから何の歡びも湧き出しては來ないのだつた。彼も、その種の慾望を、食慾みたいに習慣化してしまふ危惧を感じながら、やはり、常住、手馴れた女を持つてゐなければ仕方ないと考へ直した。

3

欣也とアグリの關係は依然として消滅しないが、彼はアグリと特別な仲を續けながらも、又、他の女に手を出すことがあつた。しかし、それは、アグリの妙なはからひに據ることで、ややもすると欣也が秋風を吹かしさうになるのを察して、アグリは所謂欣也ファンといふやうな極めて若い女給たちを、欣也に取り持たうとするのであつた。アグリはことし二十九だが、クロフネでは姐さん株で、店のなかでは睨みが利いた。もとより、すべての女給たちがアグリの頤使に甘んずるわけではないが、最初はやはり利を以て欣也に接近してゐた女給たちが、忽ちにして欣也ファンになりかかる汐時に、ちよくちよくアグリが水を向ける。「鷹取欣也は、どうやらあなたに思召しがあるらしいわよ」云はれて、そんな連中も欣也に親しんで損はせぬので、結局、巧みに欣也の漁色の對象に入つてしまふ。けれど、そんな彼女たちを、あと腐れなく捌くことはアグリの得意とするところで、そこから事が大きくなつたり、深い關係に突き進んだりはしないのだつた。

彌千代もそれを薄々と感じてゐたが、表面、嫉妬はじつくり壓へて、すでに肉體の寂滅を知る、

淋しいわが魂を、欣也に對する藝術上の刺戟として役立てたいと念願した。「アグリなんか、要するに下等な官能の戯れなんだ。あの連中が、いくら夏の蟲けらみたいに欣也の身邊にうようよしても、どうせあとへは何も殘さない一時の影にちがひないから……」かう思ひ込まうと努める彌千代は、つまり、五十三歳の自分を、欣也にとつての天上の戀たらしめようと希つたのである。天才的な藝術家には、つねに二重生活の宿命が付きまとふものであつて、あの「ドン・ジョヴァンニ」の作者の戀にも、地上的なコンスタンツェと、天上的なアロイジアが有つたのだつたが、彌千代は自らを神にもしたい幻想に取り憑かれつつ、彼女自身が欣也の天上的な戀人たらんと夢みたのである。

人はたやすく自身の妄想に從つて、神にも惡魔にもなれるけれども、それを他人に及ぼすことは極めて至難な事柄だつた。彌千代も、自分の心のなかでは、ほしいままにアロイジアに成れたけれども、それを世間に押し擴げるには、やはり欣也を、鳴く音美しい鶯にせねばならない。そこで彼女は、欣也を色褪せた閨室で責める代りに、いまは次第にピアノの傍に引き留めておく策を講じた。そのため新たに十八萬圓で買ひ入れたドイツ製のピアノが、暫く欣也の藝術意慾を掻き立てるかに見えてゐたが、殆んど一種の作曲をも成さぬうちに、彼はクロフネの女給の尻を追

ツかけ廻し、遂に十八になる處女を孕ませるやうな事件が生じた。子供の處置を相談されたアグリは、もちろん心當りを物色して、その朝子といふ小娘同然の可愛い姙婦を、下落合の、とある産院に紹介した。

朝子は姙娠四ヶ月にもなつてゐたが、すでに酷暑の八月のまツ晝間、その産院の雨漏りで腐りかかつた六疊の汚い疊の上で、「オールド・ブラック・ジョー」を鼻のさきで口ずさみつつ、やがて、「う、う、う、う」と唸り出し、よく肥え太つた男の胎兒を死産した。手術は豫定通り成功したのだ。すべての處置はアグリが欣也から預かつてゐた十分の金によつて果すことになつてゐたのに、當日、何思つたのか、立派な水菓子の盛り合せ籠を抱へて、わざわざ下落合の谷間のやうな高臺の下にある小さな産院を訪れてきた欣也は、全身、汗ぐつしよりで、殆んど麻の背廣の背まで水浸しになつたやうに汗を透らせ、鼻さきからもポトポト汗の雫を垂れながら、朝子の寢床を覗きにきた。

「おう。えらかつたらう？　でも、よかつたなア」と欣也は劬はりをこめて、いつた。

「うん」

「それで、首尾よくすんだつてね……？」

「ヘッチャラよ」

だが、朝子はさすがに蒼白い顔をしてをり、癖で、事もなげに輕く頷くのも大儀さうな樣子をみせた。

「しかし、あとが大事ださうだ。あとのことは心配しないで、十分養生しなくちゃアいけないぜ。——何ぞ、欲しいものはないかい」

「いいえ、何も欲しかアない」

「何か、して欲しいことはないかい」

「何もないわ」

「それでも、何か希望があつたら遠慮なくいつてごらん。遠慮なんかするんぢやアないよ。——どう？　何でも、ぼくに出來ることなら？」

「ウフフ」と微かに老女のごとく唇のさきで陰氣に笑つて、「何もないけど、考へとくわ」

「何だつて、いふがいいよ」

「一つあるわ。——でも、止さう……」

「どんなことだ。いつてごらん」

「あなた！」
と、うるむやうな瞳を起して、斜め上から、疊に片腕ついて覗き込む欣也の視線を、こね返すやうに、そつと見据ゑる。
「何だい」
「あなた。あたしを奥さんにしてよ……」
「え？」
「それ、あなたには出來ないかしら？　でも、あたし、さうして欲しいわ」
「何だ、急にそんなことを……。しかし、それは、ちやんと元氣になつてから話し合はうよ。いま、そんなこと考へないで……」
「考へてやアしないんだけど、もし、あなたに出來るなら、奥さんになりたいのよ。だつて、あなたの奥さんに出來ないことを、今度、あたし、したわけなのよ」
「それはさうだ。しかし、ここで、そんな話をゴテゴテしてゐるわけにはいかないだらう。いまは何も難しいこと考へないで、早く養生することだよ。それより、この際、差當つて困ることから、いつてごらん。急ぐことからしていかうよ。お金は、アグリちやんにも渡してあるけど、別

に、餘分にあげてもいいから」

「お金なんか要らないのよ。頂いたつて仕様がないわ。――それぢや、あたし、心細いから、あなたに毎日來てほしいわ」

「毎日？　うん、よし、それはなるべく實行しよう。さうさな、多分、一日一度、顔出しは出來るだらう。よしよし、それは約束するよ」

欣也は、朝子が相當苦しい人工流産に堪へたことを知つてゐるので、ここで彼女に出來るだけ逆らふまいと考へてゐた。アグリが一通りの世話を燒くことになつてはゐるが、朝子のいふまま、毎日、多少の無理をしてでも下落合まで來てやらうと心に決した。欣也はそれから一日一度は、彌千代の前を取り繕つて、せつせと産院を訪れてきた。二日が四日、四日が五日といふ風に、朝子の退院がずるずると延されて、結局一週間はたつぷり掛つて、やうやく歩いて産院から歸つてよろしいといふ日がきた。前日、欣也は、その退院の豫定を聞かされてゐなかつたが、夜になつて、アグリが、急に欣也の所へ電話を寄越して、俄かに退院の豫定を傳へた。欣也は、その日、豫定通りの正午すぎ、谷間のやうな蒸暑いその産院にやつてきた。欣也はアグリに世話させながら、その、こまかい拘束を嫌つてゐたので、出來れば自分の手によつて朝子退院の一切を、自分

が何でも宰領する氣になつてゐたのだ。

退院の手續きは簡單だつた。要するに金を拂つて、醫師に當座の養生法を聞くと、そろそろ歩いて電車の驛まで行くことである。近くに、新宿へ出るバスはあつたが、これは醫師が嚴禁したので、欣也とアグリは、左右に朝子を擁しながら、西武線の驛まで出ることにした。

まだ陽の高い午後三時頃、三人は下落合の高臺をそろそろと歩いてゐると、突然、背後で、彼等を呼び留める者があつた。振り向くと、その産院の女中であつて、小脇に何かこつてりした紙包みを抱へてゐる。

「何ですか」と欣也がいふと、女中は照れたやうな視線を伏せて、その包みを眼前に持ち直して、低い聲でぶつぶつと何事か囁いた。

すると、こつちで立ちどまつて眺めてゐた朝子が、「あッ」と俄かに小さく叫んで、「あなた、あなた！」と欣也を呼んだ。

「うん？」

「分つてるのよ。それ、こちらへ戴いといてちやうだい。こつちで持つていかねばならぬ物なんだもの……」

欣也は女中の差出したその重いかめみたいな品物を、ずしりと兩手に感じながら、イキナリ想像が閃いた。

「おお、多分、あれぢやアないのか。あれなんだらう？」

「さう。あれなのよ……」

チラと輕く眺め捨てて、傍のアグリは苦笑とも憫笑とも付かないやうに顏を歪めた。そして再びもと通りの竝び方で歩きながら、アグリは、

「へえ、驚いた。——それは、やつぱり、こつちで處分しなくてはいけない規則になつてるのかしら？」

「さうらしいの」と朝子は娘のやうに、あどけなく微笑んだ。「やつぱり、こつちで、お葬ひすべきなのよ。何しろ足かけ五ヶ月に入つてるんだもの。——いいわ、どこかのお寺へ頼んでみるから……」

死んだ五ヶ月の胎兒と知つて、欣也は麻服の左の胸に抱へた小さなかめに無關心ではゐられなくなつてしまつた。欣也はちよつと悲痛な氣持になつた。西武線の電車に乘つて、高田の馬場で、更に省線に乘り換へたが、欣也はアグリや朝子たちを相手に、あらぬ雜談に耽りながらも、小脇

に抱へたかめの重さがそのまま體内に食ひ込んでくるかに感じた。彼は、かめそれ自身の重さと、なかの胎兒の重さの比重についてイライラと思ひ惑つた。彼は人生のはかなさについて考へ込んだ。そして、うらうらしためまひのやうな微かな苦痛で、欣也は、生きてゐる人間よりも、すでに生の一切に近付き得ずに一個の小さなかめの底にをさめられた胎兒を思ふことによつて、はるかに人生といふものの廣大無邊について考へさせられてゐるのであつた。

「鷹取さんは、これからいつたい、どうするつもり？」

新宿のホームで降りると、アグリが二人の顏を半分々々覗きながら、これからの足取りを訊くのであつた。アグリとしては、ここで、かめを欣也の手から朝子が受け取り、多分、小田急の經堂にある彼女の寄寓先へ引きあけていくことを豫想したのだ。もし、それだつたら、自分は欣也と銀座へ出ないで、どこかこの邊の料理屋で食事をすませて、欣也と一夜を過してもよいと考へてゐるのであつた。ところが、欣也は、いつたんかめを朝子の手に戻したけれども、このまま一人で朝子を經堂へ歸すことは心もとないことだといつた。それなら自分が送りませうかとアグリがいふと、欣也は輕くかぶりを振つて、「いや、それでは、あんまりすまないよ」と迷惑さうな顏付きをした。アグリは、自分の都合だけではなく、この際、欣也が下手に朝子のあとなどに食ッ

付いていつたりすれば、何かのはずみで朝子と別れるいい汐時をなくしてしまふことを怖れた。

「いいでせう。送るなら、あたしが經堂まで送つてあげるわ」

「いや、それは君に悪いよ。——ねえ、朝ちやん……」と、朝子の意見を求めようとするのを壓へて、

「いいのよ、應取さん。で、もし、何だつたら、應取さんは新宿で待つててよ。あたし、朝ちやんを送り屆けて、すぐここまで引返すから。往復一時間も見ておけば大丈夫でせう？」

もし、さうさせるくらゐなら、欣也はこの日わざわざ出て來なくともよかつたのである。それ故、強ひて、アグリに別れて、二人で小田急のホームへ渡らうとするのを見据ゑたアグリの顏には、或る漠とした拍子抜けといふ以上に、ああ、これはこんな筈ではなかつたのに、といつたやうな滿ち足りぬ不快さが強く漂つてゐるのであつた。

4

彌千代は、欣也と朝子の仲を暫く何も氣付かずにゐた。しかし、一方、つねに特別な探索といふのでないにしても、會社へ遊びに立ち寄つた知人たちと、よく欣也の行きさうなバアやダンス

ホールへ出かけるのだつた。そこには探索といふやうな、せせツこましい感じなどない。むしろ欣也に蝟集するそこの下等な蟲けらどもへの示威的な效果をあげることに、彌千代の心理のピントが向けられてゐるやうである。彌千代は、時たま、銀座あたりの料理屋で行はれる音樂關係の座談會へ出席したり、人と街を歩いたあとなど、どこかで一杯飲みませうといふやうなことになると、大概、急いで青山まで自動車を走らせた。そして冬ならば豹の毛皮のオーバー、夏ならば——夏は特別何も着るものはないにしても、いまの時代には珍らしい黄色い琉球の芭蕉布などに着換へて、悠々と目ざす會場の表口へハイヤアを横付けにして入つてくると、先づどうみても四十そこそこの齡恰好にしか見えないのだつた。

しかし、彼女は、さういふ場所へ示威的なふくみを持つて乘り込んでくるにしても、直接、そこで接觸する女給たちを頭ごなしに輕んじたりはしない。いや、むしろ、對等以上の親しみの情を示し、蟲も殺さぬやさ聲で、一應、彼女たちの立場を認める。たとへば、クロフネでアグリの姿をみても、「あら、まア、暫くね。アグリちやん」だ。そして、こいつは欣也と臭いと睨んだ女をそれと知つても、このやさ聲はいよいよ猫撫で聲にまで發展して、とりわけその女にはデリケートな友情を示さうとする。五分の喧嘩が不利だけではなく、かなり高い社會的地位を持つ身

で、さういふ十把幾何のズベ公たちと本氣で爭ふことの愚は心得てゐるのであつた。だから彼女が、相手の女給の容貌姿態に、內心、どんな辛辣な觀察眼をはたらかせてゐようとも、「あら、まア、松江ちやん。一度、うちへお遊びにいらつしやい」などと二十の娘のやうな聲がかかると、大概、みんな心からころりと參つて、「いい方ね！」といふやうなことになつてしまふ。かうして彌千代は勞せずして種々の情報を集めてくると、すぐには欣也にぶちまけないで、それが最も效果を奏しさうな、その時どきのいい汐時を狙つて、「ときに、あなた……」といふやうにして欣也の面皮をやさしく剝ぐのだ。

朝子の墮胎事件が解つた時も、やはり彼女は永い間、知つて知らない顏をしてゐて、或日、欣也が朝子を連れて關西旅行を企ててゐると解つた際に、遠く獲物を追ひ込んでいくやうにそのことを持ち出してみた。

「何も彼も知つてるんです。あなたも、相當なことをなさるわ。そんな罪なことをなさつてたら、いまに、人氣に障りますよ。もし、新聞ダネにでもなつてごらんなさいよ……」

欣也は一言もないものだから、これに對して少しも辯解しようとしない。けれど、彌千代は、欣也が朝子に子を孕ませて無理な處分を敢てしたのを氣遣つたりはしてゐないのだ。そんな彼女

を相手にして、今更、何の關西旅行ぞ、といひたいのである。
欣也はしかし、いはせるだけ彌千代にいはせて、直接、それには肯定も否定も與えず、最後にちよつとニヤリと薄笑ひして、
「しかし、何かい。そのデマは、どこから耳にしてきたんだい。どの程度、正確だと考へてる？」
と、かういふ發想法を用ひることの利はよく知つてゐる。
「誰が、どこでいつてゐたつて、よろしいわ。ただ、もし女遊びをなさるにしても、もつと御自分を考へて頂きたいと思ふのよ。あなたは、ああいふ女と一しよに遊んでも、何のプラスにもならない人よ。それを考へて頂きたいの」
「自重はするさ。自重せねばなるまいなア……」
「ところで、あなた」と彌千代の瞳がチラチラと青い焰で燃えあがつてきて、「——今度、關西へいらつしやるのは、いつ頃？」
「ああ、もう、そろそろ發つことにしてるんだが、何しろ、むかうの友達の都合もあるからね」
「さう。それで、身のまはりのお世話のために、あたくしも一日くらゐ、京都までお供しますか……？」

と、この邊でジワリジワリ眞綿で首をしめにかかつてくるのであつた。
「ナニ、それには及ばんさ。もし、何だつたら京都へぼくがおちついてから、電報でも打つてやらうか」
「オホホ。その電報は、きつと、なかなか東京へは着かないわね？」
「え？」
「もつとも、青山へは着かないけれど、西銀座邊なら屆くかもわからない」
「何だつて？　又、何か邪推するの。いやなこツた。今更、アグリのやうな女なんかを相手にするぼくぢやアないんだ」
「でも、あたくし、アグリも案外親切な人間だと思ふのよ。だいいち、あの子はウソをつかない。何だつて、親身になつて本當のことをいつてくれる……」
「ははん、わかつた」と欣也に想像が閃いて、「さては、朝子のことで、ベチャクチャ告げ口したのは奴さんだな？」
「でも、あの子のいふことは、萬事、何でも眞實味があつて感じがいいわ。あれなら、男に惚れても惚れられても、サバサバしてゐて、人に迷惑を與へないわね」

「アグリも、いい加減な奴だなア。ああいふ女は、ぼくにいはせると利口馬鹿といふんだよ。いかにも、ぼくのスキャンダルなど君に告げて、君に好意を寄せてるつもりで、感謝されようと思つてるにちがひないけど、結局、そんな君にまで、うとんじられる時がくるんだ。女の淺智慧はどうしやうもないものだなア」

「オホホ。それぢやア、やつぱり、アグリのいふこと、事實なの？」

「アハハハ……君の想像に任せるよ。せいぜい君は、アグリを味方に引き入れて、アグリに引廻されるといいんだ。しかし、ぼくは、いくら君がアグリをぼくに押し付けたつて、女房公認の二號といふのは、もういやだよ」

この一言が、ぐさりと彌千代の心臓を突き刺したのだ。情勢止むなしとみた上で、彌千代はせめてアグリを以て、美貌の欣也を多くの女から防がうと思つたけれど、すでに當人がきらひだした女を、どんな意味でも近付けておくわけにいかない。別して近頃、アグリは、クロフネで働く餘暇に、煙草やウイスキーなどの品々を手に入れてきて、青山高樹町の家にまでちよくちよく出入りするやうになつてきてゐた。親しい人は、そんなアグリを、やはり彌千代の認めた二號だと想像してゐるやうだけれど、もしや欣也が近い將來、樂壇で本格的に名を成さずに終るとすれば、

そんな反間苦肉な彌千代の心づかひといふものさへ、單に彌千代の同性に對する屈伏に過ぎない、といふことになる。考へると、たまらなく、いやなことだ。してみると、いまの彌千代の身にすれば、もはやそろそろ、いかなる手段を以てしても、欣也の才能開華を、農夫が天候の回復を祈るやうにしては待つてゐられぬ。いかなる權謀術策を用ひるとも、この際、一か八かの新作發表會くらゐは、金を惜しまず積極的に催すべきだ。——かう考へると、彌千代のあたまは突如、モノメニヤックな廻轉で、矢も楯もたまらなくなる程、じいんじいんと唸つてくる。謂ふところの藝術的な昂奮で、早やアグリのことなど下界の塵芥にも思ひなされて、例の天上の戀の思想でいつぱいになる彌千代であつた。

この問答があつた直後、彌千代はふいにアグリの出入りを差し留めて、今後一切、欣也自身も手を切るから左樣心得てもらひたいといふ使者を、わざわざクロフネまで赴かせた。使者は、こつそり夕方前のカウンター臺の蔭にかくれて、そんな口上を申渡したあとで、一萬圓の手切金をアグリに與へて引きあげた。その時、何げなく手を出して取つた金ではあつたものの、あとでアグリは腹を立てて、「何よ。たつた一萬圓くらゐの端た金を！」と、えらい權幕でクロフネを飛び出したが、途中で氣持が挫けてしまつて、銀座の喫茶店から青山へ電話をかけた。しかし、彌千

代も、欣也も電話口には現れず、秘書と稱する用心棒が、先生たちお二人とも、圓滿な合議の上でお決めになつた事柄だから、これ以上の掛け合ひは無益だらう。多分、近く欣也先生自身の筆で、アグリのもとへ縁切狀が屆く筈だと說明した後、なほも業腹でぶつくさ呟くアグリに、

「だけども、一萬圓が不足といつたつて、靴の一足も買へるぢやねえか——貰つときな」と下品な卷き舌でいつてのけて、ガチャリと電話を切つてしまつた。

かかる男が、あのハイドンだのチャイコフスキイだのの大きな肖像寫眞の掛つた廊下の電話口の前で、女給だとみて、アグリを輕く手玉にとつたつもりでゐるかと想像すると、アグリのやうな、難しいことを考へない女といへども、ハッと時ならぬ衝擊に似た感情で、彌千代や欣也の人間性の薄暗がりについて考へ込む。「案外、こいつは、インチキな食はせものさ！」けれど、アグリなどの生活では、相手を窮極に否定する慣はしには惠まれてゐず、却つて、むかうがむかうならといふ反射神經ばかりがムクムクと動き出して、それでは一つ、欣也の面の皮を剝いでやらうといふやうなことを思ふのだつた。

アグリが考へ付いたのは、朝子であつた。朝子は子供を墮ろしてからも、時折、欣也と密會は續けるらしいが、それとなく傍觀して氣の毒な程、欣也のことを思ひ患つてゐるのであつた。元

來、アグリは、欣也と關係を生じた直後に、その變らざる愛情の足留め策として、朝子を欣也に供したやうな結果になつた。つまり、朝子といふ見せ金を示すことで、アグリは、いはば閉されんとする情念の隘路を、通しておかうと考へ出したわけであつたが、今度は、いつたん失はれたものを呼び返すため、又してもこの朝子を利用しようと思ひ立つた。朝子は或る日、アグリに呼ばれて、クロフネの便所の前で、こんなことを囁かれた。

「朝ちやん。あんたは、鷹取さんをどう思ふ？」

「さア、どう思ふツて……」

「いえさ。ハッキリ訊くわ。あの人に未練あるの。それとも、ないの？」

朝子の瞳が鈍く霞んで、その意のあるところを沈默によつて應へた。

「さう？　ぢやア、やつぱり別れるのは、いやらしいわね。——でもねえ、朝ちやん。あたし、萬一、あんたがあくまで鷹取さんのことを思つてるなら、どんなことでもいつてあげるわ。でもあんたも、大體、近頃、ちよいちよい外で、會つてるんぢやアない？」

「ええ」

「なら、もつとドシドシいつてみればいいぢやアないの。自分で考へてる要求は、いつてみるな

ち、いまのうちよ。もし、商賣させてもらひたければ、さういつてみるのもいいし、氣の利いたアパートにでも入りたければ、權利の三萬や五萬くらゐは、先づ貰つておくことよ」

「いいえ、お姐さん。あたし、特別、そんな考へは何もないわよ」

「へえ？　ぢやア、どういふのよ？　ただ漠然と、あんたが、ここで働いてゐて、むかうの都合のいい時だけ、ちよくちよく泊りに行つたりするだけ？——慾がないわね……？」

「お姐さん！」と居堪らない顏を起して、朝子はぢいツとアグリを見つめた。ふとその面上で燃え立つやうな或る勢ひがうらうらと漂つてゐる。「あたし、そのはうのこと何も考へてゐやアしないのよ。でも、あたし、出來たら、あの人の奥さんになりたいのよ……」

「奥さんに？　だけれど、あの人には、物凄い奥さんが付いてるでせう？」

「別れてくれる氣はないかしら……」

「オホホ。朝ちやん。さういつちやア何だけれど、もし、あんたが本心から、そんなこと考へて待つてゐるなら、あたし、見ちやアゐられないな」

「どうして？」

「どうしてといつたつて、——だつて、朝ちやん。あの金魚女史のこと考へてごらんな。今更、

絶對に、鷹取さんを放すことがあるもんか」
「でも、肝腎の鷹取さんは、どうでせう？」
「これも、だめだわ。――あら、ごめんなさい。あたし、こんなこと、ツケツケ何でもいつちやつてさ。でも、公平に見たところで、どつちも、どうにもならないといふ氣がするわね……」
「あたし、それなら別れるわ」と、朝子は何か見えないものに對して、抗議するやうな口調になつた。
「うん」と、しかし頷きながらも、アグリは何も別れさせたいのが本望ではない。出來れば別れると見せかけさせて、そんな假象を振り翳しつつ、やはり欣也を、朝子にも、自分にも、強く惹き寄せたいのが本音であつた。つまり、アグリは、從來、クロフネその他の酒場を轉々するうち、數々のお客相手に、わが身一人で果してきたやり口を、いま、朝子に丹棒擔がせ、繰返してゐるに過ぎないのである。
「まア、いいでせう。ぢやア朝ちやん。一度、あたしに任せてごらんよ。實は、あたし、他のことで鷹取や金魚女史にゆつくり會ふことになつてるのよ。――で、しかし、あれだわね。根本は、あんた、あの人の奥さんになれなきやア、すぐにも別れてしまひたいのね？」

「ええ、さうよ」
「負け惜しみぢやアないんだわね？」
「ほんとなのよ」
「いいわ。――わかつた」
と、アグリは、そぞろ感に堪へぬといふ面持ちで、
「あんた、案外純情ね。でも、それ、無くちやアおしまひだわ。あんたの齢なら、まア、それくらゐ純情でゐて、いい加減よ。あたしだつて……」
そこまで喋りながら、二人は再び便所の前からクロフネの店のなかへ入つていつたが、アグリは、朝子の、このやうな潔癖さを別にふしぎとも思はなかつた。朝子は、たしかに潔癖にちがひない。が、世のつねの潔癖さから、かなり掛け離れた點があるので、誰の目にも、ハッキリそれとは映らないのだ。たとへば、それは、ただ單に欣也ひとりを對象とする潔癖さで、當の欣也に彌千代のあることを問題としてゐながら、その欣也が、朝子のほかに、アグリとも關係があることを何も考へようとしないことが妙であつた。それは觀念の或る脱落で、アグリが單に女給として欣也と繋つてゐるからにちがひなく、朝子も、やはり古い日本の女たちと同じやうに、身分あ

つての人間――だから何の身分もないアグリには、何も拘泥を感じない、といふ底の觀念に、知らず識らずに支配されてゐるからにちがひなかつた。

アグリはしかし、心中深く期するところがあつたと見えて、その後間もなく、欣也を夜ふけの銀座にひつぱり出すことに成功した。二人は、小さな飲み屋で會つた。そして多少の押し問答を重ねた擧句、遂に最後の切り札として、アグリは、朝子の別れ話を持ち出したのだ。欣也は、いはれて、ふいにハッとつぶらな瞳を瞠つたけれども、すぐさま鼻でせせら笑つて、

「別れたいといふものは仕方ないさ。ぼくも、去る者は追はない主義だ。朝子も新しい生活に踏み出すはうが幸福だらうよ」

「ヘン、だ。――あんた、そんな涼しいことをいつて、いいの？」

「よくも惡くも仕方ないことぢやアないか」

「仕方がない仕方がないで、平仄を合せてりや、浮世に悲劇も喜劇も起りませんよウ。――ほんとに、あんたといふ人も案外な……」

「いや、しかし氣の毒かも知れないけれど、結局、それが朝子にとつても幸福になると思ふよ」

「好いて、子まで生ませた女の仕合せを、人さんに任せッきりとは聞えませんよ」

欣也はすつかり閉口して、ここは早々に逃げるに限ると考へた。

「しかし、アグリ。――ぼくは、いよいよ眼の前に大仕事を控へてるんだ。それで、實は、ここ暫く、夜も眠らずにその仕事に打ち込んでるのさ。ぼくはもう、生きた人間のうようよする地上の事件には、何の發言も持てない男になりつつあるんだ」

「難しいこといつちやア分らないわ」と、アグリは次第に酒で絡むのに快感を覺えてきて、何とかぐづぐづこねくり返して絡んでゐるうち、又、ずるずるべつたり欣也と久しぶりの逢瀬がひらけると考へてゐた。けれど、今夜、欣也の樣子が、たしかに彌千代や用心棒がいつたやうに、普段とは違ふのだつた。それが、いよいよアグリの心を亂した。「よう、鷹取さん。可哀さうとは、思はないの？　あの子、あれで、あんたの手で、女になつた人間よ。それが子供まで孕ませられて、そいつを又、處置させられて、それで浮世や地上に御用がございませんでは、あんまりよ。――ねえ、鷹取さん。よう、鷹ちやん。ほんとに、あんたは、いつまで金魚さんと食ツ付いてるのよ？　朝ちやんの純情が可哀さうとは思はないの……？」

欣也は苦蟲を噛みつぶしたやうな顏付きで聞いてゐたが、やがて、ぬうツと無言のまま立ちあがつた。アグリが留めれば、突き飛ばしてでも立ち歸る勢ひが、ふと漂つた。

「あら、もう歸るの？　いいぢやアないの……」
と、果してアグリが惡留めすると分つてゐたので、欣也は、いささかキッとなつて、
「おい。アグリ。おれも、朝子に出來るだけのことはしてやるさ。――いつたい、金でも、頼まれて取りにきたのか」
「十萬圓。高かアないわよ。――いえさ、あたし、別に朝ちやんに頼まれたわけぢやアないけど、まア、あなたの地位からいつちやア、そこンところが普通の相場よ」
「うむ、いや、十萬圓か……」
欣也は大見得きつた途端に、その金額で、いささか出鼻を挫かれたのである。彼は十萬圓は高いと思つた。そこで、いつたん出しかかつた財布の紐を締め直すやうな態度で、まア考へておかうといつて、その小料理屋を出ていくのだつた。
半月經つた。
秋晴れの或る一日、銀座界隈から日比谷、丸ノ内のはうにかけて、應取欣也の名をデカデカと書きしるした大きな立て看板が、いくつも街頭に掲げられた。彌千代が欣也を驅り立てて、遂に、新しい作品を完成させ、一夕、有樂町の或る會館で發表させる運びまで漕ぎ付けたのだ。五十三

歳の彌千代にとつて、いよいよ天上の戀が實現するか否かの岐路で、もし、この催しが成功するなら、欣也もおそらく昨日までの欣也ではなくならうといふのであつた。

當日、樂壇關係はもちろんだつたが、他に文壇畫壇を始め、大小のジャアナリストから一般の友人緣者が多數招待されてゐるのであつた。アグリも、クロフネへ飲みにきたお客の手から當夜の招待券を貰つてゐたので、音樂はとにかくとして、噂れの檜舞臺へ望まうとする欣也を捉へて、最後のいやがらせをいつてやらうと考へた。前夜、彼女は、朝子を誘つて、その會場へ一しよに出かけてみようといふと、朝子は淋しく笑ひながら、行つてもいいと答へたのである。そこで、直接、その會館の正面玄關で待ち合せることを約した。

その日、約束の午後六時きつかりに、アグリは正面の大きなドアの内側で待つてゐたが、美しく着飾つた男女のかたまりが次々に潮流のやうに入つてくるのを見送つたきり、遂に朝子とは會へないままに、開演のベルを聽いた。もつとも、當夜のプログラムに從ふと、最初は、知名の音樂家の特別出演といふことで、ショパンのピアノ協奏曲第2番と、ワーグナアの「ニュルンベルクの名歌手」といふユウモラスな、お祭り騷ぎじみた曲をわざと演奏した上で、いよいよ鷹取欣也が自らピアノを擁して、處女作「暗く果てなき眠り」「懸崖」「うしなはれし少女の面影」の三

曲を發表することになつてゐるのだ。

アグリが、人氣の絶えた玄關の端ツこに立つてゐると、程なく廊下のむかうから、氣の鎮まるやうなピアノの曲が洩れてきた。しかし、それはアグリにとつては極めて退屈な連續音で、何のために、人がかういふ音樂を昂奮したり感動したりするのかは解せなかつた。

演奏が次々と續いて行つた。けれど、遂に朝子はそこに姿をあらはさないので、最初に意氣込んで乘り込んできたアグリも、だんだん夢から覺める氣分になつて、もうそれ以上、立つてゐることが出來なくなつた。アグリは、ちえツと舌打ちをして、未練氣もなく、さつさと會館を出て、いくと、すでにネオンの美しく滲んで流れる夜の街さして消えていつた。ところが、アグリの立ち去つた後、豫定通りショパンもワーグナアもぢやんを演奏されてしまつてから、そもそも夕方、逸早く樂屋へ姿を見せねばならぬ筈であつた當の欣也が、どこにも見當らないといふ騒ぎが起つた。客席には知らせないが、樂屋は上を下への大異變で、何人かの若い男女が、沈痛な思ひを怺へて、電話に、タクシイに、といふ慌て方を重ねたけれど、やはり欣也を發見することが出來ないのだつた。

そのため、豫定の休憩時間の三十分を、更に三十分延長したが、それも忽ち過ぎ去つて尙、欣

也の手懸りさへ得られない。

「奥さん、奥さん。こりや、いつたいどうします？」

と悲壯とも狼狽とも付かない顏付きに歪められた世話係が、結局、最後の宰領を仰ぐのは、彌千代以外にはないわけである。

その晩、彌千代は、純白のイヴニング・ドレスを着飾り、多くの知人に取り圍まれて、腕といはず、頸といはず、殘る隈なくキラキラと寶石類や貴金屬を光らせながら、最後の欣也の演奏を、所謂、天上の戀として聽き澄ますため、正面第三列目の椅子に坐り、妙なる雰圍氣を湛へながらシットリと靜まりかへつてゐるステージを仰いでゐたが、遂に思ひがけない異變の報告に接すると、ふと息も絶え絶えに、

「白瀨先生にお願ひして、もう一度ワーグナアを……いえ、モーツァルトを……ワーグナアを……」と口ごもりつつ、遂にどさりと窮屈な椅子の間に、崩れるやうにして倒れかかつてしまふのだつた。

續

絕壁

1

欣也の行方は、暫く誰にもわからなかつた。しかし、元來、女あそびにうつつを抜かし、諸事萬端、成るやうになつてしまへ、と投げやりにして顧みぬ底の男ではない。若い時から、所謂、放蕩の味は存分に心得てゐる欣也だけれど、その放蕩が、いかに精神の脱落であるかといふことは思はずに、放蕩の效果について、さも意味ありげに、いろいろ考へ耽る性癖がある。つまり、欣也は、この世の中へ生れ出てから、自分だけは、根本的に無意味な言動に携つたことがなく、退屈するにも、面白がるにも、すべてこれは、自身の内的思想の深い場所で、人生の眞實と直接に繋つてゐる、と考へたがるやうな男であつた。これは一種の性癖に過ぎないもので、性癖である以上、さういふ心理的な假象（アピアランス）は認めねばならぬけれど、他人の眼から眺めれば、何といい氣な男だらう、といふやうな筋合ひのものであつた。

もつとも、欣也は、さういふ心理の假象（アピアランス）で、自他をあざむいてゐる人間だけのことはあつて、

無意味な放蕩に耽つたところで、何とか、これに意味を求めようとして、アクセクと智慧を絞る。といふことは、人並みに女あそびをやりたいことには變りはないが、やつた上で、そこに聊かコジツケめいた理窟や效果を賦與しようとして、深刻に考へ込む。だから晴れの新作發表會の會場に姿を見せず、突如として行方をくらましてしまつたことも、ただ單に、氣おくれしたとか、ずるけてしまつたといふのではなく、やはり生來の欣也らしい淺墓な虚榮心が、脂肪のやうに彼の全身をムチムチと蔽ひ盡してゐたのである。

欣也は、すべてを不利だと覺つて、この手の込んだ新作發表の演奏會を、態よく逃れてしまつたのだ。妻の彌千代は、それとは知らず、心盡しの畫策が悉く無駄に終つて、飛んだ赤恥を掻いたけれども、欣也は欣也で、ここで乏しい自己の才分といふものを決定的に公衆に曝露するのを怯へがたく思つたのである。早くいへば自信がないのだ。しかし、自信のないことを人に知られることは死ぬよりも辛いこと故、欣也はこのやうな謎めいた失踪が、實は、彼の、深い藝術上の憂悶であるやうに、世間に思はれたくてならぬのだつた。なべて、賢者といふものは、意味深重な樣子をしたがる。欣也も、いざ演奏會といふ土壇場まで、何や彼やと手の込んだ道具立てを進めながら、イキナリ、世間の意表に出て、姿をくらますといふことのセンセエショナルな效果だ

けは心得てゐた。しかし、彼には、眞の意味の憂悶も懊惱もありやしない。一方で、かく考へ、又、一方で、クロフネの女給朝子と、痺れるやうな情慾に耽りたいのが目的だつた。

だが、その失踪以來、四日目に、欣也は、彌千代が必死になつて探索させた用心棒の濱本の手によつて、小田急沿線の經堂に程近い朝子の下宿にゐるところを突き留められた。欣也は、ずつと朝子の下宿にゐたわけである。濱本は、クロフネに張りめぐらした情報網をたぐりながら、やうやく朝子のもとへ踏み込んだ時、欣也は、薄汚い四疊半に寢轉んで、朝子と一しよに、埒もない流行歌をうたつてゐるところであつた。

「——先生……」と云ひながら、濱本は庭さき傳ひに、階下の四疊半を覗くと、欣也はハッとして寢返りを打ち、一瞥するや、思はず顏が赤くなつた。

「ああ、君だつたのかい」と呟く欣也の恥らひに滿ちた顏は、何も、この場で、朝子と共に潛んでゐたからといふのではない。さういふ種類の、道義上の衝動などは、始めから欣也には無緣のことだ。欣也の面上をホンノリと染めたものは、いま、彼が、日頃こッぴどく輕蔑してゐる低俗な流行歌を一心不亂に口ずさんでゐたからである。それを濱本に知られたことを恥しく思つたのだ。

「だめだよ、濱本。――よそのうちへ、默つて庭さきからやつてくる奴はないぜ」
「エッヘッヘ。――いえ、實は、下宿で御案内をたのみますと、いいから、ずつと縁側へ廻つてくれと云ふものですから……」
「朝ちやん」
欣也は、照れて濱本の顏も見られぬ朝子の肩をそつと押して、
「どう？　あのサントリイ、まだ殘つてたかい」
「あるわ」
そこは、やはり商賣柄で、朝子はさういふ一ト言で、これが早くも濱本に供される自然な饗應物にならうと覺つて、二の句に及ばず、小さな茶グンズのガラスを開けて、ウイスキー罎を出した。
「あがれよ、濱本。まア一杯、やつて行けよ」
「へい。恐れ入ります」
濱本は恐縮しつつも、圖々しい反面を隱さうとはせず、縁側の沓脫ぎ石に短靴を脫ぎ捨てて、のつそりと猫のやうに疊へあがる。濱本は眼を細くして、欣也と對した。朝子は、二人の間に、

圓い粗末な樅材のちやぶ臺を引つぱり入れて、ちひさなウイスキー・グラスをこつんと置いた。
「さア、やれよ……」
「へい」
と、浮き立つ物腰でゐる濱本は、酒に眼がないといふよりも、元來、主人の恩寵を蒙るためには、少々の不義不正をも敢て意に介さぬといふ底の人間の欣びである。酒もうまいし、尙、その酒が主人の好意を意味することの嬉しさで一杯である。濱本の雙頰は、かすかな感動でピクピクしてゐた。
「エヘヘ、先生の流行歌は、物凄く御上手でございますな。又、事實、一生懸命うたつていらしたやうですもの……」
「聽えてゐたかい」
「玄關まで筒抜けでした。——そこで、あツしが、アレ、あの歌をうたつていちつしやるのは先生ですな、と云つて笑ふと、ここの下宿のをばさんは、ああ、それぢやア庭さきからお廻んなさい、と全然信用してくれたんです」
「いやな奴だよ。——だが、ぼくは、あんな流行歌など、ちつとも面白いと思つちやアゐないん

だ。ああいふものは、單に口さきだけの、鼻唄みたいなものさ。つまり、ぼくなど、自分の內面的な問題と關係のない歌なんか、とても本氣でうたへやしないよ。——あんなの、座興さ……」

「エッヘッヘッ」

と、濱本は笑ひで濁すが、しかし實は內心で、いま先刻の欣也の憑かれたやうなうたひぶりを、一種、奇妙な感動で耳にしたのだ。濱本も、いま、食ふために彌千代たちの東京音樂出版社の用心棒を勤めてはゐるものの、根は、まるツきりのヨタモノではなく、どうやらインテリ崩れといへさうな男である。だから、ハイドンだの、モーツァルトだのといつたところは解らなくとも、或る人間が、ハイドンに向くか、「湯の町エレジイ」に向くか、といつた程度の大ざつぱな判別くらゐは付けられる。そして濱本は思つたのだ。

「こいつは、うちの先生も、わざわざ有樂町の新作發表會を逃げた筈で、むしろ夜な夜な銀座の酒場などを流して歩くアコーデオン彈きにでもなつてゐたら、存外、一流になれたかもわからねえぞ」

つまり、彼は心から欣也の流行歌に感服したのだ。しかし、欣也は、その歌を恥ぢるよりも、その歌をうたふこと自體を恥ぢ入つてゐる。これが濱本には解せぬのだつた。

「先生。しかし、どうして、有樂町へは、姿をお見せになりませんでした？」
「うむ。――みんな騒いでるかい」
「それどころぢやアございませんな。奥さんはガッカリなさつて、それに御心配やら何やらで、半病人みたいにおなりですよ。あツしも、見ちやアゐられませんので、ずゐぶん方々へ、脚をすりこぎみたいにしたわけなんです」
「しかし、ここにゐることが、よく分つたね？」
「そりや、先生――」と云ひかけたが、濱本は傍で煙草を喫つてゐる朝子を憚つて口をつぐんだ。
欣也は、濱本などによつて、この隱れ家を知られたことを心底から、うとましく思ふのだつたが、さて、しかし、そこは欣也らしい見榮坊で、これを彌千代に內密にしておけよ、と云ふやうな男ではない。欣也はむしろ傲然と構へてゐた。又、そのやうな構へ方が、この種のケチ臭い人間どもに、これ以上、付け込ませないだけの效果を備へてゐることもよく辨へてゐるのであつた。
「ぼくは歸るよ。いや、そろそろ歸らうかと思つてゐた矢先なんだ。君が來たから歸る氣になつたんぢやアない」
「さうして下さい。話は、どんなにでも恰好は付けられます。ともかく、一度、みんなを安心さ

せてやつて下さいませんと……」
「いいだらう、――一しよに歸るか」
「さうなさつて下さいまし」
「よし。一杯飲んで、引きあけよう。ぼくは、あんまりいけないけれど、君、ゆつくりやつてくれよ」
朝子は、傍で、この問答を憂鬱な思ひで聽き入つてゐたのだけれど、むしろ彼女は、この濱本が、すべてを穩便に、手際よく、きれいに運ばうとしてゐる點に、失望したのだ。といふわけは、この際、いつそ濱本が騷ぎ立てて、彌千代が、朝子と欣也との關係にイキリ立つと、思ひがけない運命の急展開が、そこから欣也の破綻となつて生み出されはしないかと考へられるからであつた。
時間が經つて、やがて欣也が濱本と打ち連れだつて出かけようとしてゐる時、朝子が突然、苦痛に堪へられぬといふ面持で、「ちよつと――」と、欣也を物蔭に呼び込んだ。
「何だい」
「あんた、ほんたうに行つちやふの？」

「ああ、歸らなきや仕樣がないさ」
「どこへ歸るの？」
と、朝子の瞳が、イキナリ、ぎらぎら光りだして、すべての女の備へてゐるあの意地惡い無理解な相貌をうかべ始める。女は、自分の素地を出さうとする時ほど、ふと裝つたやうな顏になるものだ、と欣也は胸のうちで考へ込んだ。
「そりや、どこへ歸ると云つて青山さ」
「さうでせう？　すると、やつぱり奥さんのところでせう？」
「そりや仕樣がないぢやアないか」
「さうだらうと思つてゐたわ。――いいわ。それぢやア早く歸つてあげて。あたし、ぐづぐづ云つたつて始まらない……」
「朝子！」
と、やさしい、甘ツたるい聲を欣也は出した。
「うん？」
すると、ぐにやりと欣也の兩手が彼女の肩さきを引き寄せて、すぐ二三間と離れてゐない緣側

に濱本を待たせたまま、石竹色の欣也の薄い唇がピタリと朝子のそれを蔽つた。朝子は、急にタラリとなつて、一擧に魔醉を嗅がされた人間みたいに、あらゆる抵抗をなくしてしまひ、もはや世界を喪失しようが、この欣也の心を失ふまいと必死になつて自分を抑制してゐるのだつた。

欣也が立ち去つていつた直後、朝子は夢中になつて、姫鏡臺の前に坐つた。氣をまぎらはせるためといふより、むしろ自分の哀しさをごまかすために、彼女はお化粧でもしようと思ひ立つた。

しかし、深刻な顏付きで、せッせとコールドを塗りつけてゐる手のさきは、やがて世にも情けない空しさで、とろりと痺れてくるのであつた。ああ、むなしい、と朝子は思つて、こつんと指で鏡のなかの自分を叩いて、いま、かうして欣也の去つたあとの空氣が、いかに大きな空虛さを湛へてゐるかに、氣が付くと身悶えするやうな淋しさに陷つていく。

朝子は、何もする氣がしなくなつた。

少時、茫然と坐つてゐたが、ふいに憑かれたやうなその瞳に、或る思ひつめた光りが射した。彼女は、立つて、押入をがらりと、開けるといま、それが一分一秒爭つて仕遂けねばならぬ仕事ででもあるかの如く、ごそごそと夜具の下に手を突ッ込んで、或る小さなタバコの箱のやうなものを摘み出した。

「さうだ。これを全部、かうしておいてやるんだわ……」

左手に、その小箱を摘んだまま、朝子は、一方で細い縫ひ針を一本、出した。その小箱に入つてゐる品物とは、欣也と朝子の祕かに二人ツきりになる際に必要とするもので、かつて下落合の産院で味つたあの慘澹たる苦しさを再び繰返さぬための豫防の器具だ。朝子は、それをいやらしく考へた。そして、このうとましい加工品が、窮極的に、この人生での二人の魂の密着を妨げてゐることを小面憎く思ふのだつた。

朝子は、赤い模様の入つた小さな小箱から、その品を一つ一つ、丹念にひつぱり出して、片手でその尖端に、ぷすり、ぷすりと目立たぬやうな穴をあけた。灰白色の薄い表皮に、有るかなきかの小さな傷が付けられていくのであつたが、朝子はこんな小さな穴を搔いくぐつて、いつたい、どこへわが身を驅り立てていくのであらうと思はぬでもないのだつた。しかし、それは行爲自體の考へる性質のものであつて、行爲以外のいかなる思考も何の役に立たない底の人生の或る盲目の意志であることを、朝子の心も、薄々覺つてゐるのであつた。

「これでいいわ。かうしておけば、まさかあの人だつて氣付きやアしない。――へへへ、よオし、いまに見ろ……」

と、空洞から跳ね返つてくるやうな聲を出して、朝子は、わざと捨て鉢な眼のいろをする。彼女は、これを、自分のあざとい復讐とは考へずに、切ない愛情であると思つた。そして、眼には、悪魔的な幻想を湛へながら、心のなかでは、その幻想を殆んど制御しきれなくなつて、ほろほろと涙ぐむやうな心細い思ひになつていくのである。

2

欣也は再び青山高樹町の家に歸つた。だが、彌千代はあれほど絶望的な思ひをなめさせたことはオクビにも出さうとせず、最初に發した呼びかけは、幾分の微笑さへ混へたやうな、かういふ言葉だ。

「あなた、ずゐぶん苦しかつたでせう？」

「ああ」

と、欣也は、母親に縋り付くやうに、まじまじと彼女を見守る。いや、つまり、これも作爲の仕科であつて、盲目的に愛されてゐるものの直感的に持ち出すところの自己防衛のゼスチュアだつた。欣也は決して辯解しないし、やけくそに威張りもしない。さればといつて、自分でやたら

に卑屈になつて、この齡上の細君から對等の立場をなくすやうな愚も演じない。表面、さりげなく突ッ放しておくと見せて、一方、いかにも愛に餓ゑたかのポーズを裝ひ、彌千代の心を、搦手からいなしてやらうと、企ててゐるのであつた。

「あたし、もしかすると、あなたが死ぬんぢやァないかと思つたくらゐよ。でも、そんなことがなくて、どんなに嬉しいかも知れやしないわ……」

「冗談ぢやァない。こんなことで一々死んでちやァ、たまらないや」

「でも、あたし、事、お仕事に關係したことでせう、それだから……」

「深刻に考へなくてもいいさ。——だつて、ぼくは俗物だからね。無類の俗物として生きようとしてるんだから」

「いいえ、あなたは、そんな人ぢやァないわ」

「さうだよ、ぼくは俗物だよゥ……」

欣也は頬ッぺたをふくらませて、この、他愛ないアイロニイを愉しんでゐる。そんな欣也を眼のあたりに見据ゑてゐるのは、彌千代にとつて、世にも愛しい對象で、さまざま男漁りをしてきた彼女が、十一も齡下のこの欣也を、敢て自分のものとなし得たよろこびが淋々として官能のほ

とぼしりとなり、全身を痺れさせてくるのであつた。
「あなた、それはさうと新聞をごらんになつて？」
「いいや、見ないよ」
「あら、まア」
と、彌千代は急に氣が付いて、すぐ手を叩いて女中に昨日の新聞を持つて來させた。
「ごらんなさい。――で、濱本は、そんなこと何も云はなかつたの？」
「聞かないね」
と、受け取つて、パラリと社會面の隅をひらいてみると、成程、欣也の眼に付いたのは、例の演奏會のお流れになつた事情と、自分の失踪問題が、ほんの小さな藝界ニュースとして、書きしるしてある。
「拙いなア、こんなことを出されて……」
「さうでせう？　ですから、あなたも、もつと自重して下さらなければ」
「いつたい、どうして、こんな記事を出させたんだ。この新聞なら、重役の白石さんもゐる筈だ。近頃、白石さんに對して、油を切らしてゐるんぢやアないのかい」

「そんなことはないわ。つい、半月ばかり前に、タバコをスリー・ボックスだけ屆けておいた筈でせう？」
「それにしちやア、こいつは拙いな。いつたい、どうして、こんな事件を嗅ぎ付けやがつたのだらうな」
「ウフフ……」と彌千代は、それが癖の、ふくみ笑ひを洩らしてから、娘のやうなうくり聲で、
「――實は、あたしが悪かつたのかも知れないわ。そこの記者に、あたし、あんまり、あなたのことを心配して、餘計なことを洩らしたからなの――つまり、あたし、あなたが、藝術上の煩悶から、自殺でもして下さらねばいいがと思ふ、といふやうなことを、ちよつと云つたの。すると、早速、その記者がネタにしたのよ……」
「どうして、そんなことを云つたの？」
「事實、あたし、そんなことを考へたのよ。その點は正直、ウソはないのだけれど、一つは、それが若い記者の眼をごまかすためで、假りそめにも、あなたがつまんない女などと、どこかへ潜んでゐるとは思はれたくなかつたから……」
「ははア、すると、反間苦肉のカムフラージかい」

と、欣也は、ちよつと濡れたやうな眼で、彌千代を見つめた。感謝の思ひ、といふよりも、さすがにうまく仕出かした、といふやうな、やや讃嘆の思ひ入れがホンノリ欣也の雙頰を緊張させる。元來が、かかる權謀術數に富んだ女でない筈なのに、そこまで自分を思つての、止むにやまれぬ心意氣を傾けるとは、どこまで可愛い本能に生きる女であらう、と欣也は、痛く感動するのだ。

「でも、いいでせう？　これで、今度の演奏會がお流れになつたことも、まるツきり、無駄にはなつてゐないんですから。あなたが、いかに良心的な藝術家か、といふことを、思ひがけなく世間に知らせる結果になつて、むしろ、あたし、ホッとしたわ」

「プラス・マイナス・ゼロとでもいふところだな」

「あら、プラスでせう？　お金なぞは、たかが、知れてゐるんですもの。結果としては、あなたの所謂、唄はぬ鶯といふ存在に、却つて、いくらかハクが付いたかも知れないくらゐよ……」

かういふ彌千代の方途の付かぬ口説に接してゐるうちに、欣也も妙な影響を受けてきて、――いや、待てよ、いつたい、彌千代の考へてゐる良心の煩悶は、もしかすると、このおれの深い內的思想として存在してゐたかも知れないぞ、と考へ直す思ひになつた。つまり、欣也は、演奏會

を全く無視して、朝子の下宿へ逃げ込んでしまつた事實に、何らかの意味付けを試みたくなつてくるのであつた。そして、それが、彌千代の言葉をキッカケとして、天の啓示であるかのやうに、パッと欣也の虚榮心を内側から照らしだしてくるのである。欣也は、その妄想に縋り付いて、自分でもよくわからない自分の價値を曳きずりだしたく思ふわけだ。してみると、一見、欣也のうつつを抜かした朝子なども、實は欣也の藝術的な良心を手探りするための方便で、朝子自體は、何のねうちもない存在だ、といふことになる。欣也は、かういふ考へ方で、この三晩四日の失踪中を、朝子の汚い下宿で暮してゐたことを、さもキリストの苦難に滿ちた茨の道であるかの如く考へてみるのであつた。

「でも、もう止しませう、今度の話は――」

彌千代は、内心、仕澄ましたり、といふ滿足感で、そんな欣也を、惚れ惚れした眼で眺めてゐる。けれど、一面、欣也に對して油斷出來ない點もあるのだ。彌千代は、當面の出來事よりも、むしろ今後に、それが危險な爆發物として殘されてゐることを考へてみるのであつた。欣也自身は、いまも彼女が、アッサリ手玉にとつたやうに、その埒もない遊蕩心に、藝術だの良心だの、といふやうな勿體付けて、ひとりでに意味なきところに意味の重荷を負はせるやうに仕向けてい

けば、自ら彼は金縛りみたいになつて、輕はずみを愼しむやうな臆病なところもあるのだ。けれど、問題は、相手の女だ。何しろ女好きのする欣也であつてみれば、ただ單なる風が梢を嬲るやうな遊興にも、相手が思はぬ熱をあげてくる怖れは十分あつた。まして、そこに、金の問題でも絡んでくれば、いま、ここで、藝術でころりと參る欣也でも、ひたむきな情念の一たらしで、又、ころりと女に惹かれぬとは限らないのだ。彌千代はそれが心配でたまらないが、しかし、欣也に、正面切つて、どこの女と、どこで遊び暮してゐたのか、といふことは、わざと問はない。端たないと思はれるのがいやではなく、訊いても、どうせ、まともな返答を與へないのが分り切つてゐるからである。用心棒の濱本だつて、おそらく彌千代が何と訊いても、先生から云つちやアいけないと命じられてをりますから、と只管恐縮して口を割らぬのが知れ切つてゐる。だが、しかし、彌千代は、いづれこの正體を的確に突き留めて、適切な處置を施さねばならぬだらう、と別な頭で鬱々と考へめぐらしてゐるのである。

3

彌千代は、心に打擊があれば、却つて故意に表面のさりげなさで、わが身を美しく裝はねばな

らぬことを、本能的に辨へてゐた。もし、假りに、心を病めば、彌千代のやうな人工の粉飾で築きあげられた美しさは、どこかバランスを失ふからだ。だから彼女は、自分の心が嫉妬や、不安で醜く歪んでくるな、と覺れば、狂熱的な熱心さで美容院へ足を運ぶ。家にあつては、腕時計と睨めッこで、ホルモン注射やヴィタミン注射を、せッせと難行苦行のやうに、たるんだ皮膚に打ち込むのだ。だが、一昨年、外科手術の大家によつて、額の皮膚を切り取り、あの惡魔のやうな老醜の前ぶれである額の皺をなくするために、ぐッとおでこの薄い皮膚を上方へひつぱりあげておいたけれど、近頃は又、耳のうしろの、ダブダブした綫んだ皮膚が氣になつて仕方ない。三面鏡の前に坐つて、横睨みして見つめてゐると、背後に廻る女の年齢といふものは、どうしやうもないのである。

「ちえッ、ほんとに、いやらしいわ……」

と、彌千代は心の醜さと、その表面の肉體の衰へとが、かくも見事に一致すると、それを生得のおのれの姿とは考へずに、何か自分が魔物にでも取り憑かれたやうに錯覺するのだ。老醜は、まだしも、これを迎へる人には一抹の美しさを伴ふものだが、これを去らんとする人には、逆に、二倍の見苦しさで追ッかけてくる。彌千代は、それを垣間みた氣で、ぞッとしたやうな絶望感に

襲はれる瞬間には、さすが日頃の「天上の意」もヘチマもありやしない。生のままの人間性に舞ひ戻つて、ただイライラと欣也の情事をやつかむばかりの一個の老女に化してしまふ。かういふ時には、理性の影は悉く彼女の魂を飛び退つて、むしろいかなる無教養な女よりも下卑た態度が出るのであつた。

「――濱本來てる？　濱本、ゐたら、ちよつと呼んでくれない？」

女中が、分別臭い顏をして現れると、その顏付きに刺戟されて、彌千代は一そうイライラしながら、

「濱や。ちよつと濱本にお話があると云つてくれない？」

「こちらへお呼びするんでございますか」

「ゐえ。――先生はお書齋だらう？　ですから、あたしのお部屋に呼んでちやうだい。あたしが話したいことあるんだからね……」

入れ違ひに濱本がやつてきて、早くも彌千代の只ならぬ眼の色からこいつはいけない、といふやうに澁い思ひに閉されるのだ。けれど、どうせ會社にゐても彌千代たちの自宅にゐても、用心棒といふ格で、ただ何もせず、ごろごろと寢そべつたり、女中をからかつたりしてゐるやうな人

間だから、そんな自分の役立つ仕事は、必らず彌千代や欣也などの或る感情の荒立つ際に限つてゐる。現に、欣也の失踪事件の起つた時も、濱本は散々に彌千代のヒステリイに惱まされて、泡を食つて方々のバアや飲み屋へ、所謂、聞き込みに出かけたのである。けふも大概、それに似た命令らしいと思つてゐると、果して彌千代の切り出した話といふのが、欣也の情婦の朝子のことだ。

「濱本さん。あたし、野暮は絶對に云ふまいと思つてゐたんだけれど、あなたの良心に掛けて訊いてみたいことがあるのよ」

「へい」

「ねえ、わかるでせう？　實は今度の、先生の隱れてゐた場所だけれど、あなた、先生から、もちろん口留めされてゐるんでせうね？」

「へい。いえ、別に、どうといふことありやしません。先生だつて、無理無體に、あツしに口留めされてゐるわけぢやアないんですけど……」

「あら、さう？　でも、濱本さん。あなたは、今度、先生と一しょに歸つてきて、あたしに對しては何一つ、出先きのことは云はなかつたでせう？」

「へい」

「すると、口留めでないとすると？あなたは、勝手に先生に義理を立てて、あたしには黙つてゐようと、心で誓つてゐるわけなの？」

「いえ、何も、さう固苦しく考へちやアゐませんけれど、もし、これが分つたら、先生は、あツし以外にベラベラ喋る者がゐやアしないこと御存じですから……」

「オホホ……考へると、先生も、頼もしい子分をお持ちになつてるわね。——いいえ、だから、あたしも無理に、あなたを板挟みで苦しめようとは思つちやアゐないわ、けどね。濱本さん、あたしは先生の女房ですのよ。ねえ、わかるでせう？　あたしの苦しい氣持くらゐは多少わかつてくれるでせう？」

「と申しますと？」

濱本は、いよいよ話が核心にふれてくるので、苦澁の色が濃くなつていくのが自分でもよく分つた。しかし、そこは圖々しいといふよりも、かねて欣也や彌千代などといふ人間より、どうせわが身を一段低く考へて、その考への上で生きてきた男ゆゑに、まかりちがへば、只管恐縮の一手あるのみと内心では思つてゐる。

彌千代は、そこで一擧に無理押しすることの效果も考へ、且つ又、さういふ端たない自分を、こんな濱本にまざまざと見拔かれるのもプライドが許さないから、いくらか鷹揚な態度に戻つて、薄笑びをうかべて云つた。

「まア聞いて下さいな。――あたしも、濱本さんに、云ひにくいことをベラベラ喋れなんて註文しないわ。いえ、本當よ。だつて、いくら、あたしが嫉妬深い女でも、まさか先生の遊んだ先きを一々、あなた方から教へてほしいと云はないわ。ただ、でも、あたし、念のために訊きたいんだけど、どうなの、濱本さん。今度、先生が隱れてゐた相手の女、これからも先生と續くやうに思ひますか？」

「さうでございますなア」

と、濱本が小首を捻つて、それとなくその質問の眞意を窺ふやうに彌千代の顏をチラチラと窺ふのに、彌千代は更に押ッ被せて、

「ねえ、こんな訊ね方なら、いいでせう？　何も、これは先生のことを、內緒で、あなたにコソコソ告げ口してほしい、と云つてることにはならないものね。つまり、それは、あなたの自由な判斷を知りたいといふだけだもの……」

「大丈夫だと思ひますね」と、濱本はやや取りなし顔で直ちに答へた。「――さア、そこは、人さまに關はつたことで、まして、あツしも、さう深く首を突ツ込んだわけぢやアないんですから、よくは分りもしませんけれど、でも、まア、先生は相手を輕く捌いていらつしやる、といふところが確實でございませうな……」

「ああ、さう」

彌千代の瞳がぎよろッと光つて、

「さうすると、濱本さんは、そんな先生の氣持を、相手に、ぢつくり解らせてやることも出來るわけね？」

「は？」

「さうでせう。もし、先生が本當に相手を輕く捌いてるなら、むかうだつて、その氣持は知らねばならないことよ。だのに、下手に、のぼせあがつて、後々夫婦になりたいの何だのと、騒ぎ立てられちやア、みんなが迷惑するものねえ……」

「それはさうでございませうな」

「どう、濱本さん。――物は相談といふことがあるけれど、ここは一つ、あなたの腕で、その女

先生とがキッパリ手を切るやうに、何とか工夫して頂けないものかしら？」
「先生に内密にですか」
「オホホホ……」
と、彌千代はふくみ笑ひを示し、暫く何とも應へずに、ただまじまじと濱本の顔を眺めつくした。そして、
「――やはり、そこは、あなたの腕よ……」といつた。
濱本は考へ込んだが、ここで彌千代に露はに諾否を述べることの愚はよく心得てゐるのであつた。
「ですが、腕などとおつしやいますけれど、しかし、こいつは何といつても……」
「いいのよ。あたしは、決して、あなたが先生にまで逆らつて、どうしろかうしろとはお願ひしないわ。ただ、あなたの自由な判斷におまかせして、とにかくそんな女からあたしたちの家庭といふものを守つて頂きたい、といふだけの話なのよ……」
云ふだけのことを云つてしまふと、彌千代のヒステリックな心の波も、かなり鎭まつていくのだつたが、しかし、彼女は、自身の氣持をじわじわ壓へていくだけではなく、これによつて、こ

の濱本の心のなかにも、或る程度の暗示を織り込んだつもりであつた。云はば、濱本を頭から壓へ付けず、あくまで自由な野原に飼ひ馴らしつつ、而も、今後、彌千代に對して濱本がコソコソと、よからぬ行爲の加擔など出來ないやうな或る心理的な地盤を、設定したつもりである。

濱本はこれに掛つた。彼は、本來、男同士の思ひやりで、欣也と朝子の中を取り持つ役割が必らず欣也から命ぜられると考へてゐたのであるが、彌千代に、かういふ釘の打たれ方をしてしまふと、ちよつと動きの取れない形になつた。濱本は内心で當惑したが、それは、欣也と彌千代の板挟みとなり、どつちへも敵意を抱くことの出來ないといふ不自由さである。甲を得て、乙を喪ひ、又、この逆に、乙を得て、甲を喪ふといふことは、この種の寄食者同樣な人間としては堪へられぬことでもあつた。まして、二人が夫婦であつてみれば、一方の意を著しく害ふといふことが、いづれは他日、雙方の不興を買ふことの理は、本能的な勘によつて一應辨へてゐるところである。

濱本は、微妙な立場に直面すると同時に、これが甚だ危險な立場であることも知り拔いてゐた。下手に動くと虻蜂取らずに慘めさに陷ることも見易い道理だ。そこで、彼には窮した餘り、奇妙な自解作用が生じてきて、所謂、善人意識といふものがムクムクと心のうちに湧き出してくるのを覺つた。窮すれば、すべて人は善人になることで、最後的に自己保存の道を拓かうと考へる。

濱本も直感的に、この道を選ばうとした。その結果、先づ最初にあらはれた言動は、自然な機會をさりげなく捉へた上、欣也に對して、朝子と別れることを勸めようといふ努力であつた。

「先生。今度のことでは、表面、奥さんは何もおつしやつてはゐませんけれど、しかし實は、一通りの御心配ぢやアないやうですよ」

「さうかい」

欣也は、いやにぢつくりした濱本の話し方に、早くもピーンと或る意味の重さを嗅ぎ付けてゐた。この種の勘は欣也の獨得のものである。

「君は、彌千代と何か話し込んだのだらう？」

「いえ、別に、特に話し込んだといふやうなことはありやしません。ですけれど、奥さんの御心配は、默つていらしても相當なものらしくつて……」

「見ちやアゐられない、とでも云ふのか」

「へい」

「冗談云つちやアいかんよ。——あれは、そんな平凡な女ぢやアないんだからね。君は、もし、さういふ見方をしてるとすれば、何よりも彌千代に對する侮辱だぜ」

『しかし先生。――立ち入つたことを伺ふやうですけれど、先生は、今度の經堂は、どう思つていらつしやいますか」
「朝子かい」
「へい」
「どう思つてるといふのは、何だい」
「いえ、ずつと今後、お世話をなさらうといふ意味の……」
「ウフフフ……」と欣也は、忍び笑ひを洩らしつつ、濱本の背をぱんと叩いて、
「やつぱり、君は頼まれて、ぼくの氣持を探らうとしてるんだな。――ぢやア云つたげよう。君のために――實は、あの子は、ああいふ所にゐる女にしちやア、なかなか純情だと思つてるさ」
「へーえ?」
と、濱本は眼を圓くして、いよいよ自分が善人意識に成り澄ますより手はないと腹を定めた。
「さうすると先生は、ちよつと簡單には、お別れになりませんか」
「いよいよ一番訊きたいことを訊きだしたな。――いいさ、彌千代には、ぼくが相當惚れ込んでる、と云つといてくれたまへ……」

やや突ツ放された形になつたが、しかし濱本の强味といへば、とにかく今度は、朝子の下宿を、自分だけがよく突き留めてゐるといふ點である。かかる隱密の役割を果した男を、いくら欣也が不快になつても、ただそれだけの氣分によつて、無下に退けることはあるまいと自分を慰めてみるのであつた。

欣也は一人になつてから、この濱本の云ふことを味ふやうに考へ盡してみたところ、どう思つても、濱本の善人ぶつた分別臭さが我慢ならないものとなつた。彼は、心で、十一も齡上の彌千代の焦心をいとしくは思つたけれども、はや性のよろこびに置き去りされていく女の、手の込んだ嫉妬といふのが、どうしてかういふ濱本などを善人意識に追ひ込んでいくのかと、それがどうしやうもない或る暗鬱な氣分を與へる。欣也の意識は二重であつた。彼は彌千代といふ人間の實態そのものはいとしく哀れとも思つたけれど、彼女が自分よりも十一も齡が上だといふこの不自然な關係で結ばれてゐる五十三歳の老女は、たまらなく反撥したい。つまり、彼は五十三歳の老女を醜惡と思ふのでなく、四十二歳の自分に對する五十三歳を呪ふのである。で、もし、假りに、欣也自身が六十歳なら、彼はどんなに身持ちもよくして、或る愼ましい平凡な愛情で、五十三歳の彌千代を愛しただらう、と思はぬわけにはいかなかつた。欣也は濱本の善人意識が、ぷんぷん

鼻に付けば付く程、かかる蟲けらみたいな人間さへも、五十三歳と四十二歳の關係に影響されて、心にもなく善人ぶりを發揮したがると考へて、もう、それだけでも、五十三歳を呪はずにはゐられないのだ。

「濱本。ぼくは、朝子とアッサリ別れられないかも知れないぜ……」

と、欣也はハッキリ宣言するやうにさう云ひ切つて、早速、その晩、青山の家を出て、トコトコと小田急の經堂まで出かけていつた。すでに朝子はクロフネの店は缺勤つづきで、あとは欣也の意志によつては、完全な二號生活に入りかからうとしてゐるのだつた。

欣也は、經堂のホームを出て、驛の傍の踏切で、遮斷器のあがるのを茫然と待ちながら、心で、こんな辯解をこねくり廻してゐるのだつた。

「おれは、朝子を愛してゐるか——多分、愛してゐないかもわからない。少くとも彌千代を愛してゐるやうには愛してゐまい。しかし、おれは朝子を當分離さぬだらう。朝子の若さが、おれにとつて必要で、この若さが憎らしいのだ。だから、おれは、この若さを、朝子の身體から遮二無二吸ひ取つてしまふためにも、この薄暗い踏切の道は當分歩き續けねばならないだらう……」

ごおーッと電車が通過し、遮斷器の棒が暗い夜空さして、ガクンとあがる。欣也はよろめくや

うな氣持で、足を踏み出してみるのだつたが、さういふ心理の苦しさに直面する時、彼は日頃、高級な大人のオモチャのやうに讀みちらしてゐるアランだの、ラ・ロシュフコオだのの書物のなかの言葉をあれこれと物色し、かりそめにも、いまの自分の狡智からくる當然の心の抵抗といふものを、何とか巧みに合理化するやうな一句はないかと喘ぐやうにして頭を捻つた。もし、そこで、偶然の暗合みたいに、アランやロシュフコオの氣に入つた言葉にぶつかることが出來たならば、欣也はそれを、自己の思想の最も深い場所から行つた行爲として、僅かに自分を慰めることが出來るのだつた。しかし、それとて、程なく十分ばかり後に辿り付くあのみすぼらしい下宿の部屋で、ぐうツと彈みを以て應へる朝子の若い肉體を抱きしめるまでの、道草みたいな妄念だといふことを、誰よりもよく欣也は心得てゐるのであつた。

欣也は、いくらか猫背になつて、さも思想の重荷に撓ふかのやうに仔細らしい面持ちで、この暗鬱な郊外の石ころ路をトコトコと歩いて行つた。

4

世にもやさしい復讐が、最も切ない情念の通路を透して、行はれた。かねて朝子の用意してゐ

た例の器具で、欣也はウカウカと彼女を孕ませてしまつたのである。

朝子はしかし、この前の下落合の谷間のやうな産院の苦しさをまざまざと思ひ出して、今度はそれを覺つてからも、すぐには、欣也に教へなかつた。もし教へたら、欣也が早速、その處置を強請するに決まつてゐるのだ。朝子は何としても欣也の子供を生みたかつた。生んで、欣也と抜き差しならぬ關係に入りたいと思ふのが動機であつたが、程なく、ハッキリ自身でその胎動を感じるやうになつてから、彼女は、欣也はともかくとして、この子供自體を生み落して育てたいといふやうな希望すら抱き始めたわけである。

「君――この頃、太つだのかい。いつだつて、スカートの横のスナップが一つ二つ、はづれてるぜ……」

ごろりと疊に寢そべつてゐて、朝子が用などするのを横眼で見ながら、欣也はよくそんなことをいふのだつた。けれど、欣也は氣付いてはゐないのだ。欣也は、朝子と特別親しくなつてから、朝子の身の廻りのことについては、神經質にうるさく指摘して止まないのである。趣味の悪さや、配色の無神經さには、芯から腹を立てたやうに、コセコセいつた。そのたびに、朝子も半ば嬉しい心盡しだと思ひながらも、何か妙な拘泥を感じてきて、卑屈な瞳で、反撥的に欣也を見返すこ

ともあつた。

「いいぢやアないの、そりや、どうせ、あたし、彌千代先生のやうなわけにいかないんだもの」

「彌千代のことなんかに關係ないさ！」

と、欣也もさすがに、むつとして、やや聲を荒立てながら、自分がいかに朝子をこまやかな愛情で見守つてゐるかといふ點につき、實に長々と說敎めいたお喋りをやる。最初のうちは、「さう？」とか、「へえ」とか氣乘り薄の生返事であしらつてゐる朝子も、結局、留め度もない欣也一流の殺し文句に、つい情念の金縛りに遭つてしまつて、ほろりとした潤んだ氣分に陷るのだつた。

だが、しかし、今度ばかりは、さういふ服飾や趣味に關はつたことではなく、腰のスナップがはづれてゐるのは、他ならぬ朝子のみごもつてゐるせゐである。そこで朝子は、いつものやうには、いや味の一ト言も口にはしないで、

「ああ、さう。ほんとに、あたし、この頃、太つてきたらしいわ。きつとクロフネもずゐぶんきりで、ここんところ遊んで暮してゐるせいね……」

と、きまりわるげに、腰のスカートに手をやるのである。

欣也は、それでも朝子の姙娠にはまるで氣付かず、どうして、そんなに窮屈さうなスカートばかり穿いてゐるのかと訝かしげに思つてゐたが、それにも、やはり限度があつて、やうやく朝子の姙娠六ヶ月目に入つた際には、どうやら怪しいと感付いた。

欣也は夢から醒めた思ひでハッとしたが、まさかそれが自分の子供とは想像もしなかつた。激しい嫉妬が急に胸中を壓してくると同時に、欣也は早くも、朝子と別れる土壇場の口上さへも思ひうかべてゐるのであつた。そしてそのやうな取り亂した心でゐると、じつさい朝子の肉體にも飽き飽きしかかつてきた自分を感じて、何故に自分が、このやうな無教養な女などと、ぐつぐつ永く關はり合つてゐたのであらう、と考へてみるのである。

「朝子。隱したつてもう駄目だぞ。——君はお腹が大きいぢやァないか」

「あら、分つたの。でも、分つてもらへて嬉しい……」

「何だつて？」

「あたし、今度は生んでみたいわ。ねえ、先生、今度だけは、どうしても、あたしに生ませて……」

「誰の子供だい？　生みたければ、その子の父親によく相談してみるといいだらう」

「あら、その子のお父さんは、ちやんとそこにゐるぢやァないの」

「何？」
「ほら、ここよ」と、白い人さし指を一本のばして、朝子はまつすぐ、それを欣也の鼻の先きに突ッ立てる。「――ほら、お父さんよ。お父さんは、ここにゐるぢやアないの……」
「何云つてやアがるんだい」
欣也は頭から取り合はず、あくまで白い眼をして朝子の氣持に應じない。しかし、朝子も、心に十分の自信があるので、そんな欣也と角目立つて、いますぐここで黑白を爭はうとまでは思はなかつた。
「それぢやア、いいわ。どうしても知らないとおつしやるなら、それでいいわ。でも、結局、先生の子供だと分る時はくるんだから……」
「いい加減なこと云つてもだめだぜ。――いくら、ぼくがお人好しでも、慈悲心鳥の卵まで抱いて暖める氣はないんだからね」
「慈悲心鳥の卵ッて、何よ？」
すると欣也は、ふと當面の怒りを緩めて、あの他の鳥の卵をそれとは知らず、しつかと自分の羽根の下で暖めて、ヒナ鳥にかへすといふ何かの書物で讀んだ物語を、いかにも人生の象徵であ

るかのごとく、長々と述べ立てるのだ。この日頃、欣也は、かういふ説教めいた理窟が、少しづつ吸取紙に吸ひ込まれるインクのやうに、素朴な朝子の頭にをさめられていくことを何よりもよろこんだ。それは彌千代との生活では、つひぞ味つたことのない感情である。出來れば、彼は朝子に英語を教へ込みたいと考へてゐるくらゐだつた。

慈悲心鳥の話がすむと、欣也はしかし撫然として、やはり朝子の腰のあたりに、いらつくやうな視線がいくのをどうすることも出來なかつた。ただ彼は、朝子の態度がどことなくゆつたりと落ち着いて、少しも動揺してゐないのをふしぎに思つた。もし、これが他人の子供をみごもつた女ならば、このやうな悠然たる物腰は出て來ない筈だと思つた。一種の昏迷が欣也を襲ひ、彼は半信半疑の面持ちで、再びそろそろ攻め立てると、朝子はこつそり押入れに首を突ツこみ、何やら默つてひつぱり出してくるのだつた。

「ほら、これ、先生——」出されたものをよく眺めると、例の器具だ。

「何だ、それは？」

「あれよ、先生。實は白狀しますけれど、あたし、こんな苦心までして先生を欺したわけなの。ねえ、先生、許して下さる？」

朝子は、それを欣也の膝の上に置くと、涙をぼろぼろこぼしながら、その器具の一個々々が、彼女の切ない工夫によつて表皮をかすかに傷けられてゐることを告白した。

「何だ、さういふいんちきをやつてたのか」

と、欣也は呆れて、そのゴムを弄つてゐたが、念のために一個を取つて口に當てると、何げなくふうツと息を入れて大きくふくらまさうとしたのだけれど、空氣が洩れて、ぐにやりとしてゐる。たしかに空氣の抜けていく穴があるのだ。又、次の一個をとつて調べたが、やはりさうだ。結局、欣也は一個づつ、その小箱に殘つてゐたものを全部調べた結果になつたが、やがて、「ふん」と舌打ちして、眼の前に放り出した。

「負けたよ、ぼくは。——まさか、君が、そんないんちきをやるとは思はなかつた。全く、こいつは欺かれた人生だぜ。つまり、ぼくが、自分の志で招いた人生ぢやアないんだから、別に責任は持てないぜ……」

今度は、手術も手遅れの時期に入つてゐたし、だいいち、朝子がそれを到底承知しさうもないのである。欣也は、この世に、自分の子供が生れ出ることを覺悟した。けれど、朝子が、さういふ事實に凭れかかつて、見事に、男の愛情を引き留め得ると考へてゐることに、次第にいらいら

した憎悪を覺えた。彼は、女の情念といふものが、つねにさういふ低劣な動物本能を利用しようと考へてゐる點に、何ともいへない淺ましさすら覺えるのである。

欣也は、急に冷淡になつてしまつた。彼はそれから殆んど經堂へ立ち寄らず、何思つたのか、せツせと銀座のクロフネに出入りしたが、いつも自分のテエブルへ親しく引き寄せて飲む相手はアグリである。アグリとの情交が、また燒け木杭の焦げつくやうに、舊に復したかに見えたけれど、これは欣也の一種の詐術で、彼はアグリに、或種の役割を課さうと考へ込んだわけであつた。彼は先づアグリに對して、公然たる二號のやうな態度で遇した。彌千代も、これなら安心したし、なほもう一つ、欣也の計算してゐたことは、祕かに朝子との紛擾の起つた際、このアグリに一役買はせて、すべて要領よくそれを捌かせようと思つたからだ。

アグリは、かねて、彌千代の事務所や青山高樹町へも出入りするので彌千代にしても、欣也の遊び相手がアグリである限りは安心である。アグリならば、途法もない野心も起すまいし、月々いくらかの負擔によつて、おとなしく欣也を他の女から守つてくれる。彌千代にとつては、何よりも先づその點が、自分の氣分を鎭めてくれる最小限度の土臺であつた。

欣也はしかし、アグリに親しんだ魂膽が他にあつた。それは、朝子との連絡係だ。欣也は或る

時、アグリにすべてを打ちあけて、今後暫く朝子のもとへ、月々必要するだけの生活費を屆けてやつてほしいといつた。アグリはもとより二つ返事で快く引き受けた。彼女は、さういふ事實を吹附けられたことを、むしろ喜んでゐるくらゐである。自分が欣也の信頼を買つたことも氣持がいいし、又、內心では、いざといふ時、この朝子の祕密を以て、わが身の立場を强化する武器にも利用出來ると思つたからだ。

街では、欣也とアグリの噂が、何となく口の端にのぼりだした。當然、彌千代の耳にも入つた。お互に、欣也と彌千代はその事實を知り合つてゐるのであつたが、噂が、かくも公然として流布されると、二人の間で、改めてよく話し合つてみる必要が生じてきた。彌千代も、アグリのことは見て見ぬふりをしそゐたかつたが、周圍で何だ彼だと忠言めいた密告が集中すると、一度は、義理にも、欣也と談判する必要があるのだつた。

しかし、欣也は先手を打つて、このアグリとの交渉を自分から彌千代の前に持ち出してみた。ちやうど、その決心をする直前、欣也は好きなラ・ロシュフコオの箴言集を讀んでゐたが、その書物に、（人は誰でも、大きな缺點を隱すために、より小さな缺點を告白する）といふ一節が、痛く心に浸み込んだからである。欣也はこのフランスのモラリストから人性のただならぬ苦澁を

汲み取る代りに、再々、氣の利いた世渡りのヒントを捉むのを常とした。つまり、彼は深刻な物思ひに耽る形で、いかにして世のなかを巧みに渡つていけるかを考へめぐらす一個の才子だ。ロシュフコオは、かうして欣也に毒物の作用を成して、ちやうど朝子との醜聞を、アグリを前面に押し出すことによつて、隱さうといふ手を欣也に敎へた。

欣也は、アグリのことを告白する際、何故ともなく彌千代の面前で涙を流した。彌千代はこれに易々と引ツ掛つて、自分も一しよに涙ぐんで、かういふことを切なげに告白した。

「ねえ、あなた。いまのあたしは、もうこの世の中に何もほしいものがないのよ。ただ、あなたといふ人だけ。――そして、そのあなたを完全に、いつまでも自分の傍に引き留めておくためには、あたし、やはり若さがほしいわ。あたし、自動車も別莊も買ひたくないわ。齡が買ひたい。一年若くなれるなら、十萬圓づつ出してもいいわ。ですから、あたし、十歲若くなれるんだつたら卽坐に百萬圓出していいわ……」

欣也は、さういふ彌千代の口說で、所謂、物のあはれめいた氣持になるのだつたが、全體として、それは彼の心に暗い一種の絕望感を植ゑ付けるに過ぎなかつた。つまり、欣也は反射的に、朝子のお腹に宿されたこの無名の生命について考へ込まずにはゐられなかつた。彼は明らかに、

人生の分岐點に直面したのだ。といふことは、この未生の生命に動物的な愛情で引きずられるか、それともさういふ低い人情を一擲して、才智と教養とで凝り固まつた彌千代と運命を共にすべきかの二つに一つだ。欣也はそれを思ひつめて、氣もそゞろになるのだつたが、しかし結局、朝子が現實に子供を生んで、ぢかに、その生命にぶつかつてみないことには、いかなる決斷もつかぬのが欣也の本音であることも事實であつた。

一方、アグリによつて、月々十分な生活費を給されてゐた朝子は、遂にその年の夏の末、經堂の產院で、無事に男兒を安產した。その報を得た欣也は、さすがに飛び立つやうな思ひに驅られてワクワクしたが、逆表現は、かねて得意とするところで、彼は、心中、わが子のおもかげに或る暗鬱な重壓を感じながらも、故意に、彌千代を促して、好きな河口湖方面に二三泊の旅行をした。

その間にも、朝子はアグリの手を通じて、矢のやうな催促で親子の對面を迫つてゐたが、河口湖から東京へ戻つてくると、突然、欣也は、どうしやうもない力に壓せられて、アタフタと經堂へ飛んでいつた。そして始めてわが子を見た。生れて始めて、自身の生命の分身を目のあたりに見守りながら、欣也は何といふこともなくガッカリした顏付きになつてしまつた。

「どう？　あなたに、そつくりでせう？」
産後の衰弱のまだ十分に回復しきらぬ朝子は、蒼白い顔に微笑をうかべて、滿足さうに欣也を見た。欣也は恥らふやうな薄い苦笑を洩らした後、
「お前も、これから大變だな。ぼくが年ぢゆう、傍に一しよに居れないんだから……」
「あなた！」と、突然、芯のつまるやう　聲を朝子は發した。
「いえ、もう絶對に離さないわ。誰が何といつたつて、あたし、この子を持つてる以上、あたしの勝ちです。あたし、あなたを絶對に手離しません。ねえ、お願ひですから、明日から、この子と、親子三人水入らずで、ぼろを着てでも一しよに暮してもらふつもりよ……」
かう搔き口說きつつ、朝子はまるで全身の水分が一ト所に堰を切つて流れ出るかと思ふばかりに、あとからあとから涙を流して、到底、欣也の言葉など受け付けなかつた。欣也も釣り込まれて暗然とした。そして、そんな朝子の熱ツぽい手を弄りながら、欣也は、自分のやうな細心な叡智によつて世の中を巧みに游ぐ人間が、いつたい如何なる理によつて、かかる無敎育な女と終生結ばれねばならないのか、と考へ耽つた。欣也は、自分がこの女と、根本的には深い場所で結ばれてゐないことを、强ひて自分に云ひ聞かさうとするのであつた。

經堂通ひは、いつの間にか以前の通りになつてしまひ、欣也は暗い踏切の傍の道を、又、トコトコと回想の重みに撓ふ思ひで、屢々、歩いた。三ケ月は意味もなく流れたけれど、朝子の手もとで育てられる子供は、結局、欣也の金によつて丸々とよく成長した。名前も、欣也の選定で、薫と命名されたが、しかし籍は朝子の私生兒といふことになつたままだ。

朝子は、欣也を下宿の一室に迎へるたびに、狂氣のやうに赤兒を欣也の鼻さきに差出して、あたかも仔犬がじやれ付くやうに自分も一しよに欣也の身體に擦り寄つて大きな滿足感に浸るけれども、いざ夜ふけの最終を氣にした欣也が、瀬戸火鉢のむかう側で、そろそろネクタイを結び始めたりしようものなら、俄かに顏色がサッと變り、身も世もあらぬ歎き方で、例の要求をぶちまけるのである。

「歸さない。いまから、ずつと薫の傍にゐてやつて。——ねえ、あなた、親子三人、水入らずで、たとへ汚い裏長屋の溝板踏んでもいいから暮しませうよ。それとも、あなたは、わが子と一しよに暮すよりも、やはり毎日、ぜいたくして、おいしいものを食べたり、立派な着物を着て暮したい？」

「そんなことはありやしないよ」

「なら、あたしたち三人で、新しい家庭を持ちませうよ。——もし、あなたさへ、一生一度の勇氣出して下さるなら……」
「さうか」と欣也は頷いて、ふと慰めるやうな甘い囁きを朝子の耳もとに持つていつた。
「そんなに君は一しよに暮してみたいか。いや、その氣持はよく分るよ。このぼくだつて、實は内々、そんなこと位ゐ考へてゐたんだからね」
「素敵！」
朝子は、熱に浮かされた人間みたいに、薫の枕もとをぴよんぴよんと幼兒のやうに跳ね歩いて、時々、ぴゆツと坐つた欣也の頸筋にしがみついて、まるで捺印するやうな亂暴な接吻を繰返しつつ、
「ぢやア、かうしませう。ことしのクリスマスまでには、是非一軒小さな家を持ちませう。あたし、明日から必死になつて家を探すわ。なかつたら、アパートでも我慢しませう。權利さへ出せば、きつとあるわ。——ねえ、いいわね？　あなたも、裸一貫で、本當の藝術家らしい生活に入つてね！」
欣也は明らかに自分の心が二つに分裂していくことを、まざまざと感じてゐた。それは、朝子

と暮したいといふことと、彌千代から離れられぬといふことである。もし、身が二つなら、欣也はおそらくこの双方を同時に選んだことであらう。だが、彼は自然の風霜の薄れるのを待つやうにして、この皮肉なバランスが、自分自身の思慮以外の事情によつて破れることを待ち望んだ。

しかし、十一月も末になつて、アグリの口から、朝子が下北澤に氣の利いたアパートの部屋を見付けて、すぐに手金も打つたことを聞かされた。そこで欣也は經堂へ足を延してそのアパートへの引越しの打ち合せをした。つまり、日を決めて朝子は經堂から下北澤へ荷を運ばせるが、ほぼ同時刻、欣也は欣也で、最小限度の身の廻り品をまとめて、青山から下北澤へ飛び出していく、といふ豫定である。期日は十二月の十日と決まつた。

約束の十日が忽ちにして迫つてきた。前夜、欣也は、彌千代に向つて、暫く旅行してみたいからと話して、突如、トランクだの着換への類を整理しだした。さうしておいて、あとは當日、青山を出るぎりぎりの土壇場で、欣也と彌千代の二人に屬する銀行預金の、ほゞ半分の金額を、ごつそり引き出していく腹を決めた。

ところで、その夜の欣也の擧動に、何となくただならぬ氣配を察した彌千代は、わざと欣也を直接問ひつめることをしなかつた。一種の勘で、これはいつものやうな押し問答では、どうにも

ならぬ切迫さがあふれてゐる、と直感したのだ。彼女は、力に抗するにはやはり力を以てするより致し方ないと考へた。

翌日、欣也は、まづさうに朝飯を食べ終ると、

「ぢやア、ちよつと出かけて來らア」

と、出來るだけ何げない調子でいつた。

「行つてらつしやい」

「留守中、なるべく氣を付けてね……」

「どうぞ」

このやうな人生の袂別もあり得るものだといふ感傷に打たれながら、欣也は、靜かに玄關を出て行つた。重いトランクとスーツケースは、用心棒の濱本と女中とが、それぞれ一個づつぶらさげて、青山の電車通りまで見送つてきた。欣也はここで、流しのタクシイを捉まへて乘るつもりである。

欣也は、黑地に青いチェックの入つたベロアの冬外套に身を縮めて電車通りの並木の下に突ツ立つてゐた。彼は時折、疾走してくる自動車を見つめる視線を通して、チラチラと背後のわが家

の方角をも眺めやつた。ふしぎである。これ程の重大事態に、一片の感感もなしに、のうのうとして自宅にをさまりかへつてゐられる彌千代の心境が妙であつた。欣也は時どき、この道を、息せき切つて彌千代が追跡して來ないかと、心で案じてゐるのであつた。

やがて自動車が來た。

欣也は、やうやくそれを呼び留め、何もいはずに、ステップをあがつて行つた。濱本たちがトランクをあとから入れた。「御苦勞だつたね……」と一言殘して、そのまま欣也は取り澄まして搖られていつた。自動車が赤坂近くまで出ていくと、欣也は憂鬱な聲で運轉手に命令した。

「內幸町の大阪銀行まで行つてくれない？」

その銀行には、欣也たちの最も多くの預金がある。ここで、半分現金を引き出せば、ほゞ公平な分配といふことになるわけだつた。

自動車が銀行の前に停まると、欣也は外套の內ポケットにある印鑑を、改めて胸の上で確かめてみて、車をそこに待たせたまま、重いガラス戶を押して入つた。

欣也は、備へ付けのペンを摘んで、引き下げる金額を所定の用紙に書き込んだ。そして、脇のストーヴに手を翳して順番を待つてゐると、イキナリ、黑い制服の守衛が近付いてきて、

「鷹取さんでいらつしやいますか」といつた。
「うん」
「お電話でございますけど……」
「何だつて？」
驚いて、立ちあがり、欣也は殆んど夢中になつて、支店長の席へあがつた。支店長が鄭重な挨拶をして、
「先生。お宅からでございますよ」
「ハハン」
と、もつれるやうな足どりで卓上電話に近付くと、電話の壁は、彌千代である。彌千代はブーンと匂ふやうな苦笑の氣配を漂はせてから、いやに事務的な口調で喋つた。
「あなたですか。多分、そちらへいらつしたと思つてゐたんだけれど、——あの、お金のはうなら全部、ストップにしてありますから、そのおつもりで……」
「なに」
「いま、支店長さんにお願ひして、全部、あたしの當座口へ振替へて頂きました。もし、旅費で

御入用でしたら、さう云つて下さつたら、あたし、いくらでも小切手を切りますわ。――濱本にでも持たせませうか」

「要らないよ」

と、慓悍な手付きで、ガチャリと受話器を掛けてしまつた。欣也は少時、電話の前で茫然としてゐたけれど、やがてハッとわれに返つて支店長に挨拶すると、ぷりぷりしながら土間へ降りた。ドアをひらいて、うすら寒い戸外の風に眞正面に向つて立つと、欣也は石段の上から待たせてあつたタクシイを呼んだ。

「――この直感は相當なもんだ」と欣也はタクシイのクッションに凭れてから、胸のなかでこんなことを繰返してゐた。「さすがは彌千代だ、實以てスマートなやり口だ。こんな勘は、絶對に朝子にはありやしない。それだけ人間の格の違ひで、こいつは、どうにも仕様がないや。――しかし、結局、永い年月の間には、朝子が勝つんだ。おれの子供を持つてる限りは、窮極は、朝子が勝つんだ。この現世では、つねに愚鈍な人物が勝利を得るのと同じやうに、朝子も結局は勝つに決まつてるんだ。おれは、さういふ勝つに決まつた人間の側に立つほどの、いやらしいことはしたくないや……」

自動車は偶然にも日比谷の方角を向つてゐたので、欣也はかねて豫定してゐたかのやうな顔で、「東京驛へ……」と、うめくやうな聲でいつた。欣也は、じつさいに東京驛へ向ひ、熱海へ四五日行つてみようと考へてゐた。熱海の宿で、あのリズミカルな波のしぶきを聽き入りながら想を練つて、又、新しい作曲を試みるのもわるくはないと欣也は思つた。

欣也は暗澹たるこの取り亂した運命を、一片の作曲とすりかへたいと思ふのだつた。欣也は何となく傑作が出來るやうな氣がした。

魔

女

丹治は、疊に寢そべつたまま、梅子の膝をちよつと小突いて、そろそろ寢るか、と聲をかけた。丹治の聲は、たしかに顫へた。六年、相逢はずに暮した梅子を、妻といふより、むしろ單なる一人の異性と眺め盡しての第一夜なので、この動物的な初ひ初ひしい情念の滴りによつて丹治は顫へた。しかし丹治は、世のつねの男が狡いといふ意味で、狡い男であつた。丹治は、所謂、もう怺へられない劣情のとりこと化して、その劣情の織りなす樣々な想念の繪模樣に顫へながらも、これを一種の理性の働きであるかのやうに錯覺したく考へる男であつた。丹治は、今夜、まさに梅子の肌身にふれんとする性の戰慄そのものを、ふとイタヅラな考へ方から、逆に、自分の良心の作用であるかのごとく思ひ込まうと努めたのである。丹治は、妻にすまないと思ふ前に、すまなく思ふ心根が、自己に必ず利益を伴ふだらうといふ打算で、ここ數年間、大陸で暮した日々を腦裡にうかべてみるのであつた。

丹治は、梅子の白い太り肉を惱ましく空想しながら、一面、その空想に絡み付くやうな勢ひで考へ込んだ事といふのは、率直にいふならば兵隊としての數々の性の非行だ。六年前に、二十四歳の梅子を殘して、以來、大陸で月日を閲し、梅子に空閨を守らせてゐたことは止むを得ない。それは丹治の罪ではなかつた。その點、丹治は、梅子を憐れと思ふ以上に、腐りかかつた流木みたいに、只々、巨大な水勢に押し流されて、華北に、蒙古に、シベリアに、と漂泊同然の慘苦を重ねたわが身の上を、どんなに愛しく考へてゐるかも知れない。とはいへ、どうしやうもない傷痕みたいな記憶として殘されてゐる事柄は、この六年間、彼が自然な食慾についてふるまつたと同じやうに、他の一面でも、すつかり痴情に氣負ひ立つ動物として暮したことだ。左樣、丹治は、軍人として大陸に渡つて以來、心は妻の貞節を祈念しながら數多くの女を犯した。丹治の犯した女の數は、いま彼自身もしつかりとは覺えぬくらゐだ。娘、人妻、幼兒、老婆——もとより、數數の商賣女も混へてのことであつた。彼は、大陸の邊土にあつて、汚れた軍服の內ポケットに、梅子の四ツ切大の寫眞を後生大事と祕めてゐながら、それらの女を、さも黑パンをむさぼるがごとく犯した。丹治はそれを、いいこととも惡いこととも考へなかつた。しかし、ともかく丹治はそれを敢てしたのだ。そんな丹治が、いま、ふと電光の流れ込むやうな衝擊的な追想で、その一

夜々々の出來事を、頭の隅でまさぐりながら、妻とはいへども梅子の生ま身の肌に、いよいよ、「おい――」と手馴れた情慾を持ち込んでいくことを、恥とすべきか否か、と考へた末、やはり恥だと思ひなす心を裝ひ、一擧に、自分が良心的な戰慄に打ち顫へてゐるものと信じようとしてゐたのである。

丹治はしかし、そんな良心の營みで、聲を顫はせる人間でない。丹治は、性の本能で、うづうづしてきて、身を打ち顫はせたに過ぎないのだつた。けれど、ともあれ、いまこそ少くとも醫學的に清潔な梅子の身體をムヅムヅしながらオモチャにするのだ、といふ幻想で、丹治は一そう聲ををのかせて、「おい、もう寢ようぜ……」と繰返して呟いてみるのであつた。

「ええ」と、梅子は、ちやぶ臺の上に置いた目醒時計を一瞥してから、何故か曖昧な氣配をみせた。

「もう、仕事は明日にしないか」

「はい、はい」と應へながらも、梅子は素知らぬ態で、編物の棒を憩めることなく、そんな丹治をチラとながめた。梅子は、丹治のさりげない口調のなかにも、早や三十女特有の敏感さで、性の烈しい要求をおぞましく嗅ぎつけてゐた。梅子は、丹治を憐れに思つた。いや、氣の毒に思ひ

たかつた。何故なら、六年の歳月を隔てた二人が、今夜、かうして最初に相會ふといふ段取りになつてゐるのに、生憎、梅子は昨夜半から例月並みに、やや強い月經が始まつてゐたからである。梅子は、それを丹治のために氣の毒に思つてゐたのだ。ところが、丹治は、梅子の自然を裝つたその應じ方の口調のなかにも、何といふことなく或る逡巡を感じ取つてゐたのであつた。何故であらう、と丹治はちよつと不可解に思つたけれど、まさか月經といふことまでは、露ほども思ひ及ばなかつたのである。

「お前も、永い間、辛かつたらう？」と丹治は表面、さりげない事にも通じる言葉を洩らしてみるのだつたが、それを性的な劬はりと解した梅子は、ふと淋しく小首を動かしながら、「いいえ」と口ごもつて、怒つたやうな眼のいろを示すのだつた。

「もう、六年は、完全にお前のことを知らなかつたわけになるな？」

「早いものだわ。でも、すんでみると夢みたいで、あたし、六年も別れてゐたとは思へないわ……」

「しかし、おれも、醉興で鐵砲擔ぎに行つてたんぢやアないんだからな。——いはば、おれは、お前の身體に、ウントコサ、貸しがあるんだ」

「返したらいいんでせう、オホホ……」

「さうだ。今夜からぼつぼつ返して貰はう」と丹治はいつて、矢庭に、骨張つたてのひらを、ぐいと梅子の膝頭に突ッ込んだ。

「あら、いやよ」

梅子は、疊にキチンと竝べて坐つたムックリするやうなまつしろな膝小僧を脇にそらして、やや寸足らずのスカートを、ぐいと引ッぱり、その上から被せ直した。適度の拒否は、多くの場合、相手の情慾を一そう刺戟するものであるけれど、しかし、この時、丹治はハッとした或る感じで、その梅子の拒み方に、一種、意志的な或る力を認めたのである。これは普通ではないと思つた。

「梅子、しかし、お前、何といつたつて六年は辛かつたらう？」

早や無心な劬はりは乘り越えて、この一言には、露はな探りがこめられてゐた。

「さア、でも、そんなでもなかつたわ……」

「いや、もし普通に、健康な身體を持つてゐる女なら、それが切なくない筈はないんだからな。その苦しさがあるはうが自然だらう？」

「だけれど、女は、男とちよつと違ふでせう。まさか男は、六年間も、まるきり相手なしにゐら

れないでせうけど……」

「その通りだ。實は、おれも白狀しなくちやアいけないことは若干あるよ。お前、しかし、それを素直に聞いてくれるか。もう、おれだつて、生まじツかな隱し立てなどしやアしない。何しろ、お前も、終戰になつてから、いろいろ新聞なんかで、日本軍の暴露記事も讀んでるだらう。おれだつて、ウソはつかない。お前に對しちやア、惡いけれども、やはり、おれも六年間は、完全に獨りぢやアゐられなかつたのだよ。——お前、それを、どう思ふ」

「さア、誰だつて兵隊は皆、さうなんでせう？」

「仕方ないんだ。ほんとに、おれは白狀するよ。お前も惡くは思はないでおいてくれよ。戰爭といふものは、人間を變へるからな。それが戰爭といふもので、それでなくちやア、戰爭なんて出來やしないんだよ……」

丹治は巧みに、この告白といふ隱れ簑を振り翳しつつ、いくらか藥が效き過ぎるかと思はれた程、性の荒々しい遍歷について、物語つた。つまり、丹治は、罪を謝すといふ形で、實は、梅子の情念に催情的な魔力をふるつてゐるつもりでもあつたわけだ。

ところで、最初、「ほう？」とか、「あら！」とか微かな含羞を浮き立たせて耳をさらしてゐた

梅子も、聞き入るうちに、次第にいやでいやで堪らなくなつてしまつた。丹治の立場としては逆效果である。だいいち、何より梅子がうとましく思つたことは、不潔だといふ觀念だ。梅子は、尋常の倫理感に疾走るものとして、「ああ、何て穢らはしい！」と思ひ込んでしまつたのである。この神經的な反撥は、とりわけ彼女が月經中であつたから一そう烈しく、殆んど丹治を正視する に堪へがたいまで、いやらしく思ひ込んでしまつたのだつた。

「わかつたわ。でも、もう、お止しなさいませ……」

梅子は妙な切り口上で、その煮つまるやうな淺ましい丹治の話を逃れようと試みたが、丹治は更に食ひ下がつてくる。

「おれは心からざんげするんだ。じつさい、いま思つても心臓がぶツつぶれさうな程、情けない氣持だからね。しかし、他人は別だが、いつかは一ぺん、おれはお前にだけ、この事をざんげしなくちやアと考へたものだから、つい、いま急に、何もかもぶちまける氣になつたんだよ。——全く、ざんげだ。心からざんげしたいが、しかし、おれは、この淺ましさを、國家や法律に對して悪いとは考へてゐないんだ。つまり、お前の清淨潔白な貞節に對してざんげしたいと思ふんだけど、お前は、これを素直に受け容れられるだらうな……？」

「えッ、何ですッて？」梅子の眉が微かに動いて、丹治の最後の一句については、その意味を明瞭に捕捉しかねる心入れだ。梅子は神經質になつてゐたので、何げない丹治の言葉を、（お前は、これを受け容れるに足る清淨な身體だらうな？）と念を押されたやうな氣がしたのである。そこへ重ねて丹治が疊みかけるやうに繰返した。

「ほんとに、お前に限つては、おれのざんげを受けてくれることだらうな？」

「あなた。いいわ。もう寢みませう。あとで、ちよッと、いひたいこともあるんですよ……」

その場逃れに、かういひ足して、梅子はやうやく膝にひろげた編物などをアタフタと片附け出した。丹治は、すぐさま起きあがり、次の間に敷いてある夜具のなかへもぐつて待つてゐたけれど、まさに一刻千金のをののきで正體もない。そして青磁に近いやうな青いセルの寢卷に着換へた梅子が、のつそり白いふくらはぎをチラつかせて入つてくると、「梅子！」といつて、布團のなかから熱の吹き出すやうな腕を延ばして、しッかと足首を捉まへた。梅子は危く轉びさうになるのを怺へて、「あなた、いますぐ……」と膝を突いて、ふうーッと思はず肩で大きな息をしながら、するりと共寢の夜具をめくつて入つてきたが、つめたい陶器のやうな身體に早やぴつたりと丹治がしがみついてくるのであつた。

「あなた、あなた……ほんとに、あたし、あなたに悪くて仕様がないんだけれど、あたしも、あなたに一ト言、ざんげしなくちやアゐられないことがあるのよ」
「何だつて？」
「ほんとです……」
「ざんげだつて？　穩かならんことをいふぢやアないか。いつたい、それはどういふ意味だい」
「あたし、それを打ち明けて、一應、聞いて頂かなくては、ほんとに、あなたと、かうしちやアゐられないのよ」
「云つてみなよ」
「だけども、あたし、ほんたうは、もつと氣の鎭まつた時になつて、すつかりお話したいんだわ。今夜はつらいの。ほんたうに、つらいのよ。ねえ、あなた、今夜は勘辨して頂けない？」
「すると、このまま寢ちやふといふのか」と丹治は、むしろそのはうの成り行きに脅かされた。
「ええ、悪いけど……」
「だめだよ。そんな水臭い夫婦ツてあるかい。散々、こつちにはいやなことといはせておいて、自分のことだけ半分切り出して、お預けにするなんて！」

もう、いけない、と梅子は感じた。心に、何の用意もなく、梅子は好んで夫婦の破綻を招くやうなキッカケをつくつたけれど、實は彼女に、丹治が出征してからの情夫が出來たのは事實であつた。情夫の須本は、いまもなほ斷續的に關係があるのだけれど、しかし梅子は、或る必要から、ここ暫くは死んでも丹治に、須本のことは明かすまい、と決心してゐた。そんな梅子が、では何故、自分も丹治に過去をざんげしなければならない、と我れから口を切つたのだらう。梅子自身、さういふわが身を理窟で納得出來ないと思ふのだつたが、梅子としては、須本をうまうまと丹治の眼から隱しおほせてみるために、殊更、それより一昔も古いやうな、過去の小さな過失について、進んで丹治に告白しようと企てたわけであつた。梅子は、一種、モヤモヤした神經的な或る氣分から、その詐術に等しい昔のざんげに、丹治との結婚前の坂卷といふ美青年との交渉を、選び出さうと考へてみるのであつた。梅子は、當時、音樂學生だつた坂卷とは、ほんの一度、肉體の交渉を持つただけだ。もとより、丹治との結婚には、この皮膚の表面を擦つて過ぎたに等しい坂卷青年との交渉は、まんまと伏せて、當座を凌いだ。丹治も、梅子と一しよになつて、つひぞ、その事實には氣付かずに過してしまつたわけだけれど、いまに至つて、梅子が坂卷を持ち出す決心を付けた眞意は、現在の情夫の須本と、突如、外地からふらりと送還されてきた良人の丹治と

を眺め較べて、どうあらうとも、梅子が須本を思ひ捨てる氣になれないからにはちがひなかつた。しかし、世には、片へに須本を隱したまま、丹治をやはり良人として遇するやうな女は少くないのだ。何といつても、丹治が良人であるからには、當面、須本を蔭に忍ばせて置き、良人に心身を委ねながら祕かに後途を策するのが、愛に目くるめく女の常道であるかも知れない。けれども梅子は、何としても須本を完全にわがものとするために、今日、今夜、といふ第一日から絶對に丹治には、ゆるすまいと考へるに至つたのである。それ程の決心は、つい、この日の晝間までは全然付いてゐないのだつたが、梅子は、いざ丹治と六年ぶりの交歡に入らねばならないといふ土壇場で、ふらふらと拒んでみたくなつたのである。梅子は、それを、じつさいさうであるが如く、きのふ來潮をみた月經のせゐだと考へてみるのだつた。たしかに、月經といふものが、丹治との同衾をためらはせた最初の動機にちがひないが、この一ときのためらひが、梅子に、情夫の須本の人間像をアリアリと思ひ泛ばせるキッカケになつたのである。梅子は、やはり須本を失ひたくないのであつた。殊に須本は、戰爭中から何くれとなく梅子の相談相手になつてくれて、荷物疎開や食糧の調達にも、親身も及ばぬ奔走をしてくれたし、戰後、いよいよ良人の丹治がシベリア送りで、その生死さへ覺束ないといふ情勢になつてから、梅子の前途を按じての果、兩人協同で

洋裁塾の設置さへ計畫し、現に、それが九分九厘まで目鼻が付きかかつてゐる矢先、俄かに今度、丹治の歸還を迎へてしまつたのである。梅子はしかし、ここで人情に負けてはならぬと、あくまで丹治の要求を拒み續ける決意を固めた。偶然の月經が、彼女の不貞を貫くための何よりの武器になつた。

梅子は、うまく偶然を利用したと思つた。しかし、彼女は、自分がこの種の偶然それ自體に生きる女だとは氣付かなかつた。つまり、彼女は自分で考へてゐる程には計畫的な惡人ではなく、又、同時に自分で信じてゐる程の、ひたむきな純情家でもないのであつた。

2

丹治の態度が、その翌日から少し變つた。丹治は、辛うじて日本へ還つた擧句、無事に梅子の顏を見てから、緩みに緩んでゐた或る氣分が、一夜にして、もとへ戻つた。梅子と相携へて、これからの暮しむきを、どうして立て貫いていくべきかと考へて惑つてゐた丹治は、俄かに、梅子がどうする氣かと、やや傍觀者的な餘裕を帶びて、わが身を突きつめて考へる眼を鈍らせてくるのだつた。

「考へると、お前も、實に怖い女だな。何しろ、おれと一しょにならない前から、そんな坂卷とかいふチンピラに處女を捧げておきながら、よくヌケヌケと、おれに何年間も隱しおほせたもんだよ。大した度胸だ。しかし、それ程のお前なら、この生き馬の眼を拔くやうな終戰後の東京でも、さして屈託はないだらう。おれがアクセク思案する前、何ぞ樂して切り拔けていく分別でも持つてゐるのか」

云はれて、梅子に、すぐピーンと來たものがある。丹治は、いはば梅子の貞操觀念の脫落を氣遣つてゐるのではなく、もはや彼女の貞操自體の喪失を利用したいと思つてゐるのだ。おそらく丹治は、梅子がわが身を賣り拂つて、やすやすと千金を手にすることにも苦痛さへ感じぬらしく、むしろ、それを一種の復讐とさへ解するのではないか、と梅子には想像された。

「オホホホ……いくらシベリア呆けだといつても、よくそんな暢氣なことがいへるわね」

「何が暢氣だ？」

「さうぢやアないの、いまどき、女が、樂して食べていけるのは、パン助か二號さんくらゐのものよ。そのパン助でも、近頃、あんまり、のうのうと暮してゐたんぢやア、大した稼ぎはないツて聞くわ……」

「パン助やれよ」と、うめくやうに丹治は叫んだ。「いやさ、パン助ぢやア、ろくな稼ぎがないといふなら、二號だつていいぢやアねえか」

「あなた！」

梅子は微かに氣色ばんで、いかにも恨みをふくんだらしい瞳を、丹治の正面に強く据ゑた。

「どうしたんだい」

「どうもしない。——でも、あんまり見下げたことをいふもんぢやアないわ。さも、あたしが、そんな人間みたいだといはんばかりに……」

「やる氣があるなら、やつてみろといつてるんだよ。やつたつて、文句いはねえ、と云つてるだけさ」

「冗談ぢやアないわ。でも、そんなに、人を見下げるものぢやアないわよ。いくら、あたしに、どんな落度があつたからツて……」

「ウフフ……落度はあるよ。大した落度だ。而も、お前は、困つて身を賣る女より、なほ悪性といふものだ。食ふために、身を賣つたのは同情も出來るけれど、お前は、面白をかしくツて、傷物になつた女ぢやアねえか」

「食ふため[illegible]ら、仕方ないの？」

「さうよ。それで、而も裸一貫のこのおれを養つてくれるといふならまだ我慢の仕様もあるさ。しかし、お前は……」

「もう止して！」と梅子は烈しく手を打ち振りつつ、「――もう分つたわ。止めてちやうだい。ほんとに分つた。でも、ねえ、あなた。あなたみたいに、そんな高飛車な云ひ方しなくても、もつと云ひやうだつてあるでせう。おれはシベリアから還つたばかりで、これといふ職もないから、何か仕事が見付かるまでは、お前、骨折つて稼いでみろ、と云つてくれたらよささうなものを！……」

丹治はしかし、せせら笑つて、さういふ殊勝な梅子の云ひ廻しにも耳をかさない。丹治は、六年以前の梅子の過失に、あくまで拘泥してゐるのである。粹興にも、チンピラの音樂學生に處女を捧げ[illegible]、それを默つてヒタ隠しにしたままで、丹治のもとへ嫁にきたのが、今更、胸が焦けつく位[illegible]丹治は口惜しくてたまらなかつた。いや、むしろ丹治の心情を正確にいふならば、彼は梅子が愛しくて仕様がない。おそらく性の突きつめた深奥さへ辨へない頃、偶然、サラリと時雨に降り濺が[illegible]やうな姿でアッケなく貞操を喪くしてしまつた梅子が、――そして、さういふ虚心に近い梅子の身體を、チンピラながらも一夜の玩賞の具として消え果てたその坂卷青年が、憎ら

しい悪漢だと思ふにつけて、丹治は梅子を可哀さうだと思ふのだつた。而も、丹治は、梅子がそんな女蕩しの坂卷に、たとひ一ときの幻にもせよ、純情を傾けたらしいことが、怺へられない無念さとして、ギリギリ胸を緊め付けてくるのである。梅子の肉體が弄ばれたといふ事實より、その純情をオモチャにされたと想像するのが、何層倍か、いまの丹治を苦しく痛め付けるかも分らないのだ。で、もし、逆に、梅子が坂卷青年を上廻る淫蕩な女であつて、假りに結婚を求めて止まない男の身體を弄んだ末、ひらりと魚類の交尾のやうに、あと腐れなく逃れてきたといふのだつたら、丹治は、かほどに、胸のチクチク痛くなる程、嫉妬のほむらを燃やしもすまい。つまり、丹治は、精神的な大きな負ひ目を、わが半身たる梅子の上に惱ましく感じてゐるので、むしろ梅子が、その坂卷をあざむいて裏切つた程の悪女であつたら、どんなに自分は救はれるか分りやしない、と一途に信じ込んでゐるのであつた。

「パン助がいやだつたら、二號でもいいぢやアないか。二號やつて、せめて黑パンを二年も嚙つて、ロシアの石炭を掘つてきたおれさまを、一年でも左團扇で、贅澤させてみる度胸ないのか……」

滿更の冗談や皮肉ではなく、毎日毎夜、語るにつれて、思はぬ本氣の苛め方を繰返す丹治に對し、次第に梅子は、あツといはせてやりたいやうな苛立たしさが頭を擡げた。梅子は、丹治の、その

惡態を、この上もない人間蔑視と受け取つて、ジリジリ胸を沸らせてゐるのだけれど、丹治にすれば、それは愛しさの募つた餘りの物狂はしい嫉妬に過ぎない。丹治は、嫉妬の最も嫉妬らしい極點は、實に精神的な男女の負ひ目だと思つたものの、しかし、さういふ精神に刻まれたと見られる傷が、他ならぬ梅子の皮膚の上の一事件から由來したのを考へ至ると、彼は、いかにもこの世の何ものにも頼れないやうな深い絶望感に蔽はれて茫然とするばかりであつた。

夫婦の仲は、いづれにしても日增しに冷却していくばかりで、交合を伴はぬ同棲生活といふものが更に二人の感情をこぢらせていくばかりである。梅子も、連日、丹治からパン助になれとか二號をやれとかいはれるうちに、だんだん度胸が決まつてきて、暫らく逢瀨を控へてゐた情夫の須本にも逢つてみたくてたまらなくなつてきた。丹治がシベリアから還つた途端、當座の危險を慮つて神經質に用心してゐた須本にしても、日が經つにつれて梅子の身邊が氣遣はれ、このまま彼女が世のつねの人妻に成り澄ましてしまふのだらうかといふ不安定な一念で、やはり梅子を捉まへて話し込みたくて仕樣がなかつた。その結果、二人は、丹治の目をぬすんで、街でひそかに落ち合ふやうな機會を造つた。梅子の家は、目黑の駒場で、須本は澁谷の南平臺だ。歩いてさへも、左程の時間はかからぬけれど、二人は相互に暗合めいた電報を打ち合つて、或るなま暖い五

月の薄暮、澁谷の櫻丘のチャチな旅館へ入り込んだ。
「なつかしかつたよ」須本は、やつと二階の四疊半へ通ると同時に寢たがつて、一切の話し合ひは、この武者ぶりつくやうな同衾の一ときを過してからだといふ物腰を示すのだつた。
「待つてちやうだい……」
梅子は、男といふものが、いかなる異變に際會しようが先づその情慾の風穴を通してからでなければ、何の分別へも潜つて出られぬといふ點が、うとましいことに思へた。
「待つてといつて、君、けふはゆつくり時間はないだらう？」
「それはさうよ。あたし、八時には歸らなくちやア……その時分に、うちのが戻つてくる筈だもの」
女中が布團を敷いて五分も經ずに、須本は梅子をそこへ押し込まうとしてガツガツしてゐた。
「もう四十日も拔けたんだからね。こんなに永い不自由は、お互に知り合つてから始めてだよ。ぼくは氣でも狂ひさうになつてくるよ。さア、梅子、早く早く……」
「でも、あなた。あたしたち、これからどうするか、大事な打ち合せをしなくちやア」
「打ち合せは、あとで、すぐする。しかし、とにかく横にならうよ」

「だめよ、肝腎のこと決めておかないと……だつて、今後は、さうさう暗合めいた電報を何度も打ち合ふと感付かれてしまふぢやなアいの」

「とにかく、ぼくは氣ちがひになりさうだ。ぼくは寢るんだ……」

殆ど暴力に等しいやうな迫り方で、須本は梅子を無理矢理に寢かしてしまふと、用意の寢卷を着換へるスキも與へず、まるで鳥類の交尾を思はすやうなアッケなさで、初一念を通してしまつた。すんで、寢覺めのやうな吹ッ切れなさで西陽の射し込む夜具の上に胡坐をかくと、須本はいつた。

「君は、怪しい……」

「何が？」と、おくれ毛を無意識に搔き分けながら、十分、滿足し得なかつた梅子の瞳が、今頃、一種の惱ましさを孕んできて、そつと相手の逞ましい胸もとに殘り惜しげな情慾を感じてゐる。

「何がといつて、いまのことだ。君は、いままでとは、ずゐぶん違ふぜ」

「それは、あなた。場合が場合ぢやアないの。いくら何でも、あたし、こんなセカセカしてゐて……」

「丹治と一しょに寢てるんだらう？」

「あら、ひどいわ」その一言は、いまの梅子には絶望的な魔力を以て、すべてを破碎せずにはおかぬ勢ひで迫つてきた。

「ナニ、寢てゐない？　妙な話だ。假りにも、夫婦が、同じ棟の下に四十日も一しよにゐてか……？」

「あなた、止してよ。――いま、あたしを自由にしてみて、それでも分らないといふの？」

「うむ。いや、だから、いままでとは違ふといふんだ。しかし、そんなに潔白だといふのなら、君は、何のために丹治なんかと一しよにゐるんだ。――別れる決心が付かないのか」

「別れてもいいわよ」と梅子は突如、凄んだ眼付きになつてきて、「しかし、あなた。いまのあたしが別れたければ、あの家、飛び出すより仕様がないのよ。まさか丹治を、こつちで追ひ出すといふわけにいかないでせう？」

「それもさうだな。だが、さうすると、折角、洋裁塾をやらうといふ計畫もストップになつてしまふな」

丹治の家は、空襲で燒け殘つて、二階一ト間、階下三間の、ほぼ中流住宅の體裁は備へてゐる。出征前に、丹治は、ここで安月給を補ふために、梅子に洋裁屋でもやらせようと考へて引き移つ

てきた借家だつたが、肝腎のミシン臺など手に入れる資金のないまま、もだもだしてゐるうちに赤紙がきたのだつた。終戰以來、梅子はそれを思ひ出して情夫の須本に資本を出させて、洋裁屋を開業し、傍ら梅子の衆にすぐれた技術を生かし、何人かの弟子や生徒を募つて、塾のやうなものさへ經營したいと考へるに至つてゐたのだ。須本はその資金の獲得に奔走し、獨り住まひの下宿生活の氣樂さから、かなりあくどいヤミ・ブローカーをやつてゐたが、所謂、出たとこ勝負の何でも屋で、人が手に入れたいと註文すれば、米でも、メチールでも、衣料でも、草の根わけても探し出し、かなり有利なサヤを納めて食べてきてゐた。しかし、梅子が出來てからは、急にまとまつた大金が必要となつたものの、焦ると却つて失敗して、いつかなミシン臺一個を購ふ利得さへ摑みかねて、いらいらした日を送つてゐるのだ。ちやうど、丹治が歸還したのは、その矢先で、進退谷まつた思ひに驅られた須本に、或る日、偶然、新宿のマーケットで知り合つた人間からピストルのあつせんを賴み込まれた。謂ふところの仲間相場で一挺六千圓と踏んだからには、萬で賣り渡せば四千圓のサヤがあがる。「ふん、しかし、四千圓か……」危い取引を搖いぐつても、ミシン臺一個も買へやしない。だが、考へると、いま時、どこのやくざであらうと、人に短銃を探させて、僅かに四五千圓の儲けだけ嚙ませておいて、自分はそんな兇器を利用し、何萬や何十

萬も叩き出さうといふのであるから、須本も聊か味けない氣がするのだつた。そこで、彼は、やつとの思ひでブローニングの六連發を入手すると、「待てよ」といつて、つくづく考へ込んでしまつた。「こいつを、ちやんと引き渡して四千圓ぽつち儲けるか、それとも、こいつに物をいはせて太く短く、この人生を押し切るか……」この妄想めいた思案によつて、しつかり腹を据ゑかねてゐるうちに、須本は梅子と櫻丘の連れ込宿で、危い逢瀬を迎へるに至つたのである。

「でも、あたし、やはり將來、洋裁學校の經營でもやつてみたいわ」

須本が、宿の女中を呼んで、早やそそくさとショート・タイムの宿賃を支拂つてゐる手付きを眺めて、梅子は、やうやく情念で熱ゑ立つやうな眼のいろをした。

「さうか。それなら丹治とはハッキリと別れる腹は付いてゐるんだな」

「せめて洋裁屋でもやれるなら……」

「やれなきや、動きが付かないか」

「さういふわけぢやアないんだけれど、わざわざ、いまの女房稼業を止めて、又、あなたの女房になるだけぢやア藝がないでせう。あなただつて、ほんたうの腹は、あたしを二號みたいにしておきたいんでせう？」

圖星を射されて、須本の瞳がいらつくやうに烈しく動いて、

「おい、そろそろ出て行かう」

「あいよ」

路上に出ると、サンマア・タイムの七時といへば、まるで白晝同然である。梅子と須本は櫻丘から澁谷の盛り場さして歩いていつたが、誰知るまいと考へてゐたこの兩人の忍びの姿を、省線の改札口から當の丹治にハッキリ見られてしまつた。梅子はしかし、そのことを丹治からすぐには責められなかつた。丹治も、これは大變だと氣負ふあまり、容易に口には出せぬまま、つい、ずるずると手強い獲物を狙ふ獵人の愼重さで、ぢいッと樣子を覗つてゐるのであつた。

3

いま丹治にしてみると、梅子の不貞は疑ふべくもない事實と化した。それでなくては、歸還以來、何十日といふものを、よしなき事情や都合くらゐで、夫婦が共寢の實を果さぬといふ奇怪事など成り立ち得まい。丹治は嫉妬で、眼も眩むやうに思つたけれど、しかし下手に騒ぎ立てて姦夫姦婦を煽り立てる愚は避くべきだと分別した。いまの丹治は、表面、事を荒立てずに梅子の急

所を摑むのが得策で、さうするため最も無難な方法は、それとなく梅子に同衾を迫ることだ。丹治はそれを生ま嚙りの新約聖書で、「人もし、わが左の頰を打たば、更に、右をも打たすべし……」といふ底の、廣大無邊な人間愛だと思ひ込まうとするのだつたが、しかし、そんな丹治の思念を支へてゐるのは、ただ一筋の獸慾に過ぎないのである。けれど、ともかく、丹治はそれを何よりも寛大な精神だと信じ込んだ。そしてその方法にうつたへるには、さしたる苦痛や努力なども不用で、ふと蠟燭の火を燃やすのと同じやうに、一もとの官能を搔き立てれば事は足りた。

「おや、お前、どうしても、いやだといふのか……」丹治のキリスト的な寛大さをも、やはり梅子が拒むと知るや、俄かに丹治は奈落へ陷ち込んでいく自分を感じた。すべては終りだ。よしんば梅子に不貞の實があらうと否とはもう問ふところではないわけで、かかる不當な虐待は、十分離婚の理由になると思つた。しかし、只で引き退る筋合ひではない。

丹治は亂れた寢卷きの前を改めて搔き合はせつつ、寒々とした心境から割り出した考へは、せめて、こいつを金にしようといふ智慧だつた。

「よし。もう分つたぜ、お前が、あくまで、おれと一しよになるのがいやなら、相當な慰藉料を貰はうぢやアねえか」

「何ですッて？」
「金だ。いやさ、かうなりや、お互に明朗なビジネスといかう。何も、シャチコ張ることはありやしない。お互に、じつくりと膝突き合はせて出來る話をしようぢやアねえか……」
「どんな話をするんです？」
「いや、考へると妙なことだと思つてゐたが、近頃、この近所の連中も噂してゐる。丹治の家ぢやア、よそが賣食ひだの何だのといつてるのに、働き手が一人もなくて、あれだけ暢氣な暮しをしてゐる。いつたい、どこから、誰が貢いでゐるんだらうッて……」
「いいえ、うちだつて相當なタケノコですよ」
「止せやい。いつまで、とぼけやがるんだ。もう、何もかも知つてるんだぞ。貴樣、五月十七日、夕方の七時頃に、澁谷で、どこの誰方さんと乳繰り合つてゐやアがつた？」
「えッ！」さすがに梅子の顏いろが一變した。丹治としては單に改札口の前方をヨタヨタ歩く姿を目擊したに過ぎないのだが、聞いた梅子は早合點して、櫻丘の連れ込み旅館の現場を見透かされたと思ひ込んでしまつたのである。
「どうだ？　返答は出來めえが……」

「……」

「よし。だが、そんなことは、どうでもいいんだ。今更、おれだつて野暮はいはねえ。——どうだ、梅子。一本で我慢してやる。その男から、お前の腕で、うまく金を引つ張り出してみろよ」

「一本とは、いくらなんです？」

「十萬兩だぞ。一萬ばかりの端た金ぢやアねえんだ。十萬兩、ビタ一文も、お負けすることは出來ないんだから……」

「まア、ずるぶん、ひどいことを云ひ出すわね！」

「文句いふな。それが、いやなら、おれも意地だ。明日にも、お前たちを姦通罪で告訴してやる。新憲法で、三年程、喰らひ込んでくるがいいや」

「いいわ。あたし、考へます。いえ、暫く考へさして……」

梅子の氣配に並々ならぬ決心の色が漲つたので、丹治も遂に引くに引けない氣持になつた。

「行け、行け。お定まりの、姦夫姦婦の御相談といふ奴だらう。——まア、ゆつくり話し合つて、十萬兩の工面をして來い」

梅子は早速、着物を着換へて、駒場の家を飛び出したが、夜遲くなつてからキュッと唇を嚙み

しめて歸つてきた。丹治は、夕飯も食べる氣がせず、疊に寢そべつて配給の煙草を吹かしてゐたが、

「おい、どうだつたい？」

「ええ、多分、お金は出來るでせう？」

「何だつて？　いやに豪勢なことを云つてやアがる……」

「だつて、あなたは、どうしても、それだけのお金を出せといふんでせう？」

「何にしても、ふざけた奴等だ。——で、その金は、いつ出來るんだ？」

「あなた！」と梅子は最後の勇をふるつて、「——あなた、やつぱり、どうしても、そのお金、あたしから取らうといふの？」

「取るとも」

「いいわ。それぢやアもう仕方がない。明日、あたしが持つて歸るわ」

「ほんとか」

「さうです」

「いざとなつて、一日だつて容赦しねえぞ」

「いいわ。きつと耳を揃へて、拂ひますから。——何しろ、拂へばいいわけでせう？」
「文句なしだ。それだけの大金が、耳を揃へて出せる奴なら、お前も、そいつの二號になれば大したものさ……」
翌日、午後遲く出かけた梅子が、夜の十一時頃になつて丹治のもとへ歸つてきた。見ると、汚い風呂敷包みに、ずつしりと札束らしいものをくるんで小脇に抱へてゐる。
「金がきたのか」丹治の聲が少し變つた。
「ええ」
「よし、待つてゐろ」
と、丹治は梅子の歸るのを待ちながら、つれづれに考へ出した緣切狀の文句を、ぶつくさ口邊に呟きながら、いやに慌て込んで小机に坐り込んだ。半紙に、所要の文句を書き込み、仰々しく爪印まで捺した上、やおら梅子に向き直つた。
「これで、お互はきれいに他人だ。——ぢやア、その金を受け取らうか」
「どうぞ」
梅子がクスンと鼻のさきで冷笑しながら、ずつしりと重味を湛へたその札束の詰まつた新聞紙

の包みを出すと、丹治は、思はず「有難う」といつて、眼をしばたたいた。ところが、ちやうどその一瞬に、突如、表ての格子戸が押し開かれて、さッと一人の壯漢が忍んできた。「あッ」と、度膽を拔かれた丹治の立ちあがる暇も與へず、靴ごと座敷へ躍りあがつて、イキナリ、手にした小さな兇器で續けざまに丹治の頭を亂打しだした。丹治は狼狽しながらも、それをピストルだと直感して猫のやうに無抵抗になつてしまつた。しかし、打つだけ打つて、その邊を見廻した男の瞳が、眼深に被つた國民帽の庇の下から疊の上の札束に眼を付けた。

「野郎！　命が惜しくば、その金をすつかり寄越せ……」

丹治は、無意識にその金包みを引ッ攫み、一刻を爭ふやうにして、相手の足もとに手を延ばした。

「よし」といつて、思はぬ丹治の神妙さに滿足さうに肩をゆすつた男は、又くるりと身を飜へして、玄關の上り框に去つた。

「梅子、梅子……」

丹治はシベリアから歸還以來、おそらく始めて、何の成心もない自然な呼びかけで彼女に聲をかけた。けれど、梅子は隅の疊に打ち伏して、ただぶるぶると肩さきを慄はせてゐるばかりであ

る。丹治はそつと立つて行つて、
「おい、大丈夫だ。もう、その邊に、まごまご、ひそんでゐることもないだらう……」
「大丈夫？　ねえ、あなた、ほんたうに大丈夫？」
と、石のやうに固くなつて、梅子は脅えたやうな視線を起した。
「もう大丈夫だ。しかし野郎、飛んだ眼に合はしやがつた。――ホラ、こんなに、頭の毛が抜ける程、ぶちやアがつたよ」
「ああ、たいへんだ！」梅子はイキナリ聲を立てて、その邊をうろうろと見廻しながら、「あなた、お金が？　ああ、あの十萬圓ものお金が……」
「何だと？」
釣られて、丹治もそはそはしながら、次第にこの場のぜんたいの實害が、ハッキリ胸のなかに印象されてくるのである。
「ほんたうだ。奴は、あの金を強奪していきやアがつたな。何てえ、運のわるいおれたちだらう？」
「ねえ、あなた、警察へ訴へませうよ。あたし、どうにか人相は覺えてるわ。いいわよ。あたし、

あの強盗が、茶色のボ〻背廣着てたのを覺えてるわよ。それから、帽子は鳥打帽で、足は、たしかズックの白靴だつたと思ふわ。人相は、色が黑くて、肩幅のガッシリした、脊の低い、よく太つた男だつたわ……」

「何だつて、お前はそんなによく覺えてるんだ。おれは、スーツと目の前を煙が通つたくらゐにしか覺えてゐねえや」

「そりや、あなたは、のつけから滅茶々々に叩かれてゐたんですもの」

梅子はさあらぬ顏で應へたけれど、しかし、いまベラベラと述べ立てた人相着衣の類は、およそ彼女の指摘とは正反對で、而も、それさへ前以て、ちやんと用意してゐた要點を口にするやうな自然過ぎる不自然さに蔽はれてゐた。けれど、すつかり魂から動顚してゐた丹治には、それが夢にも可笑しくは見えなかつた。丹治は、メンソレータムの鏢を出して、痛む腦天にせつせと藥を塗り込みながら、いかにも氣拔けのしたやうな妄想でうつらうつら考へてゐたことは、自分もいよいよ食ひつめたら、いま闖入してきた手際鮮かな強盗みたいに、一つ、どこかで荒稼ぎをしてやらうか、といふやうな空恐しい觀念だつた。丹治は自分にもそれが出來ると考へ込んだ。三年前には、自分も、華北の邊境で、これに類する徵發といふものを數々犯した覺えがあつた。軍

服をまとつて出來たことが、いま、どんなボロのジャンパアでも出來ないことはない筈だと思つたりした。

「いいさ、いいさ。折角、手に入つた大金だつたが、どうせ悪錢身に付かず、とは、よく云つてある。入らぬ前を考へたら、もともと一錢の損でもないや……」

丹治は、あくまで交番へ訴へるといふ梅子をなだめて、その夜は、とりわけ戸締りを嚴重にして寢に就いた。薄い夏布團にくるまつてから、梅子の胴體がぶるぶる慄へて、容易に寢つかれなくなつてしまひ、「あーあ」と何度も溜息を洩らすうちに、ふと隣りから丹治の腕が、むんづと延びてくるのを感じた。

「梅子。しかし、結局、おれたちはどういふことになつちやつたんだ？」

「さア、とにかく、一應、他人といふことになりました……」

「さうか。すると、今夜の被害者は、このおれだな？」

「さうよ。狡いわ……」

「ウフフフ。妙な氣持だ。——で、するとおれはお前と赤の他人といふことになつたのかね？」

「さうですとも。だつて、あの緣切狀は、あたし、ちやんと頂いてるわ」

「さうか。それを、返す氣ないかね？」
「誰に？」
「この人に」
と、丹治は人さし指をあげて、ふと自分の鼻のあたまを突き示した。
「いいえ、だめだわ。あたし、一應、きまりの付いた身體になつて、よくよく今後のことを考へてみるつもりよ。――だつて、あなた。インフレだ何だといつても、かりそめにも、十萬といふお金は、仇やおろそかに出來ませんもの……」
「ほんたうだ。それはさうだ。すると、おれは十萬圓の金を造らねば、お前とは他人だな」と次第に深刻になつてくる表情に、強ひてつくり笑ひを泛べながら、丹治はうめくやうな聲を出した。「しかし、大した金だといつても、その氣になれば、摑めない金でもないや。もし、造つてお前に返せば、お前は又、おれの女房になるか……」
翌日、梅子は、かねて打ち合せておいた通り、須本に會ふために櫻丘の宿屋へ行つた。すると須本は、入つてくる梅子を眺め捨てて、ふいに傍らの新聞包みをぽんと放り出し、「おい、これ、ほんとに呉れてやらうか」と、いやに凄んだ含み聲でいふのだつた。

「何なの？」
『金だ。十萬もないけれど、ざつとそれに近いものだらう」
「いつたい、どうしたといふんです？」
と、梅子は本能的なためらひで、その紙包みが、いかにも不淨な品物みたいに思ひなされて、手をふれる氣もしないのだつた。
「ウフフ……瓢箪から駒が出るといふことがあらア。ゆうべ、おれは、あの足で、すぐあのオトリの金包みを溝へ捨てて考へ込んだが、あの紙包みの中味が假りに何だらうと、要するにおれは十萬圓の强盜をやつてしまつた人間だなと思つたなア」
「それで？」
「それで、つらつら考へると、いままでの、みみッちい生き方が味けなくなつてきたものだから——」
「何だつて？」
梅子が毆られたやうな顏になると、須本は、急に眼を光らせて、
「これだ。こいつで、歸りがけに本物の荒稼ぎをやつちやつたよ……」

と、イキナリ、内ぶところから小さなオモチャみたいなブローニングを摘み出した。
梅子は茫然として、そんな須本を見据ゑてゐたが、度胸を決めて、ハキハキいつた。
「何だ。それで、たつた、これッぽつち？」
「いや、まだ有る。もう一包みあつたけれど、そつちは、當座、おれの小遣錢にするために、澁谷の銀行へ預金しておいたから……」
大金が轉がり込んだせゐもあつて、その日、須本は、旅館の料理に種々むつかしい特別な註文を付けた上、眞ッ晝間からビールをあふつて、荒んだわが身を劬はるやうにして、遊び暮した。夜になつて、梅子はいつたん駒場へ歸り、丹治の樣子を窺ふために何食はぬ顏して家に入つた。すると、丹治は遲くから家を拔け出して行つたらしく、而も晩めしも存分に食べたやうな形跡である。
「おや、どこへ行つたのだらう？」
梅子は部屋の隅々をうろうろ歩いて、いい加減な戸締りのやり方に、舌打ちしながら安全錠など締め直して、仕方なく、寢床を延べて先きに寢た。夜がふけてから、梅子はぐつすり寢込んでゐると、ホトホト叩く玄關の物音で眠を醒ました。

「おい、梅子、梅子……起きねえか」
梅子はのつそりと猫のやうに起きあがると、あくびをしながら寢卷の紐を締め直して、悠然として上り框へ歩いて行つた。
「誰方？」
「おれだよ。丹治だ。早く開けろ……」
「まア、ずゐぶん遲いぢやアないの。いま、幾時頃？　おやおや、あなた、もう二時廻つてゐるぢアないの……いつたい、どこへ行つてゐたの？」
「人並みの女房みてえな口を利くな」
ガチャリと錠前をはづすと同時に、亂暴ないきほひでガラス戸を開いた丹治が、ヒラリと彈みをうちに含んだ身のこなしで、三和土のなかへ飛び込んできた。梅子はそんな丹治の姿を一瞥して、思はず、「あッ」と小さな叫びをあげる程、驚いた。
「どうしたの、あなた？　いつたい、何てえ恰好してるの？」
じつさい、梅子が驚くのは當然で、丹治は、尾羽打ち枯らして內地へやつと送還されてきた日と同じ薄汚れたヨレヨレの軍服に、地下足袋で、突ッ立つてゐたからである。けれど、丹治は、眼を

みはる梅子の白い、ぽつちやりした顔を見返す途端に、ふと我れに返つたやうな氣負ひ方で、「おい」と含んだ囁きで、何やら小脇に抱へてゐた風呂敷包みを彼女の面前に突き出すのだつた。

「おい。すぐ返さう。耳を揃へて十萬兩だぜ……」

そして丹治は、どツかと上り框に腰を下ろすと、いやに落ちついた物腰で、軍歌らしいメロディを口ずさみつつ、汚れた地下足袋のコハゼを、はづしにかかるのだつた。

白

夜

社會主義が赤といはれて怕がられたころの話で、（といつて、わたくしは何故それが赤と呼ばれるのか今もつて何も知らぬうかつ者だが）當時はもとより、永く後年に及ぶまで、人が、いはゆる赤などと云つてゐると、わたくしは自然に、よく香代の上を考へたものである。

香代はわたくしには從姉に當り、大阪道修町の藥種問屋の長姉であつた。香代自身、その赤には何の關係もなく、又、現にいまでも關係はないかも知れぬが、かつて香代が一身上のまちがひを惹き起して親戚中の評判になつたとき、叔父にあたるわたくしの父を訪ねて身の振り方の相談にきたことがある。その際、父は本人に云ふだけのことを存分云はせて、最後に自分の意見を強く述べた。もつとも、意見の內容そのものよりも、偶然次の間で籬越しに耳にしてゐたわたくしには、父の喋つたその言葉、それ自體がめうに頭に浸み込んだのを忘れない。父は云つた。

「よろしい。あんたの考へはようわかりましたわ。そやけど、わてはその緣には絕對に不賛成

や、何でやと云ひまよか……さう云うたら何やけどあんたはことしもう二十八やろ。そしてその布井君は二十一やろ？　これから東京へ出ていくのはよろしいが、しかし大學校へ行くにせい行かんにせい、布井君が一本立ちの男になるのはまア三十と見とかなあけへん。すると、あんたはそのとき幾つや？　かれこれ四十でッしやろ。それまでの苦勞は仕様がないけど、これでまアやれやれといふときに、あんたがぽんと袖にされるといふことは考へてみたことおますか。そら布井君、いま何もそんな薄情な考へで居やはれんやろ。そやけどそのときになつてくると、よう世間ではさうなるもんや。それも、而も、布井君がまちがひなう、成功しやはッたときの話や。うまいこと行つてそれや。まして、その布井君のことやけど、その人、大分、赤やといふことやおまへんか……」

「赤とは？」香代がそつと瞳を起した。

「ほら、よう、赤々といふやおまへんか」

「ああ、そのことだすか」香代は笑つて、寂しさうに首を振つて、「そんなことおまへんと思ひますけど……」

「いや、わてはあんたのお父つあんからも確かに聞いたわ。もつとも、この際、それは赤であら

うが、何であらうが、ともかくわてはこの縁には、あんたの將來の仕合せの爲、氣持よう贊成でけまへんわ」

わたくしは何食はぬ顏で聞いてゐて、而も父のいはゆるその赤といふ言葉さへ、おそらく父自身が考へてゐる重大な意味とは關係なく、ただ何かなまめかしく、たとへば口紅の紅のことやフランス語のルージュといふやうな單語などに繫がつて行き、それが別に謂はれなく當時の香代、といふより、その事件ぜんたいの印象として眼前に美しくひろがつていくのだつた。

香代は然し、このことがあつてから半年も經たない翌年正月、布井と一しょに東京へ出て行つた。表向き道修町とは緣が切れた。そのとき香代は二十九、布井が二十二、わたくしが十九のころの話で、いまからざつと二タ昔も前のことだ。又、その翌年、わたくしも東京に出て、香代に逢つたし、布井も知り、お互に或る程度の親しさを得た。けれど布井とわたくしは大學がちがつてゐて、もつともそのせゐでもあるまいが何か布井はわたくしを憚つて居り、いつもどこやら腹を探つてくるやうなよそよそしい態度を示した。一つには、わたくしが香代に近い親戚筋に當る故かと察せられたが、香代はわたくしには名目上の從姉であつても實は血のつながりといふもの

はない。香代の父の半治郎は、わたくしの父の兄であつて血縁にちがひないとしても、他家から入つた叔母のスエが事情あつて香代を生んで、その後、四ツにもなる香代を連れ子として一しよに片附いてきたからである。スエは新町で藝者をしてゐたさうだが、性格の弱い半治郎が惚れ込んで、連れ子を承知で正妻に据ゑた故、香代は乳母車に乘せられて道修町の家にきた。香代の家は大阪の道修町でも中どころの藥種問屋で、香代の下に明子、一枝、綠といふ娘ばかり三人あつたが、もちろん全部香代がきたあと道修町で生れたのである。昔、わたくしはこの末娘の綠を嫁にもらはぬかと冗談めかして家の者から冷かされたことがあつて、「あほらし。いとこ同士で結婚ができるもんか」と眞顏になつて反撥を試みたその心に、齡うへの云はば長姉で、而も彼女たちとは全然ちがつた肩身の狹い香代のことが何となく意識の隅にあつたのを覺えてゐる。わたくしは幼いころから香代を氣の毒だと思つてゐた。必要以上といふより、寧ろ實際以上にそのやうな香代の身をややセンチメンタルに考へて、自分勝手に力こぶを入れてゐたが、もちろんそれは香代にはわからず、又、或る意味では香代には何の關係もないこつちだけの氣分であつた。香代は別段これといふ不自由もなく三人の妹たちと同じやうに道修町で大きくなつた。人並みに女學校を出て、三四年經つた時分、といへば、わたくしがまだやつと中學に入つたか入らぬころのこ

とだが、行儀見習ひといふ名目で阪神沿線の夙川にある、馬庭とか呼ぶ或る私鐵の重役の上女中になつて行つた。わたくしは哀れな氣がして、それを勸めた叔父の半治郎を鬼のやうに因業な奴だと思ひ込み、或るとき香代には何の關係もない他の事柄で母親と議論してゐて、ふとその香代の夙川ゆきを持ち出して叔父の半治郎を薄情だと攻擊すると、母は一途に可笑しがつて云ふのであつた。

「そらあんた何を云ふねん。あほらしこッちや。――香代さんが夙川の屋敷へ行きやはッたんは、あら香代さんの强つての望みで、あの人がやつてほしいと賴むさかい、叔父さんがやらはッたんや。家では誰も贊成したはれへんけど、實云ふとナあの香代さんはあんなゴタゴタした商賣人の家にゐるのがきらひな性分らしいわ。やつぱり生れは爭へんものとみえて、ああいふ大きな屋敷にゐて、お茶立てたりしゐるのが好きなんや。實云うたらナ、あの香代さんのほんまのお父さんといふ人は、明治天皇に足袋まで貰はッたえらい方やといふこッちや……」

「えゝえ？」とわたくしは眼を圓くして、「明治天皇に足袋もろた？　そら、いつたい何する人や。いつたい、何ちふ人や？」

「何ちふ人やら名前まで知りまへんけど、とにかくそんなえらい人や。さういふえらい人の血イ

受けて、えらう氣位の高いところが香代さんにはおますのや」

で、わたくしの一知半解の同情などはおよそ見當はづれになつたけれど、然し却つてさういふ身の上を知れば知つたで、逆にわたくしは意味もなく香代を寂しい人間だと思ふ氣持が一方的につのるばかりだ。

香代は夙川に何年かゐた。そのうち、馬庭の三男の欣也といふやや低腦の道樂息子に見染められて危く關係が生ずる直前ごく內輪に祝言を擧げて阪急沿線の六甲に氣の利いた家を持たせてもらつた。わたくしはガッカリして欣也はともあれ、香代のことを何といふ見下げ果てた女であらうと考へた。氣位も理想もあつたものかと蔑んだ。わたくしの關心は急速に香代から薄れて行つたが、然しその結婚生活はうまく行かず、およそ一年にもならぬうちに欣也が神戸に玄人あがりの情婦を造つて圍ひ、そのはうに入り浸りで、ただの一度も六甲には歸つて來ない。そこで香代から願ひ出て、六甲の家を引き拂つたうへ、再び夙川の屋敷へ戻るやうなことになつた。そして欣也にとつては好都合にも、まだ香代の籍さへ入つてゐなかつた故、香代は結局、名實ともにもとの木阿彌の上女中同然で、それからやはり花を生けたり茶を立てたりして昔通りの生活に返つてしまつた。けれど、以前よりもわるいことには、神戸の欣也がそれこそほんの氣まぐれだが、

たまにふらりと夙川へ金をせびりに姿をあらはすことがあつて、ただ漫然と一泊ぐらゐはしてゆくので、香代はいやでもその日を事實の妻として仕へねばならぬことがあつた。

もつとも、それが道修町や引いてはわたくしの家などにわかつたのは後のことで、といふのはこれから述べる事件が起つて初めてわかつたことで、そのうち香代は同じ夙川の屋敷にゐて書生をしながら關西大學の夜學に通ふ七ツも齢下の布井と繼に陷り、薄馬鹿ながら欣也に知れて攻め詰まれ、突如須磨まで驅け落ちするやうな始末になつた。然し簡單に居所を突き留められた香代は直ちにその足で道修町まで戻されたが、布井はいつたん夙川に引きあげた後、果してどういふ談判を重ねたものか、翌日、香代のあとを慕つて道修町に押しかけてきて動かない。香代と一しよにならうといふのだ。布井は兵庫の生れだけれど、兵庫界隈には肉親らしい者は只一人とてなく、云はば天涯孤獨の身の上だつた。力づくで追ひ歸せば自殺でもやりかねない樣子にみえた。香代の父の半治郎が親戚中のしつかり者を呼び集めて、布井を一途に說き立てた末、やうやく天神橋筋の安下宿に移したのはそのせゐである。それで布井もいつたんは鎭まり、又、辛うじて世間態を繕ふだけのことは出來たが、根本には何ひとつ解決を見せてゐない。道修町では、あくまで布井と手を切らせようともつぱら香代を攻め立てた。

香代がわたくしの父を訪ねて、すでに前にも述べたやうに父から不贊成を云ひ渡されたのはそのころのことである。香代は迷つて相談にきたわけではなく、親戚中でも殊に發言力の強い父に、道修町の義理の父を說き伏せてもらひたかつたやうだ。で、香代には父から意見されても思ひ直す色がなく、ともかく自分は布井を信じて、布井と生涯苦勞をしてみると泣きながら云ひ續け、その晩、家から呼んだタクシイに乘つて道修町に歸るまで同じことを繰返してゐた。何でも夏の終りのころで、夜半も二時に近い寒々した時刻ゆゑ人通りなど殆んどなく、わたくしは薄暗い自家の門の前で、タクシイがやつてくるまで母と香代との傍に立つて、ただ茫然と小田原提灯をぶらさげて待つてゐた。タクシイがきて、香代は改めてわたくしたちに挨拶すると、ひらりと白い絽縮緬の薄い夏羽織をひるがへしてステップにあがつて行つたが、その弱々しい寂しい物腰、それを微かな提灯の明りでみつめながらもわたくしはまた、父の喋つた言葉から未知の布井に或る特別な親しみを寄せ「人生戀すれば憂患多し。戀せざるもまた憂患多きを」といふやうな、當時偶々雜誌が何かで讀んで覺えた或る小說家の人生觀上のマキシムを重苦しく考へてゐるのであつた。それは同情といふよりも美しい香代の心を捉へ得た布井に對する一種羨望に近い氣分であつたのを忘れない。

そんな布井が、東京で、何となくわたくしを憚るやうな氣配を見せることは心外でもあり、又、寂しくも感ぜられた。初めのうちは、かつて香代と一しよになることを最も强硬に阻まうとした親戚の家の奴、さう布井が考へてわたくしにまで疎ましい顏を示すのだと思ひ込んだが、さうでもなく、布井はとかくわたくしが香代に接近するのを好まぬやうで、それが布井特有の謂はれない嫉妬だと後にわかつた、然し、といふより、それ故にこそ香代は兩者を圓滿にあしらふやうに氣を使つて、その爲、却つてわたくしは香代に親しむ度合ひが深く、又、その必要が他にもあつた。といふのは、香代が東京へ出て行つてから道修町のスヱは月々三十圓といふ金を梅田に近いわたくしの家まで屆けにきて、これがわたくしの母の手でわたくし宛の、月々の送金の爲替に加算して東京へ送られてくる。わたくしは郵便局で現金に換へ、自分の分を差引いた殘りの三十圓を香代に屆けにいくのだつたが、香代の母は家ぢうの目をぬすんで祕かに香代の身を案じてゐた故、このやうな要心深い內密の手順を踏んだ。わたくしはまた、その金を香代の手に渡すために少くとも月には一度逢はねばならない。わたくしは苦にするどころか、郵便局で現金を受取ると一時も早く香代を欣ばせてやりたくて、せつせと香代を訪ねたものだ。

「けさ着きましたで……」

さう云つて、わたくしはまるで祕密の手紙でも渡すやうに封筒に入れた金をそつと香代の手に握らせるが、

「さう。おほきに――」と香代が寂しく微笑しながら頷くのをわたくしは何より樂しみにした。最初、その金を入れていく封筒を、早稻田大學の校章入りのや、いはゆるカレッヂ・カラーといふ海老茶にWの白く浮いたシャレたものを用ひてゐたが、そんな子供じみた仕科は一年ばかりで止んだ。然し、わたくしの内攻しためうにひねこびた樂しみと或る輕いときめきだけは永く續いた。かうして、わたくしは戸塚から牛込の赤城下町や神樂坂へ度々行つた。もつとも、この用事以外でも何度か行つた。

當時、香代は赤城下町の左官屋の二階にゐて、布井を專修大學に通はせる爲、自分は神樂坂の玉突き屋で、通ひのゲーム取りをしてゐた。もつとも、香代は齡よりも若くはみえたがもう三十女だし、十七八からせいぜい二十四五のゲーム取りの監督もかねた役目で、特に美貌と才覺を主人に買はれて收入もただのゲーム取りとしては破格であつたさうだ。けれど、結局、ゲーム取りにはちがひなく、かういふ遊戯場には共通な或ろうはついた空氣を免れることは出來ず、時には店を閉めてから常連のお客に誘はれ、近所のすし屋やおでん屋くらゐへ行くことは仕方なかつ

た。布井はそれを極端にきらつたさうで、何んでも上京二年目の或る六月の晩のこと、香代が普段より二時ばかり遲く下宿へ歸ると、布井の態度が、いつもの布井とはちがつてゐる。

「おい」

「どうしやはツてん？」香代は驚いて、ぺたんとそこに坐つた。

「どうもかうもあるもんか。お前、酒を飲んでるナ。——もう玉突き屋は止めてくれ。明日から絶對に止めてくれ」

「止めて、どないして食べていくの？」

「三十圓で暮すんや。——月、三十圓で食べていけんとなつたら、おれは學校止めて、土方でも何でもやつたろ……」

香代が慌てて遲くなつた辯解をやりだすと、布井はいよいよ不貞腐れて、段々いつもと同じやうな手順で香代に一種の恫喝を試みてくる。といふのは、布井が前途に希望をなくしてただのヤクザな人間になることを香代は一途に恐れてをり、假りに自分が身を粉にして働いても何とか布井を男にしたい一念が、寢ても覺めても香代の心をモノメニヤックな強烈さで捉へてゐる。で、つまらぬことから萬一布井がへんに崩れて、ほんたうにあさましい境涯に陷ち込んだらそれは他

ならぬ香代自身にはこの世の終りに等しいのだ。そんな香代を、云はば布井は心理的に逆用するので、香代が土方や仲仕などといふ言葉に怖毛をふるふと、布井はわざと凄んだ眼をして、殊更冷笑に近い態度さへ示すのが例であつた。

「ふん。土方や仲仕が何で怖い？　あれも神聖な職業や。もし、それが馬鹿げて見えるといふなら、そら世の中が間違つとるのや。そんな世の中は一時も早う、ぶツこはしてしまはなあかへん。ナニ、そのうち、ぶツこはしたる。そしたら低脳の放蕩息子は北海道へでも追放されて、否應なしに勞働でもさされよるわ。それが何であさましいのや。さうなるのが當り前や。働かざる者は食ふべからずや」

布井の理窟はともかくとして、その下心がえげつなく、かうして香代を留め度なくヘラハラさせる一方、云はば前夫の欣也に向ける嫉妬、その憂さ晴らしを自慰的にちやんとしてゐる。香代は今更、欣也とのうとましい同棲生活を嫉妬されてもすでにこれには何ひとつとして、布井の心をやはらげる術がない。「たのしいと思つたことなど、爪の垢ほどもあれしめへんわ」と僅かに當時の實感に浸りながら布井に對して媚びるやうに呟くが布井は鼻でせせら笑つて、「あほらし。そらずつと後のこツちややろ？　そんなら、何でそもそもあんな馬鹿と一しよになること承知し

たんや？」

「夢みたいに、その時分、あたしの頭がぼんやりしてゐましたわ」

「さうやろ。夢みたいに樂しかつたこツちやろ？」

自慰は自慰でも、布井もこの話にふれてくると内心は苦しいらしく、その苦しさの限界をさぐることで祕かに自身に解毒の作用を試みてゐるとより思へなかつた。布井はその夜、寢床に入り、電燈を消してからも毒づくことを止めず、果ては香代と欣也との或る接近の祕密まで露骨な言葉で説明を强請した。さういふ布井はあきらかに苦痛の極點に達する模樣で、香代が遮二無二問ひ詰められて、あゝでもない、かうでもないと、へどもどしながらその場逃れに答へてゐると、突如、「止めい」とうめくやうに陰氣に呟き、われにもなく自分の體を搔きむしるやうに身悶えしながら、「おう、おう」と、さもやるせなく、苦しい吐息を聞えよがしに洩らすのだつたが、又、少時して同じやうに攻め立ててくる。

香代も肩を竝べた薄暗い寢床のなかで、昂奮しながら、ぶるぶる慄へてゐる自分がわかつた。香代は逃げ道をうしなつて遂に百の辯明も無用と覺ると、辛うじてわが身を支へるやうな必死の思ひで、

「そない責められるなら、あたし、もう死んでみせる。ほんとに死ぬ。死ぬか尼さんになるほか仕様がないわ。尼さんにさしとくなはれ……」

「尼になつて、それで、こつちの氣イ濟むと思つてるのか。ふん。ぢやらぐしたこと云ふな」

「濟んでも濟まんでも、尼になるより仕様がないわ」。

「あほ。それで欣也との罪が帳消しになると思てるのんか。おれに對して、それで償ひが付くと思てるのんか」

「それで濟まなんだら、この世はみんな地獄やわ……」

「そや。地獄や。よう云うた。ほんまに地獄や。地獄やぞ。どこまで行つても地獄やぞ。仕合せに生れた奴は、死ぬまで仕合せしやがるし、不幸に生れついた奴は一生ぎゆうぎゆう云うて暮さな仕様がないのや。馬産のボケを見てみい。あいつがお前をキズモノにして、それでどんな罰が當つとるのや。そしておれのこの苦しさは、いつたいいつになつたら消えるのや。おれは何で、こんなつらい目に遭はされるのや……」

香代は突然、それとわかるやうな吐息をつき、ふと永い不自然な沈默に陷ちてしまつた。そして最後に、かすかな蹌きを示すやうに、聲にも調子にも改めて出直したやうな響きをさめて云つ

た。

「そんならあんた、かういふあたしを、何で馬庭から自分のものにしやはッたの？」

「うぬぼれるナ」

布井は怒鳴った。急所に觸られた苛立たしさで、

「お前の體を利用したんや。お前の體、といふより、血統を利用して自分の血を清めようとしたわけや。何度も云うたが、おれのうちは代々の百姓や。然し、お前の體には、えらい上流の血が流れとるさうやないか。それがこつちに利用されて、たつぷり吸はれて、そのうへおれのやうな人間に征服されるだけのことや。――ざま見てみい」

「よう、そんな憎たらしいことが云へる……」

「何ぼでも云ふ。お前たちの血は、さうしてぢきに滅びるのや」

「そんなに自分の家柄や血を卑下せな、生きてゆけまへんのか」

「卑下？　あほ云ふな。卑下やないのや。世の中には、そんな征服の仕方もあるのや」

香代は布井と寢ながらこのやうなやり取りを重ねた擧句、その夜、といふより、もう殆んど雨戸の隙から白々あけの初夏の光を感じる時分に至つて、ふと最後の止どめを刺されるやうな或る

重大な不安を布井から投げ付けられた。もつとも、そのときは香代の神經が疲勞困憊の極にあつて、常態ではなく、單に布井の調子に乘つた毒づきに過ぎないと思つてゐたが、翌朝茫然と目を覺ましてその言葉の意味を改めて吟味すると、香代は次第に足もとの崩れるやうな心細さに陷つてきた。香代はふと哀しさうに、自身のヘアピンの轉がつてゐる布井のゐない敷布のうへをみつめた。布井はもちろん先きに起き出し、近所の市營食堂で十錢の朝めしを食べ、その足で學校へ出かけていくので、香代と共寢の敷布のあとはいつものやうに皺だけ殘して、藻抜けの空になつて居た。

けれど、その朝、香代にはそれが殊更に味けなく、その味けなさの正體がやはり布井の最後の言葉につながつてゐるのを感じた。布井は例の留め度ない惡態を散々こね廻した擧句の果、半ば自分に聞かせるやうに皮肉とも自虐とも知れない口調でそのときこんなことを洩らしたといふことである。

「然し、征服々々と云うたかて、實はお前に子が出來なんだら何もならんわ。それこそ、もとも子もあれへんわけや。而も、ただそれだけやない。さうなつたら、おれがお前を馬庭のボケから、横取りしたこの罪障は死ぬまでおれを苦しめるかもわかれへんのや……」

實はわたくしがかうした二人の閑着を、香代の口から聞かされたのはその事柄の起つた當時ではない。何年も經つてからだ。わたくしは大學に殘つてゐたが、すでに布井は三年課程の專門部を出て、折柄就職難で喧しい昭和の初期の荒波を搔いくぐり、何でも法規や法令の合本をつくるやうな赤坂の或る地味な出版會社に勤めてゐた。香代も玉突き屋を止めてゐて、四谷坂町のゴタゴタした崖下で月十三圓の小さな借家に入つてゐたが、もとより布井の給料だけでは凌いでゆけない。それで香代は見附に近い電車通りの大谷といふ帽子屋のレース飾りの內職を受けてゐたが、夏物らしい婦人帽や子供帽を何個も膝のまはりに轉がせながら、たまに訪ねたわたくしに、「さア」と云つて、それをやさしい然し手馴れた調子で素早く部屋の壁際に片附けるのを何遍かわたくしは目擊した。

わたくしには、もう月三十圓の小爲替を香代に屆ける必要がなくなつてゐた。それは布井に曲りなりにも獨立の生活力が生じたからだが、主な理由は他にもう一つある。香代の上京後二年半で、道修町の半治郎が病氣で死んだ。母のスエが、やれやれこれで氣がねなしに小遣錢くらゐ送つてやれると思ひ込んでゐた矢先、かねて跡取りの明子に迎へてあつた婿養子の幾之助が、父が

亡くなり、二十いくつで俄かに當主となつてしまふと、性格が一變した。だいいち、金錢にケチ臭く、又それを極端にさうすることが大阪商人に伍していく最大の要件だと呑み込んでゐる。幾之助は近江の出で、生え抜きの大阪人ならそこまでえげつなく運べぬことさへ、けろりと寧ろ手柄顔にやり抜いて憚らない。それはまだしも、幾之助の眼の付けどころが常人と異つて、商賣以外の興向きの世帶にまで絶えずケチケチと口を挿む。これには家ぢゆうで閉口したが、殊にスヱは臺所の切り廻しに窮屈がり、「――わても、えゝ加減もう草臥れましたよツて、この邊で樂さしてもらひまつさ。世帶はそろそろ明ちやんに責任持つてもらはやおまへんか」と臺所一切を明子に託した。別にさしたる考へではなかつたが、然しいつたんその責任を讓つてしまふと、スヱには思ひがけないことが生じた。他でもないが現金の出し入れで、それまで左程にも考へてゐなかつた十圓二十圓の小金の出し入れにも何となく窮屈な感じが伴ひ、かつては金錢そのものよりもわざわざ香代に送ることそれ自體を憚つたのに今度は逆で、送らうとするその以前に、金錢自體の出し入れが何となく面倒で、自然に周圍に氣がねするやうになつてしまつた。或るときスヱが梅田の家にわたくしの母を訪ねてきて、「近ごろ、どだい窮屈でやりにくうなりましたわ。あの人、生きたはるときは白うるさい人やと思てましたが、それでも今度の幾之助の世になるまで

は、萬事、もつとやりようて、氣がのんびりしてましたけど……」と、こんなことを喋りながら笑つてゐたのをわたくしは後に聞いた。

そこで香代への金も送りにくく、程なく布井も學校を出たしするので、別に相互でちやんと話し合つたわけではないが、例の小爲替の送金はいつの間にか自然消滅の形になつてしまつた。香代は然し、布井の手にする月給を、帽子飾りの内職で補ひながら世帶を工夫で極端に切り詰めて、表面さしてぼろも示さず暮してゐた。香代には自身の樂しみは何もないし、又その必要を何ひとつ感じはせぬが、ただ布井を男にしたい。何とか世間で知られるほどの者にしたい。その爲には、いはゆる現世の苦患は悉く苦にせぬだけの覺悟があつて、ただその目的を想ふことによつて必死であつた。布井は辯護士になるつもりで、在學中と卒業直後に高文試驗を二度受けて二度とも落ちたが、あくまで初一念を貫くつもりで勤めの餘暇には六法全書と首ッ引きで閉ぢこもつた。三度目の試驗の前夜、偶然わたくしが四谷見附で映畫を見ての歸るさ、ふと生暖い春の氣配に誘はれてぶらぶら坂町のはうへ降りて行き、布井の家にちよつと寄つた。布井はゐたが香代は不在で、どうしたのかと訊いてみると、最初布井は言葉を濁して返答を避けてゐたが、やがて聊か固くなつて、「實は――」と泣きさうな瞳をした。

「實は、あいつ、いま市ヶ谷八幡へ行きよつたんや。止めい云うても、どうしても聞き容れよらんで、今夜は是非ともお百度踏んで試驗が受かるやうに願を掛けるといふこツちやけど……」

それで、わたくしも試驗前夜を承知したので長居を遠慮しようとすると、布井は別に留めもせず上框まで送つて出てきて、

「あんた。これからどつち方面へ行かはるのや？」と云つた。

「さア、もう下宿へ戻らうと思てるけど……」

「さよか」布井はちよつと考へ込んで、又、決心を付けたやうで、「――そんなら濟まんが市電で歸つてもらへんやろか。そして、もしよかつたら市ヶ谷でちよつと降りて、市ヶ谷八幡覗いてもらふわけにいかんやろかナ？」

當時、すでにわたくしの下宿は神樂坂上の或る裏町に移されてゐた。四谷見附から市電に乘れば、外濠線のその電車はいやでも市ヶ谷八幡の石段の眞下を通る。わたくしは簡單に引受けた。

「降りてもよろし」

「濟まんけど、頼ンますわ。――そして香代には、とにかくいますぐ絶對に歸つてくるやうに云うてもらひたいのや……」

わたくしは市ヶ谷見附で降りて、すぐ八幡の高い石段をあがつて行つた。途中で、洋裝の女を伴ひ自身はベレなど頭に乘せた青年が、默つて外燈の光の下をすれちがつて降りて行つた。わたくしは何となく振り向いて、見下ろしてそしてそのときの自然な氣分、いや、その場に漂ふ一種の雰圍氣、それといかにも不似合な香代の悲壯な姿と引き較べ留め度なく憂鬱な或るたまらない情けなさに陷ち込んでしまふのだつた。

わたくしは又石段をあがりながら、いま、もし、本殿へ近付いても香代がすでにそこにゐないことを何故となく心でねがつた。然しやはり香代はゐたのだ。最後の段々をあがりきつて、本殿のある薄暗い臺地へ入つていくと、香代は正面の賽錢箱の前にゐて、ぢいツと背を圓くして蹲まり、まるで鳥が眠るやうに自身の顏を深く襟もとに突ツこむやうにして祈願をこめてゐるのであつた。背後に近付いたわたくしは、早や一刻の容赦もならぬといふ態で、

「姉さん、姉さん」と殊更靴を踏み鳴らし、さも馬鹿らしいといふやうに笑ひだした。

香代はびつくりして立ちあがつた。

「まアまア」

「何や。あほらし……いつまで、そんなとこに居やはるのや?」

「うちへ寄つて來やはッたん？」

「そや。――布井さん、もうすぐ歸つてくれと云うたはる。えゝ加減にして、歸ンなはれ。何なら一しよにこれから神樂坂へ出て、梅原の牛乳でも飲んで歸ンなはれ」

「そら御馳走さん」香代は案外の明るさで頷いた。が、すぐちよつと考へ直して、「飲みたいけど、まア勿體ないから止めときまよ。それより、その邊ぶらつと散歩して戻りまよか……」

香代が梅原の牛乳を好いてゐたのを、わたくしはその玉突き屋時代からよく知つてゐた。世帶が苦しく、萬事極端な儉約を重ねてゐたのは事實であつたが、その窮屈な日常にゐて、香代にめうにこのやうな偏した小さな執着を持つ癖がある。わたくしはその氣持に阿つて、その晩、何度も神樂坂まで足をのばすことを勸めたけれど、同意されず、結局、一しよに八幡の境内を降り市ケ谷の土手道を漫然と歩いて別れた。

然し、そのとき、香代は布井の高文受驗のことを語り、果して今度は首尾よく受かつてくれるかどうかと思ひつめた不安な眼をして溜息をつくのであつた。「受かりますやろ」わたくしはただ、さう云はずにゐられない單純な衝動に驅られて答へた。わたくしは香代が布井の立身出世を一途に夢みて、ただもう最初の關門たる難しい高文にパスすることを切なく熱望してゐるとのみ

信じてゐたが、そしてそれは事實にちがひないのであつたが、その夜の香代の話によつて、その高文の成功は當然それ自體に伴ふところの名譽や虚榮や、自尊心や、また將來の或る地位やが十分布井に約束されるといふ歡び、その歡びの一歩手前で、寧ろ香代は目前差迫つた大きな不安に脅かされてゐるのを知つた。それは布井の性格に關係があり、性格は仕方ないが、布井が當面の失意で大きく曲つて（と、香代自身はさういふ言葉を用ひたけれど、わたくしはすぐ香代が夙川かも戻されて、わたくしの父を訪ねてきた夜をまざまざと思ひうかべた）段々取り返しのつかぬやうな深みへ進んでしまふのが怖いのだつた。而も香代はそんな話題にふれてゐると、次第に怯へ性のない嫉妬に慄へ、わたくし相手にああでもない、かうもあるかと布井のいはゆる人物論を繰返し、そしてつひに少しづつ自身が泥の深みへめりこんでいくやうにして打ち明けたのが、實はわたくしが前段に書いたところの、あの六月の白々あけの寢床での苦しい布井との問答である。

梅原の牛乳を遂に飲まずに濟んだお蔭で、といふのは、もしやその晩わたくしたちが電燈のケバケバした明るい宵の人だかりのなかにゐたとすれば、到底ふれることもなかつたやうな布井の祕密を、つい、わたくしは香代の口から聞くに至つた。香代はそれを數年前の、而もたつた一ト

晩のこととして語つたけれど、わたくしの受け取つた印象では、それが永く何年にもわたつて起つた事柄を香代が殊更一夜の出來事に要約したやうな感じを得た。

わたくしはめうな氣がした。そして香代を氣の毒に思つたのは香代によつて綿々として語られたその内幕、それを哀れに思ふ前に先づ香代自身の呑み込んで苦しんでゐるその苦しみ方の見當ちがひだ。香代は布井が差當り高文を首尾よくパスしてせめて行く末明るい見透しさへ付けば助かる。かう考へてそれに一途に靠れてゐるが、わたくしは疑問に思つた。もし假りに、布井がいまでも、香代に子供が出來なかつたら兩人が一しよになつたことを無意味だと事實のうへで信じてゐるとすれば、子のない、七ツも齢うへの香代として、さういふ布井の俗世間での榮達が何でそれほど一心不亂に望まれねばならぬのか。却つてそれは香代の立場を危くさせて、思はぬ憂い目を早めることになりはせぬか。寧ろ香代には、布井が左へ大きく曲つて、云はば自身の幸福に執着せず、おしなべて貧しい者や不如意な者の仲間入りをしてしまふのが却つて現世的な或る仕合せを約束して居らぬか……わたくしはこのやうに考へ込み、布井が高文を受かるにしろ受からぬにしろ、ともあれ他人の禍福以上に自分のそれを追ひ求めぬ人間になつてほしいとねがつたものだが、その分別、それも一皮裏を剝げば當時の世間の或る影響で、而もじつさいにそのこと

がわたくし自身にはやれないものだと見越した擧句、それを布井に託さうとする或る生まぬるい漠然たる正義感に過ぎぬのだつた。

けれど當時にあつてはさうも思はず、この片手落ちな判斷を土臺にして、わたくしは、香代も布井も何といふ矛盾に滿ちた支離滅裂な考へで身を燒いてゐる人間だらうと考へたものである。香代は女で、或る意味で仕方ないが、少くとも布井は言語道斷である。議論のうへでやたらに左翼めいた口調を弄し、而もいはゆる上流の血を征服するのしないのと凄んで呟く口の下で、早や香代を寢取つたその相手の馬庭の道樂息子に對しては終生拭へぬ罪障をかんじてゐるといふやうな、およそ常凡にして救ひがたい矛盾撞着を一身に集めた男だ。それが更に香代から尻ッぺたを追ひ叩かれて、必死になつて、高文をパスしようと何度も企ててゐるのだからわたくしは馬鹿馬鹿しくて仕方なかつた。前にも述べたが、わたくしは香代に卽した或る氣分から布井が今度の高文に落ちようが通らうがそれは大したことではないのだと考へてゐるうちに、段々それが一方的な苛立たしさに傾いてきた擧句、遂に見事に落ちてしまへ、と、かう思ふやうになつて行つた。

香代にはわるいが、わたくしがそのやうな妄想めいた考へに耽つてゐると、それから一週間もしないうちに香代からバガキの便りがきた。讀むと、布井が受驗の二日目の朝、激しい頭痛に見

舞はれた爲、規定の時刻にわづか遲れて遂に一切ふいになつたといふことである。わたくしはへんな氣がした。わたくしはそれに一種皮肉な暗合めいたものを感じて、果して布井がほんたうに寢床も起てない頭痛に襲はれたものかどうかと强い疑問が生じたのだ。然し、とにかくそのことを表面淡々と報じてゐる香代の心に、わたくしは暗然とした。わたくしは直ちに返事を書いて慰めたが、なほそれだけでは濟まぬ氣がして、折柄そのころ學校の講堂で催される或る有名な劇團の寄附興行の招待券を二枚持つて、四谷坂町へ出かけて行つた。

晝間のこと故、布井は勤めに出て行つて居合はさないが、香代は洗濯で濡れた手を拭きながら玄關にあらはれて、客をわたくしと見定めるや、

「――たうとう、駄目になりましてん」と眼に涙をいつぱい溜めて見据ゑるので、ふいにわたくしも泣きさうな氣持になつてしまつた。わたくしはその氣分からくる神經的な連想で、もし萬一布井が死にでもすれば、それこそ香代は打ちのめされて氣でもちがつてしまふだらう、と自然にそんなことが頭にうかんだ。

翌々日の土曜の午後、香代は布井と連れ立つて早稲田へきた。わたくしは市電の車庫の前で二人と落ち合ひ、すぐさま大隈講堂へ案内した。芝居は元來、劍劇といふものを賣り物にしてゐた

一座であつたけれど、その日の演しものは現代劇が二本で、而も最初の一本は左翼の新劇團でもかつて取りあげた新しい脚本だつた。香代はそれを面白がらず　次の演しものを樂しみにするらしかつたが、最初の芝居が濟んでしまふと「出ようか」と云つて布井がわたしたちを促した。香代は逆らふ女ではなく、直ちに起つて續いたが、寧ろわたくしは香代の氣持を考へて内心むつとしたまま、腰をあげた。

わたくしは二人を誘つてその邊でお茶を飲んだ。わたくしと布井が喋つてゐると、先刻から店の一隅に強い注意を注いでゐた香代の瞳が、そのとき急に生き生きと輝いてきて、

「あら、あの帽子、見覺えあるわ……」

さういふ視線を探るやうに辿つて見ると、むかうに女學生が二三人かたまつて坐つてをり、そのなかのややあどけない一番齡下らしい少女の帽子が香代の注意を惹き付けてゐるとわかつた。

「あほ、止めとけや」と布井は云つたが、香代は頑として耳にも入れぬ或る強さで、ぢいッとそのはうを見据ゑてゐて、やがて微かに笑ひを洩らして、「――ああ、なつかし。可愛らしいわ」と呟いた。

布井は構はず、わたくしを捉へて觀てきたばかりの芝居について盛んに議論を吹きかけてくる

のだつたが、そのうち、むかうの女學生が起ちあがつて何事か喋りながら表てのはうに出ていくと、香代はちよつと布井に一瞥をくれた後、そつと起つて何となくその少女たちのあとに續いて自分も出た。布井は話に身を入れて、最初はそれを手洗ひにでも立つたらしく思つてゐたが、途中でその意味をハッキリ覺ると、「ちよッ、仕樣のない奴やな」と呟いて、それから俄かに話題を變へて切りと香代を嘆むやうな言葉を弄した。

「氏より育ちといふことがある。あいつも、僕があんまり貧乏ぐらしをさせた爲か、もう、まるで氣位も何もあつたもんやないわ……あれ、見てんか」

「自分で、精を入れて拵へたので、何となしになつかしいのやろ」

「そらさうやが、あれは何や。ブルジョア娘にかぶつてもろて、それを眼ェ細うしてなつかしがつて——ちえッ、あれやから僕はうんざりするのや」

「然し、女はみんなあゝいふ氣持があるのと違ふかいな」と、わたくしは劬はるやうに戸外の香代のその、青いメリンスの着物をみつめてさりげなく微笑してゐた。

「いや。さうにも限れへん。やつぱり時代や。時代の違ひといふことはあるで。さう云ふと何やけど、香代もあれで女學校くらゐ出てるのに、やつぱり人間が古いのや。教養にも時代があるの

や。本よめば結構理解する力はあつても、その本、どうしても讀む氣がせんといふことは、力の有るなしと違つて、教養の古さ新しさの問題やらう……」

布井はそんな話から香代との佗しい生活の或る味けなさを嚙みしめてゐるらしく、暫く默つて、云はば自身の内側を覗き込むやうな茫然たる眼のいろをしてゐるところへ、香代が又いやに打ち悄れたよそよそしい物腰で戻つてきたのだ。

その晩、香代は歸りの市電のなかで布井とつまらぬ衝突をやり、それが坂町へ戻つてから一そう募つて遂に夜通し解決の見付からぬ喧嘩をやつたさうだ。といふのは、翌日夕方近く香代が突然わたくしの下宿に立ち寄つたので、何の用かと訊いてみると、實は昔勤めてゐた玉突屋がその後果して代替りしてゐないものかどうかを確めにきたと答へた。そしてすでにその店は主人が變り屋號も裝ひもすつかり違つて昔のおもかげが全然ないので寂しかつたと溜息をついてゐるのでその必要を遠廻しにわたくしは質してみた。すると香代は待つてゐたと云はんばかりに、ふいに捨鉢な眼を据ゑて、

「都合で、又、働かうかと思てますさかい」と云つて笑つた。

「何でや？」

「何でいふこともあれしめへんけど……」

さう呟いてゐる口の下で、香代はやはりそのことを喋りにきたのが目的だつたといふやうにして、前夜の爭ひをわたくしに打ち明けた。そして香代は話の中途で、「もう、恐ろしうなりましたわ……ほんまに恐ろしうなりましたわ」かういふ言葉を何度となく繰返し、挿入した。

だが、わたくしはその夜の事のいきさつを改めてこゝには書くまい。何故なら、それが何度激烈に繰返されても、結局はあの上京二年目の寢床の喧嘩を成し崩しに少しづつ繰返してゐるに過ぎぬからだ。

翌年、わたくしは學校を出て、やはり人並みに就職したが、氣分的にも實際的にもかうして段段自立的な生活に入つていくうち、次第に香代とも疎遠になつた。香代とはその後一年にせいぜい一度、いや寧ろ何年といふ間にほんの數へるほどしか逢つてゐない。

香代はたまにわたくしの勤め先へ訪ねてくると、さもさも出過ぎたところへ顔を出したといふやうに、廊下の隅や應接間で小さく陰氣に縮こまつて、案内の給仕などにも度はづれな氣がねを示した。そしてそれがわたくしの氣持はともあれ、一般に、他人の眼には却つて左程異樣とは映

ちぬくらゐ、どこか見すぼらしくもなつてきたし、齢も取つた。香代はそのころ布井のことはもうあまり語ることを好まぬらしい様子をみせた。いや、語るには語つたし、又それを語るために訪ねてきたとより思へぬけれど、その語り方が餘程變つた。香代は概して直接的な云ひ廻しを避け、どこか他人事を口にするやうな或る遠々しい表現を用ひたやうだ。けれど、その爲、わたくしには、かつて何度か眼を据ゑて喋つてゐたあの思ひつめたやうな昔の喋り方より一そう事態の重苦しさが察せられ、却つてそこに想像の餘地が倍もうごめくやうに思へた。

香代は時どき布井の外泊勝ちな日常をこぼしてゐた。然しそれを自身の立場から非難もせず、「あの人、やつぱり、根ツから放浪性が抜け切れへんのです」と云つて笑つた。わたくしは何となく可笑しかつた。香代はその放浪といふことをどう解してゐるのか知らぬけれど、とにかく布井が二十のころから曲りなりにも香代を妻とし、もう十年の餘も一しよに暮してきてゐる事實、それは氣持のうへでどうあらうとも外見、放浪などといふ言葉にはいかにもそぐはぬ感じであつた。

香代には世間ばなしが何もない。香代は大概、他のことを話さうと裝ひながら結局いつも布井にふれて、そしてすぐセカセカとわたくしの腕時計を覗き込むと、「あんた。お忙しいのでツし

やろ。濟んまへん。ちよつとそこまで來ましたもんやさかい」などと云つて、又、そそくさ立ち去つていくのであつた。香代はまた、こつちが喋つたことをよく覺えてゐて、わたくしが、その月何日ごろに社用をかねて大阪へちよつと立ち寄るなどと洩らすと、ちやうど出發の前日くらゐに、乏しいふところを工面して、よく山本の燒海苔や虎屋の夜の梅といふやうな名代の品を買ひ求めて、それをわたくしの生家に對する手土産に託したりした。

何でもそのころ、大阪の道修町では香代の母のスヱが死んだ。わたくしは香代の口を通じてそれを知つた。が、香代にはすでに永年往き來を絶つてゐた爲か、その死別から左程心に打撃を受けない樣子が見受けられた。わたくしは意外な氣がした。然しそれはさういふ事柄とは又別に、香代自身には早や現世の生まやさしい禍福には容易にうごかされない或る天然の寂しさが自立的に深く根を張つてゐたせゐかも知れぬのだ。

香代の母が亡くなつた道修町では、名實ともに幾之助の代となり、幾之助と明子の間に殆んど年兒で六人の子が出來てゐた。妹娘の一枝と綠も夙うに片附き、一枝は京都の銀行の山室といふ支店長代理に嫁ぎ、綠は御影の花長でよく通つた造り酒屋の花岡長三郎の總領息子の嫁になつた。わたくしは歸省すると、彼女たちの婿にも稀まには逢つた。山室と花岡も、逢ふと見るから

に慇懃で、いはゆる人をそらさぬ物腰で接する男たちで、わたくしは内心あたまを撫で廻されてゐるやうな感じを受け、こいつめ、と謂はれない反撥や輕蔑を感じながらも、やはり香代と陰氣臭く喋りてゐるのに引き較べると、自然にさうしてゆつたりと喋つてゐるのが氣持よくなつてゐる自分を覺つた。わたくしが彼等に逢ふ場所は、大概、ホテルか茶屋か自動車のクションのうへか、或は踊場や劇場の廊下であつた。

最後に香代と會つたのは、わたくしは何年前かハッキリとは覺えてゐない。が、何でも事變が始まつてから大分後のことで、すでにわたくしは勤めを引いていはゆる勝手な文筆生活に入つてゐた。わたくしは妻帶し、子供も一人出來てゐたが、香代はおよそわたくしたちが一度も買わたことのないやうな大きさの、立派なセルロイドのキュピイを手に入れて、それを持つてわたくしの家にきた。そしてその晩、わたくしの妻に對してひどく氣をかねるやうな樣子をみせつつ、實は布井にも赤ちやんが出來たと云つた。もちろん香代の知らないよその女に出來たのである。而も布井はそのはうに入り浸りで、近ごろはもう殆んど家に歸つて來ない。そのうち自分も野垂れ死にするかも知れぬと香代は云つて、突然、傍のわたくしの子供を抱きあげ、

「おゝおゝ、あんた可愛らしいこと。この、おちよぼ口はお父さんに生き寫しや。——あんたの

やうな赤ちやんには、をばちやんお金たくさんあつたら百圓のオモチャでも買うたげまッせ」と云ひながら左右にあやした。

わたくしは何となくそんな香代、その神經の剝き出してくるやうな激しい態度に、いやな氣がした。香代は然しさう云つた口の下からふいに又、荷物を置くやうに子供を寢かしそ、それからぢいッと自分の氣持だけで笑つてゐたが、やがて云つた。

「そやけど、どんなものでッしやろ。布井の子供をあたしの手もとに引き取つて、何とかあたしが育てる方法はありまへんやろか。布井、それを承知しますやろか……もし、何やつたら、あの人にあんたから掛け合つて頂くわけにいきまへんやろか」

わたくしが承知とも何とも云はずに「さア」とその事柄のむづかしさに首をひねると、香代は忽ち自說を引ッこめ、もうそんな思案は止めると云つた。そして自分もそこまで馬鹿になつて暮す必要がないと云つた。香代はまた、わたくしにその話を打ち明けたのがいやに氣懸りになるやうで、「――もう止めときます。そんな考へはきつぱり止めます。で、あんた、萬一布井に逢はッても、どうぞそんなことおくびにも出さんでゐとくなはれ」と念を押して何度も云つた。

その晩、わたくしは香代を相手に罪のない昔ばなしに耽つてゐて、とはいへ何だか仕方なくつ

まらなさうに喋つてゐて、かつて香代がわたくしの父を訪ねてきた夜のことに觸れた。わたくしはあの夜の何やらひらひら透き通るやうな薄物の袂を翻へした香代の姿を思ひうかべ、昔は香代も實に美しかつたと考へた。父が布井をいはゆる赤だときめつけると、「赤とは？」と靜かに束髪の頭を起した、その細い二筋ばかり鬢の毛が白いすべすべした頬ツぺたにすうつと垂れて下つてゐた事、その事實、いやそれをたまらなく艶めいて受け取つた自身の氣持をわたくしはよく覺えてゐる。父は死んだが、香代は然し四十の坂を越してまだかうしてわたくしの面前にゐた。そしてそのとき、わたくしが死んだ父の思ひ出からふと父の云つた布井のいはゆる赤といふ言葉を取りあげて、「けど、やつぱりあの人も赤やなかつたですな。」――結局、桃色でしたかナ」と同情をこめた或る非難を試みると、香代が見るから情けなさうに無理に造つたやうに醜く笑つた。わたくしは早やそこにまざまざと香代の老醜らしいものを感じ、ぎよッとして瞳をそらした。が、香代は暫く笑ふのを止めなかつた。

「うふふ……あたし、やつぱり欺されてゐましたんや。誰を恨むわけないやけど、やつぱり、こつちでうかうか欺されて居りましたんやわ」

かう、言葉では云ひながらも、香代は自ら欺されてゐたといふ苦しい過去を振り返り、その切

ない思ひ出に、ぼんやり全身で浸つてゐるやうであつた。それは、わたくしの思ひ過しであつたかもわからない。が、その晩のわたくしには、彼女の永い、いはゆる恨み辛みに滿たされた息苦しい歳月も、存外本人の香代にとつては、ハッと夢でうなされて、心ならずも現世のはかなさに引き戻された人間の、あの漠とした淡い殘り惜しさに見受けられた。わたくしの考へる十年は香代には一夜だ。いや、或は一瞬のまぼろしだ。わたくしはそれを、もうこれ以上、敢て覺ますに當らない。で、わたくしは何の偏見もなく始めて香代の老醜をまじまじと見据ゑることに努めた……。

わたくしが香代に逢つたのは、いまのところその晩が最後である。最後であつてほしいと希つてゐる。香代の生涯かけた一念には最初も最後もないがごとく、わたくしも又、それを汐に、彼女の生涯から遠去かりたい氣持がしきりと湧き起つてゐる。

あしのまろや

あしのまろや、といふ題をつけてみたが、しかし、實は、ここであしのまろやといふ意味には二つある。一つはもちろん、小倉百人一首で有名な、「夕さればかどたのいな葉おとづれてあしのまろやに秋風ぞ吹く」といふ、あの、あしのまろやである。つまり、家だ。ちっぽけで、貧弱な家のことだ。近頃、街を歩いてゐて、焼け跡のたうもろこしの葉ッぱの影に、吹けば飛ぶやうなバラック建ての小さな家がチョコンと建つてゐるのを見ると、わたくしの頭のなかには何となく、あしのまろや、といふやうな言葉がぽかりとうかぶ。さういふ意味だ。

ところで、これから述べようとする物語では、他にもう一つの意味があつて、そのほうが直接的な關係にある。ほかでもないが、或る機縁からわたくしが近づきになつた大阪生れの漫才師、芦野麿也のことである。芦野麿也といふ藝名は、もちろん上掲の歌から採つたにちがひないが、當初、彼が弟子入りしてゐた師匠といふのが、何でも芦ノ家日の麿とかいふさうだから、芦野は

やはり芦ノ家から採つたものにちがひなく、それを捻つて芦野麿也と洒落て名づけたといふ點に、いかにもこの世界には珍しい所謂インテリあがりの芦野麿也らしいところがある。で、つまり、さういふ二つの意味をふくめて、わたくしはこれから芦野麿也のことを書いてみるつもりだけれど、然し讀者は、題名にこだはることなく、思ひ思ひの感興の導くまま、勝手にどちらか一方の意味について重點を置いてもらつてよろしい。とにかく、ちよつと書いてみよう……。

芦野麿也の本名は今川である。今川福太郎とか、福三郎とかいつたらしいが、この今川には別に總領息子があつたところから考へると、多分、福太郎ではなく福三郎だ。が、そんなことはまアどちらでもかまはない。もう十年も昔のことで、わたくしがまだ日比谷の某といふ新聞社で學藝記者を勤めてゐた頃、或る日、突然この福三郎が、郷里の大阪も同じ町内、それも、わたくしの生家からみて眼と鼻の近くにあつたアタリヤといふうどん屋の主人に連れられて面會を求めてきた。アタリヤとわたくしとは古くからの顔馴染だが、福三郎は未知である。で、アタリヤが福三郎の請ひを容れて、この福三郎をわたくしに引き合せるために連れてきたわけであるが、然し、アタリヤそのものの上京はとにかくも、かうしてふらりと兩人が新聞社の應接室へ現はれた

といふ點にわたくしは奇異な氣がした。

會つて、話を聞いてみると、アタリヤと福三郎は、その頃大阪で澁立してゐた月掛けの積立て金を基にした何とか旅行會の會員で、二百人とか三百人とかの團體のなかに混り、箱根、熱海を見物し、東京を經て日光へ赴く途次である。さればこそ、アタリヤがわたくしの勤め先を思ひ出して突如、立ち寄つたのだと思つてゐると、實は福三郎をわたくしに紹介するのがアタリヤのかねての念願だつたらしく、その日、二人で應接室を辭するに當つて、アタリヤは窮屈な借り着みたいな背廣の胸をぽんぽんと叩きながら、

「まア、よかつたわ。こいで、わても肩の荷をおろしたみたいで、スーッとしましたわ。——とにかく、よろしう、頼ンまッせ……」

かういふ挨拶を何度も述べた。けれども、アタリヤがよろしく頼むといふ用件は、わたくしには相當の難題で、聞いたときからわたくしは心中で當惑してゐた。といふのは、アタリヤに連れられてきた福三郎の一身上のことであつて、福三郎はかねがね演藝界に身を投じたいといふ希望で、その頃やつと二十か二十一の若者だつたが、京都の同志社高商を中途で退き、盛んに芝居に熱をあげてゐる青年だとわたくしは聞かされてゐた。その福三郎が、道樂の域を通り越して、自

ら演藝界の飯を食はうと眞劍に考へ出したが、もとより親もとは反對で話にならない。家は町内でも指折りの素封家で、よろづ屋といふ雜貨商を營んでゐたけれども、土地や家作を全部合せて財五十萬を下るまいといふ噂で、當時としては町内の長者番附の上位に列する家であつた。そこで、福三郎の熱にうかされたやうな芝居入りの希望を打ち明けられると、今川の家では大騒ぎをした。その結果、福三郎は家を飛び出し、半ばは親への面當てに幾日も友達の家を泊り歩いて歸らなかつた。だが、泊り歩く友達の家にも限度があつて、最後は日頃行きつけのアタリヤへ入り込んだ。所持金は費ひ果して一文もなかつたけれど、何しろ名うてのよろづ屋の息子である。アタリヤは快く福三郎に飯を食はせ、泊めてゐたし、時には本人のねだるまま小遣錢に現金まで貸してゐたが、そのうち才走つたアタリヤのかみさんが不安がつて、せめて現金を貸すことだけは止めにしなさいと亭主に云つた。そこでやうやくアタリヤが福三郎の無心に對して濟りだしたが、或る晩、アタリヤがそろそろ店を閉めようといふ夜の十一時近くになつてから、俄かに福三郎が身支度をして店の土間へ降りてきた。「今頃、どこへ行きなはる？」と訊いてみると、福三郎は何となく卑屈な眼をして、

「どや？　おツさん。猪一匹、貸してんか」と云ふ。

「十圓だつか。――さア、いつぺん、をばはんに訊いてみるけど、大概、今夜は十圓ちふ金、あれへんかも知れまへんで……」

いくら十年前の話とはいへ、客商賣のうどん屋である。まさか十圓の現金に事缺く筈もなかつたけれども、敢てさう云つて斷つたアタリヤもアタリヤだが、そんな子供だましの拒絶に遭つてそれをすつかり本氣にしてゐた福三郎の、世事のうとさは年齢だけのせゐではない。然し福三郎は全くそれを疑はず、やゝ殘念さうに土間のラムネ箱に寄りかゝつて佇んでゐたけれど、そのうちヒョイとアタリヤの腰のあたりに眼を留めた。

「おつさん！」と福三郎の眼が笑つた。

「何だす？」

「どや、おつさん。もし、十圓ちふ金あつたら貸してくれるか」

「そら貸しますがな……」

「よし。ホナそのおつさんの帶にぶらさげてる十圓金貨、貸してくれや。それでも錢やろ。後できつとその金貨のまま返すさかいな……」

アタリヤは閉口した。然し、その金貨は、まはりを赤銅で卷いてあつて、メダル代りの裝飾が

施してあり、云はば金といふよりも品物である。アタリヤがさう云つて斷つたが、おとなしい福三郎はいつたん云ひ出したら承知しない。結局、澁々、鎖をはづしてそれを貸すと、福三郎は欣び勇んでアタリヤの店を出て、その晩は歸らなかつた。翌朝、といふより殆んど晝近くなつて戻つた福三郎は、アタリヤの訊ねるまま、前夜、あれから飛田の遊廓へ赴いて、牛太郎に金貨を示し、やうやく七圓五十錢の抵當としてそれを預けて一夜の快をむさぼつてきたといふ。その後、福三郎は自分の家に引揚げてから改めて飛田へ出かけて七圓五十錢を支拂ひ、無事その金貨をアタリヤに返却した證據には、すでに前に述べる通り、わたくしを新聞社に訪ねてきた際、アタリヤはチョッキの釦穴から赤銅の鎖を垂れ、先きにテカテカ光つた十圓金貨をぶらさげてゐたのである。で、そのとき、わたくしはアタリヤと喋りながら何となく金貨に眼を留め、以前、鄕里へ歸つた際に近所の噂で耳にしてゐたその福三郎の金貨事件を思ひ出して、その本人がこの男か、といふやうな可笑しさをこらへながら、いやに眞面目くさつて固くなり、終始シャチホコ張つて控へてゐた福三郎に只一度の初對面から淡い親しみの念を寄せた。

けれども、人物に好感を寄せたものの、福三郎の志望といふのがわたくしには難題であることに變りはない。だいいち、演藝界の飯を食ひたいといふ福三郎の志望自體が曖昧で、無口な福三

郎に代つたアタリヤの説明では、いつたい福三郎は役者になりたいのか、何になりたいのか、その點さへはつきりしない。

「で、要するに、俳優になるつもり？　それとも將來、脚本でも書く仕事か舞臺監督でもやりたいと云ふんですか」

かう、わたくしがアタリヤに訊き返すと、アタリヤ自身もろくにわからず、

「さア、そこんとこは、どないだすねん、今川はん？」と福三郎のはうに向き直つた。

「はッ」

だが、福三郎はわたくしに對して恐縮するといふよりも、寧ろさういふ柄にもない不遜な大望を抱いたことを恥ぢ入るやうに、いよいよ固くなつて何も云はない。

「どないだすねん？」とアタリヤが當人の心を汲んで口添へした。「――大事なこツちや。遠慮せんと云ひなはれ。詳しう云はな、わかれしめへんがな。あとで、しもた、と思たかて、もうあけしめへん。この際や。何でも思ふこと、詳しう云うて、お力添へ頼みなはれ……」

「はッ」と福三郎は一そう伏目になつて、「――別に、俳優でなければいかん、といふこともありまへんねん」

『さうすると……』と、わたくしが云はうとすると、アタリヤが、
『ホナ、何だツか。つまり、監督でもやりたいのだすか。それとも、道具方でもやりなはんのかいな？』と親切に疊みかけた。
『はツ。別に、道具方といふわけでもありまへんねん……』
『ホナ、監督か脚本家やな』
『あの、先生――』と、福三郎は意を決してわたくしの顏を仰いだ。「柄でもありまへんけど、新國劇なんがは、どないでッしやろ？　入れてもらへまッしやろか？」
わたくしは返事に窮した。といふより、この福三郎に好感を寄せながらも、その好感自體のなかに一種の侮蔑を混へずにはゐられなかつた。わたくしは新聞記者らしい決斷力で、早くも福三郎に見切りをつけた。福三郎には氣の毒だが、こんな男に、俳優にしろ何にしろ、個人の創意や工夫を土臺にした仕事は到底向くまいと考へたのだ。けれども、福三郎は眞劍で、わたくしがちよつと口を利けば、新國劇でも何處へでも簡單に入れてもらへるやうに考へてゐる。それは自分を買ひ被つてゐるのではなく、わたくしの地位を見當違ひに尊敬し、要するに新聞記者といふものを不當に高く買ひ被つてゐるわけだつた。うどん屋のアタリヤがさう思ふのは仕方ない。が、

自ら藝界入りを志す福三郎が、だから驅け出しの新聞記者をそのやうに考へてゐること自體、ただの世間知らずといふだけではなく、すでに弱肉强食の個人競爭の激烈なこの世界に投ずる資格がないだらう、とわたくしは心に一抹の憐憫をかんじながらも、痛く福三郎を輕蔑した。

二人はわたくしのもとを辭して、程なく日光へ赴いたが、アタリヤも福三郎も、日光から再び東京へ引返してくるまでに、自分が何處かの劇團へ入れてもらへるかも知れぬと考へてゐるらしかつた。わたくしはその日、福三郎から手土產として贈られた小田原の梅干を晩の食卓でしやぶりながら、家人を相手にこのやうなことを云つて笑つた。

「冗談じやアない。日光は愚か、二人で北海道をゆるゆる廻つてきても、そんな就職なぞ決まりやしないや……」

果して二人は、日光から東京へ歸つて、わたくしのそつけない挨拶に接すると、少からず失望した。といふより、寧ろ意外とした。そこで始めてわたくしの地位に對するやゝ正當な認識に近づいた。その證據には、アタリヤがわたくしの面前で、福三郎とぼそりぼそり何事か打ち合せた後、やがてちよつと分別臭い顏を向けて、

「ホナ、どないだッしやろ。わて等、明日東京を發たナあかんことになつてますけど、今やつた

ら今晩でも、先方のお人さんにお目にかからしてもろて、何ぞ氣の利いた歳暮でも屆けときまよか」と云つた。

大阪の或る種類の人間は、すべてプレゼントのことを歳暮といふ。歳暮はもちろん年の暮の贈物のことであるが、冬でも夏でも、人に物を贈ることを歳暮と稱して怪しまぬのは、アタリヤのみに限らない。だが、わたくしは婉曲に、その當らざることを說いて、二人を歸した。かうして空しく福三郎は大阪へ歸つて行つたが、藝界志望の一念はあつさり諦めたわけではなく、その後、わたくしに長文の手紙を寄越し、細字の美しい毛筆書きの履歷書を十通ばかり同封してきた。然し、もちろんその履歷書が、翌々年、新聞記者を止めるまでの二年餘りも、わたくしのデスクの抽出しに放り込んだままになつてゐたのはいふまでもない。

わたくしはそれから四年近く福三郎には會はなかつた。四年後には、わたくし自身はもう新聞記者を廢業して細々ながら所謂文筆の徒に成り變つてゐたのだけれど、福三郎もほゞその初志を立て貫いて、大阪でいつぱしの漫才師に成つてゐたのをわたくしはやゝ驚歎の思ひで知つた。わたくしはそのとき、格別の用もないのに漫然と鄕里の生家へ戻り、近所のアタリヤから福三郎のこ

とを聞いて、早速一しよに北の新地の花月へ出かけたことをよく覺えてゐる。

「――そら、今度だツせ。あの藝名が今川はんのことだすわ……」

云はれて、わたくしはアタリヤに微笑で應へ、ちやうどそのとき落語を終つた後の高座に福三郎の出てくる直前、ぱらりと舞臺の袖でめくられた出演者の名に瞳を留めた。わたくしは何となく吹き出して、

「あの、芦野鷹也といふのが今川君かね？」と呟くと、

「さうだす。えらいやさこしい藝名つけやはッたけれど、あの林家蝶々といふのは相手の女のことだすわ」とアタリヤが説明した。

喋つてゐると、ふいにモーニングを着た福三郎がぶらりと出てきて早や裾模様の蝶々と型通りの問答に入つて行つた。蝶々は福三郎とほゞ同年の二十五六の小肥りの女だつたが、束髪の頭の尖きからツーンと上へ抜けるやうな鋭い聲で、いきなり、こんなことを喋り出した。

「あんた、いつたい、何かいな。芦野鷹也といふやうな、豪ッさうな名前つけたはるけど、あれはどないな意味があるか知つてなはるか」

「知らんでどないする？」と福三郎が直ちに應じた。「あら何や。昔の有名な歌から採つた名前

で、夕されば小どたのいな葉おとづれてあしのまろやに秋風ぞ吹く、といふ歌からちよつと拝借しましたんや」

「あゝさよか。ホナ、その、あしのまろやて、何のことだすねん？」

「あしのまろやと云うたらナ、云うたろか……つまり、バラックとかカマボコ小屋とかいふやうな、えらいみすぼらしい乞食小屋みたいなもんがおまツしやろな。つまり、早よ云うたらお宅みたいな家や……」

「こら何ぬかす？」

「うわツ、濟ンまへん。——然し、要するにさういふ小屋みたいな家のことで、わてのやうな二十萬か三十萬の財産家の息子に生れた者でも、漫才師になつたお蔭で、そんな貧相な家に入つとるといふ意味や……」

見物は笑つたけれど、わたくしとアタリヤとは顔を見合せ、秘かに二人だけに通ずるほろ苦い微笑を交はした。福三郎と螺々とは、かうして自分の藝名の説明から段々ふざけたやりとりに入つて行つたが、わたくしは周圍に度々湧きあがる氣樂な笑聲には同じ切れず、じつさい本人が云つたやうな素封家のよろづ屋から、こんな素寒貧な境涯へ飛び出した福三郎のことを考へてゐた。

福三郎は、大阪の道楽息子にはよくある型で、お人好しだが、根は至つて氣の弱い純情家で、その純情といふことが性格的に無類の意志薄弱といふ點を土臺にしてゐる。けれども、たゞ一つ面白いのは、その意志薄弱といふものが案外にも自己の環境から威勢よく飛び出す作用を成すらしく、押へても捉へても自分を縛らうとする枠をはみ出て、結局、ふはふはしながらも氣分に乘つて、その氣分自體に卽した生涯といふものを粘り强く立て貫く。わたくしはそのやうな一種の型を福三郎の上に設定し、改めてアタリヤや生家の者の語るところの或る漠然とした人物評を、かつて福三郎自身が寄越したわたくしへの長文の手紙と引き合せて、考へ込んだ。福三郎のその手紙は、云はば彼が藝界へ投じたい氣持の一端を述べたもので、わたくしのおぼろげな記憶によれば、何でも彼はよろづ屋の母の連れ子で、子のない今川の二度目の細君としてよろづ屋に入つた母が、その後次々に子供を生んで五人兄妹になつたけれども、福三郎は最年長ゆゑ、大きくなるまで自分を長男だと思ひ込んで育つてきた。ところが長男は二番目の弟だと判つた途端に福三郎はぐれ出して、早くも跡目だの家書だのいふ小うるさい環境にいやな氣が射して、さういふものから一應自由に解放される、といふより、寧ろそんな世界に一種の白眼を剝いて暮せる所謂腕一本の藝界入りをあこがれるに至つた、といふのであつた。つまり、當時、わたくしが新聞社の應

接室で、福三郎の志望をすこぶる曖昧だと感じたのは道理であつて、云つてみれば、福三郎の目的は當の藝界入りにあつたものやら、それとも格式を重んじて、その格式で福三郎の面目を失はせた古い家庭にあと脚で砂をぶツかけるのが目的であつたのか、いまに至るもその邊はあやふやである。然し、とにかく福三郎は藝人になり終せた。新國劇で立ち廻りをやるには至らぬけれども、花月へ出られる漫才師になつてしまつた。すると、結局、福三郎のギリギリの魂といふものは、眼前の藝界そのものに在るものか、それとも彼のあと脚のうしろに於いて砂を引ツかぶつた自己の家庭に在るものか、そのピントが主にどつちに多く向けられてゐるかといふ點がやはりずつと曖昧である。といふのは、福三郎の手紙のなかには、自分が思ひ切つて藝界へ投ずることは、好きな道には違ひないが本心は家庭への叛逆で、意地と復讐に燃えた結果だと述べてゐたし、又現に、その手紙から四年後の花月へわたくしが出かけた晩、出演を終つたあとで、わたくしとアタリヤとが福三郎を引ツぱり出して曾根崎の東洋亭で洋食を食ひながらビールを飲んで喋つた際相變らず福三郎はこのやうなことをわたくしに打ち明けたのだ。

「――そら先生、うちに對する復讐ですわ。僕、そら大人げないこツちやと思ひますけど、どうせ人間のすることはみな大人げないねんさかい、えゝくそ、やッたれ思て、漫才師の弟子になつ

てこましたツてん。ほんま云うたら、もつともつと卑しい商賣してこまそ、と考へたツたこともおましたけれど、まア漫才師になつてこましただけでも、うちの奴等には、たんと藥が利いてますわ……」

その晩遲く、東洋亭を出て梅田新道の大通りへ出たわたくしたちの前方へ、どういふわけか酒氣を帶びたらしい林家蝶々が佇んでゐて、ふと福三郎の姿を見ると、

「あんた。どないだすねん？　今夜は本宅だツか、それともうちへおいなはるのか」といふやうなことを薄暗いプラタナスの葉影で訊いた。

「えゝわ、行つたるがな」

かう福三郎は呟いた後、ふいにわたくしとアタリヤを振り向いて、

「ホナ、僕、ここで失禮さしてもらひますわ……」

福三郎に別れた後、わたくしはアタリヤと人影のまばらになつた鋪道の薄暗がりを歩きながら暫く默つて阪急前のはうへ歩いてゐたが、踏みしめる靴の先きに、いやにカサカサした乾いたやうな部厚いやうなプラタナスの枯葉の絡んだ記憶から、わたくしはそれをその年の秋の終りか暮、近くだつたやうに覺えてゐる。

「ところで、先刻の蝶々のことですがね」と、わたくしは歩きながらアタリヤに言葉をかけた、「あれは今川君の細君になつてますのか？」

「違ひますがな。あんさん、いま先刻、蝶々の云うてたこと、聞いてなはれしめへんなんだん？」

「ふむ」

「本宅へ歸るのんか、それとも、わがとこへ來てくれるか、――こない云うてゐましたやおまへんか……」

「すると、つまり、今川君の二號か」

「さうだすとも。――何でも、わての聞いた話やけど、本妻は西成區の玉出にちやんと居やはるけれど、蝶々は福島の淨正橋に圍たアるといふことや……」

「本妻も漫才やつてるの？」

「いえ、こらインテリだすわ。素人のインテリだツせ。何でも學問のよう出來た人やさうで、羽衣女學校出たはりますわ」

「はゝア、すると同志社時代に一しよになつた女かな。――さうぢやアない？」

「さア、そこまで、わても知りまへんがな……」

わたくしはアタリヤの話から、そのとき突然、東洋亭で喋つてゐた福三郎の、あの意地とか復讐とかいふ言葉を漠然と思ひ出した。つまり、意地とか復讐とか云ひながらも、福三郎は實はそのやうな否定者としての窮屈な立場にはなく、案外、眼前の欲するところを次々に氣分に應じて樂しんで肯定してゆく一種安易な樂天家ではないかと考へ直した。わたくしにはわからなかつたけれども、假りに福三郎が眞に樂天家であつたとすれば、理窟は何とでも唱へながらも、自身、段々、身の皮を剝ぐことによつてのみ達するところの、裸の樂天家であらうかと思つたりした。

福三郎を大阪の花月で見たのを最後にして、わたくしは又數年間、芦野麿也といふ名さへ忘れ果てて過してゐた。といふのは、その翌年あたりから太平洋戰爭に入つて、誰しも他人の些事にまで心を勞する餘裕なぞ無くなつたからである。いま考へると、福三郎の芦野麿也も滿洲だの中國だのと所謂戰地の慰問稼ぎに忙しい日を送つたらしいが、終戰翌年の去年の春、突如、東京へ現はれてわたくしを驚かせた。

「先生。——又、われわれの時代が參りましたわ……」

戰爭中にも、多分、稼げるだけ稼いだ福三郎は、尤もらしくそのやうな口上を述べ、その日一しよに伴つてきた蝶々を、「これ、實は家内だす」と照れもせずわたくしに紹介した。

福三郎の目的は東京進出にあつたらしく、又、わざわざ世田ヶ谷の片隅までわたくしを訪ねてきたのは只の義理や挨拶ではない。つまり、十年前と同じ意味で、再びわたくしを買ひ被つて、何とかわたくしの口添へで放送局に賣り込んでもらへぬか、といふにあつた。ちやうどその頃、わたくし自身、放送局から頼まれて他愛もない文藝雜談めいたものを前後三回、マイクの前で喋つたからだ。福三郎はその放送を大阪で聞き、かねての東京進出の足場にしようと考へて、蝶々を連れて上京してきたわけであつた。

わたくしは又、十年前と同じ當惑さで、福三郎の依頼を蹴つた。

福三郎は大阪へ戻つて行つたが、九月に入つて又東京へやつてきて、今度は淺草へ出演するといふ挨拶にやつてきた。わたくしは淺草へ行かなかつた。然し、自宅や銀座では何度も逢ひ、時には飲んで終電に乘り遲れ、福三郎の假り住まひだといふ澁谷のバラック住宅に泊つたことが一度ある。福三郎の話によると、宿屋住まひも莫迦々々しく不自由なので、思ひ切つてそのバラックを三萬五千圓で買つたといふが、それは燒け跡のヤミ市めいた一角にぽつんと建つた納屋か物置

同然の粗末な家で、いざ用便といふ際には、下駄を突ッかけて土間に降り、二十メートルも離れたヤミ市の片隅にある數軒共同の便所まで行かねばならない。けれども、わたくしはそんなことより、實は福三郎のそのバラックで、蝶々ではない別な女に紹介されて、二度びつくりした。

福三郎は彼女のことを、「――これ、林家サンカヲ云うて、いま、淺草で組んでまんねん」と挨拶したが、そのサンカクはわたくしを遇するに殆んど十年の舊知のやうな愛想で、文筆生活の内幕を訊き質したり、紅葉や浪六などの小説の評判を喋つたりした。その晩のことではないが、あとで福三郎の打ち明けたところによると、福三郎は玉出の本妻と別れてしまひ、戰爭中はずつと蝶々と暮してゐたが、終戰後、東京へ進出してから急にサンカクと組むことになり、仕事の上で度々交渉を重ねるうちに自然とねんごろになつたといふのだ。

福三郎は聊か照れながら云ふのであつた。

「あのバラックも、實云ふと、サンカクが月賦で買ふつもりで前からちやんと入つとりましたのや。それで、僕も、どうせあすこで一しよに暮すのやッたらと考へて、思ひ切つて三萬五千圓で買ひ取りましてん。――然し、いまになつて、その金のことよりも、ちよいとした事情で、僕、しもた、と思うとりますわ……」

「どうして？」

「いや、その事情お話したら、僕とサンカクの入り組んだ仲までいはんならんことになりますけれど、ホナ、いつそ先生、聞いとくなはるなら、お話しましよか？」

わたくしが頷くと、福三郎は言葉を續けて、

「あのサンカクといふ女だすナ、あら先生、主人持ちで、その主人も漫才師やけど、この名前だけ勘忍しとくなはれや……」

かう云つて喋り出した福三郎の話によると、サンカクの亭主の某は、漫才師として戰爭中にビルマへ赴き、兵隊慰問で歩き廻つてゐるうちに終戰になつてしまつた。而も、終戰滿一ケ年經つても歸つて來ない。死んだ噂もないけれど、生きて何處に廻されてゐるといふやうな消息も一切ない。そこで生活に困りだしたサンカクが昔取つた杵柄といふもので、再び厚化粧におどけた顏で舞臺へ立つ身になつたのが、折柄、福三郎の上京前後の淺草である。福三郎はサンカクの身の上を哀れに思つた。けれど今度の敗戰このかた哀れな身の上は何もサンカク一人とは限らない。つまり、福三郎のやうな安直な樂天家は、同情といふやうな通路を經なければ思ひ切つた戀が出來ない。戀にはさまざまな通路があつて、時には慈善や憐憫や虛榮心がそこに至る通路となるの

と同様に、福三郎もサンカクを哀れと思ふ心がその戀の通路となつた。福三郎はサンカクと一しよになつた。ところが、始めはうつつを抜かしてゐたサンカクも、いざ同棲といふ土壇場になると、さすが戰地の主人を思ひ出して躊躇しだした。サンカクは向島で燒け出されたが、亭主の衣類一切は手廻しよく疎開してあつたので全部助かり、一時は澁谷の例のバラック住まひにちやんと整理して保存してゐた。

福三郎が訪ねていくと、サンカクはよく絽の夏羽織や薄い上布の夏物などを、バラックの軒の下にぶらさげて、たまには風を通さねばと云ひ云ひしたが、その物腰には、近く必らず亭主を迎へるといふやうな心意氣が淋しいながらも滲み出てゐる。これが福三郎には苦の種である。

「阿呆奥い。――お前、まだ主人が無事に戻つてくると信じてんのか」と福三郎がいやな眼をして彼女を見ると、

「冗談ぢやアない。誰が今更、ビルマから還つてくると思つてるものですか。夙ツくに鴉のエサになつちやつてるわよ」と皮肉ではなく、自身、つんと心に突き通るやうに眞劍な口調で答へる。

「ホナ、何や。何でそんなもの、大事さうに乾してるのや？」

「物は大切にしなくちやア……」

「阿呆云へ。どうせ要らんもんや。ヤミ屋へ行つて、賣つてまへや」

然し、サンカクは賣りもせず、相變らず大切に陽に乾かしたり風を入れたりして、きちんきちんと丹念に手數をかけて保存してゐた。一方、福三郎に對する身の入れ方は盲目的で、その狀態は早や生涯を誓つたやうな、云はば女心の一切を曝けたやうな惚れ込み方だ。福三郎がサンカクを摑まへて接吻すると、サンカクは身悶えして、「――あんた。ほんとに捨てちやアいやよ。ねえ、捨てないで。……ほんとにあたしのこと永久に忘れないで！」と、何十度となく同じことを繰り返して、ヒシと福三郎にしがみついて、動物みたいな美しい眼を光らせてゐる。芝居ではない。その實意には一點の邪心もないが、そんなサンカクが亭主の衣類のことになると、打つて變つて怖いものに觸れるやうな態度を示した。それも、いやがる福三郎に我を張つて、敢てさうするといふのではなく、たとへば嘗て亭主の用ひたその衣類が、衣類自體で備へてゐる一種の幻に思はず取り憑かれてゐるやうな無心さだから始末に困つた。それがおそらく福三郎との同棲を阻むらしい。

そこで、福三郎は一計を案じ出して、俄かにサンカクの月賦住宅を思ひ切つて買ひ取らうと考

へた。それには三萬五千圓もかかる。然し、福三郎にはそれだけの貯へがなく、先づ出せるだけ出さうと云つて二萬圓の金を出した。つまり、殘金はサンカクが衣類を賣つて調へるがよいといふことになつたけれど、以來、彼女は一月餘りも考へた末、遂に亭主の衣類一切を賣りに出て、そのバラックを買ひ取つたわけである。――福三郎はそこまで喋つて、淋しさうにウフッと苦笑し、それから聊か忌々しさうな口調で云つた。

「そいで、やうやく僕の同棲を承知しよりましたが、家の名義はサンカクのものになつてますのや。そやけど、近頃、世間の噂で聞きますと、まだ南方からひよつこり戻つてくる人がゐるさうやおまへんか」

「さうかしら？」

「もし、そんなことになつたら、それこそ僕は丸いかれや。あの仕樣もないあばら屋からも追ひ出されてしまひますわ。それこそ、その日から宿なしのルンペンや……」

「大阪の蝶々さんの家はないの？」

「まさか蝶々とこへ行けまへんわ」

「玉出の奥さんとこは？」

「まさか玉出へも行けまへんわ」

かう呟いてから福三郎は、ふと話題を轉ずるやうに、「然し、人間て、色々むづかしい御託ならべてゐよるけど、考へると淺墓な、心細いものですなア」と或る詠嘆の響きをこめた。

「いまの、サンカクさんのことで？」

「いえ、蝶々でも、玉出でも、――いえいえ、うちのよろづ屋の親父や弟たちも、又、われわれ全部がさうだッせ……」

「然し――」

「いえ、先生。人さんのことは知りまへんけど、僕の經驗がさうですわ。――玉出の女房も戰爭中に別れましたが、初めは意地やの未練やのと、えらい執念深いこと云うて死んでも別れられんと云うて、頑張つてゐよつたけれど、終戰の年の大空襲で、うちのよろづ屋も燒けてしもて素寒貧になつてしもたら、急に僕を見放してしまひよりましたわ」

「然しまさかよろづ屋の財産に野心を持つてた譯ぢやないでせう？」

「そら、さうだす。けど、僕もよろづ屋の本家が燒けてしまひよつて、急に、玉出と別れても辛うないといふ確信がつきましたんや。――事實上、別れて何年もしてから、そんなこと考へるのも

妙な話でおますけど……」

福三郎は脫線して、段々そんなお喋りに入つて行つたが、最後に、こんなことを云つた。

「玉出はあれで、いつぱしインテリ女だすけど、あいつを嫁にしとつたのは、いま考へると、ぐれた僕が、よろづ屋に對する最後の小さな對抗的な氣持だすなア。で、そのよろづ屋の家が滅んだら、こち僕には不純な存在になりますわ」

「それで蝶々さんを用意しておいたんですか」と、わたくしが混ぜッ返すと、福三郎はそれには答へず、

「あの蝶々も、えゝ加減な奴や。あいつと僕は福島で一しよに暮してゐましたけれど、罹災して僕たちがまる裸の素寒貧になりよると、家が見つかるまで仕樣がおまへん云うて、さつさと僕を袖にして奈良の實家に戻つとります。實家はうそで、僕はどうやら臭いと睨んでゐますけど、僕、去る者は追ひまへんわ……」

追はぬゝ道理で、その福三郎には、いま澁谷のバラックに、サンカクという情熱的な女がちやんと居ればこそだ。尤も、そのサンカクの亭主といふのが、もし福三郎の氣遣ふやうに偶然南方から生き永らへて還つてきたら、果して福三郎はどうするだらう。だが、わたくしにはその種の

懇戯場を想像する興味もなく能力もない。ただ、福三郎が、例のチャチなバラックを飛び出して、時節柄、身の置きどころにも困ることだけはわかつてゐる。——

「ホナ、先生。ぼつぼつ、みこし揚げまよか……」

實はわたくしが以上の打ち明け話を福三郎から聞かされたのは、新橋のヤミ市の一隅にあるやはりチャチなバラックの飲み屋である。時間は十一時に近かつたが、金を拂つて、ふと一ト足さきに表へ出た福三郎は、

「えゝ月や。——秋だすなア……」

かう云ひながら夜空を仰ぎ、ふと低く聲を落して、「エヘヘ、あしのまろやに秋風ぞ吹く、か」と微かに呟いたやうに思つた。然し、それはわたくしの氣のせゐであつたかもわからない。

三文ホテル

その家は、階下四室、二階三室の中流どころの住宅である。家の内外、要所々々に手が加へられ、表ての人造石の門柱に、「彌生ホテル」といふ看板のぶらさがつたのは、何でも十一月も末に近い或るうすら寒い曇天の朝であつた。

場所は、世田ヶ谷もずつと奥の、小田急電車の沿線だつた。町は、空襲で焼け殘りこそしたけれど、殆んど商家など一軒もない住宅街で、よくもこんな邊僻なところに宿屋稼業など始めたものだと近所の者もやゝ奇異な眼で、眺めて通つた。審かるのも道理であつて、この「彌生ホテル」の看板をぶらさげた當の經營者自身に於ても、じつは大變な危惧の念で、果して人が泊りにきてくれるかしら、と心細いことを考へてゐるのであつた。

けれど、案ずるより生むが易しといふことがある。夜の十一時頃になつて、最初のベルがヂリリと臺所の柱で鳴り響いた。「それッ」といふので、おかみの初枝が胸をどきつかせて玄關に出

てみると、客は一眼でそれと知れる所謂連れ込みの男女である。

「部屋ある？」

四十二三の、どこか職人あがりらしい優さ男が、女を傍に庇ふやうにして突ッ立つてゐた。女は、男のスプリング・コートに隠れて、ろくに顔もあげてみない。ただ俯向いて、銘仙の袷せの裾で、くねくねと自分のフェルト草履を動かしながら、小さな玄關の土くれを弄んでゐる。服裝も上等とは云ひ難いが、だいいち手にしたハンドバッグが恐ろしくお粗末だつた。

おかみの初枝は滿面に愛想笑ひを泛べながら、早速、上り框に羅紗のスリッパを二足揃へて、

「さア、どうぞ……」

あとは笑顔と一種獨得の身のこなしで、さも嬉しくてならぬやうな應對ぶりだ。

「あがらうや」

男が云つて、敷石にとんと上り、右と左の足首を動かせて、器用にチョコレート色の短靴を脱いでしまふと、女は更に照れに照れて、ふと先きに上り込んだ相手の腰に額をぶつ付けさうな恰好で上つてきた。

「さア、どうぞ。こちらへいらして下さいませ」

更紗のカーテンをぶらさげた狹い廊下で、チラと初枝が女のはうを眞正面から眺めると、その物腰から想像したとは打つて變り、もう三十を少し出たのではないかしらと思へるくらゐの、地味で、老け込んだ顏色のよくない女であつた。

二階の六疊へ通してから、あとで初枝が番茶を持つて上つていくと、男は床柱に靠れかかつて、ぼんやり煙草を吹かしてゐたが、女はちやぶ臺の下に足を投げ出し、初枝がお茶を差し出しても、べつにそれを引ッ込めようともしない。初枝も、お客と名が付く以上、何も足など引いて貰はうとは思つてゐないが、玄關での印象が殘つてゐるので、ちよつと變てこな氣分になつた。

茶を出してから、初枝が改めてお辭儀をして、それから云つた。

「あの、お上り物は何か……？」

「さうだなア」

男は微かに笑ひを含んで、

「どうする？　ビールでも一本貰ふか」

「飲みなさいよう」

と、女が應へた。太い聲だ。床柱やちやぶ臺の前で聽く聲音ではない。そこには、どこか風の

吹き通す野良で響くやうな調子があつた。
「ぢやア飲まう。ビール一本、――それから何か摘み物をちやうだい……」
「畏まりました」
初枝は神妙に頭を下げて、それからお盆を膝の上でくるくる廻しながら、二人がこのホテルをどこで知つたかと訊ねると、男は薄笑ひを混へながら、小田急の停留所でペンキ塗りの廣告を見た、と答へた。初枝は滿足して引き退つた。
ビールがすんで、同じ部屋に寢床を敷いて下つてくると、初枝はやうやく開業第一日を終つたことを沁々と考へながら門扉と玄關を閉めに行つた。茶の間に戻ると、亭主の常四郎が瀬戸火鉢に靠れかかつて道樂の川柳を作つてゐたが、初枝の顏をちよつと仰いで、
「よかつたなア」
と、微かに云つた。
「何がさ？」
癖で、初枝は、この常四郎が何か云ふと、一度はどうしても反對を立てたくなるのであつた。
常四郎は五十一だが、見たところ六十くらゐの老け込み方で、若いときから金儲けがからきし駄

目な性分で、およそ他人と渡り合ふことが苦手である。初枝は、そんな常四郎を馬鹿にし切つてゐるものだから、つい何を喋り合つても直ちに反對したい衝動に驅られるのだ。常四郎は卑屈な眼をした。

「何がと云つても、お客があつて、よかつたぢやないかよウ？」

「冗談ぢやアないわ。これだけのお金掛けて、ちやんとホテルの看板まで上げてるんだから、客がなくちやアたまらないわよ」

「それはさうだな」

「でも、よかつたわ。あたし、今日は、まごまごしてると全然お茶挽きかと思つてゐたから……」

初枝は常四郎の前に坐つて、亭主が丹念に書き込んでゐる川柳のメモを馬鹿々々しさうに眺め捨てて、いかにも草臥れたといふ風に、崩れた姿勢で卷煙草を口に挿んだ。常四郎より十も若くて、まだやつと初枝は四十そこそこだつたし、日頃努めて若造りしてゐるので、さういふ女給らしい物腰は可笑しくないが、しかし常四郎の家内としては似つかはしくない。煙草のけむりを、ぷうーツと眞正面から常四郎に吐き付けるやうにして、

「おばあちやん、どうしたの？」

「おばあちやんは、夙うに寢たよ。だつて、もう一時だからね」
云つて、柱時計を仰ぐ常四郎の、不精たらしい猫のやうな背に瞳を注いで、初枝は急にいらいらした聲を出した。
「もう寢たと云つたつて、今日は大切な日ですからね。開業の日なんですよ。女中も使はず、一切合財、あたしが一人で切り廻して行かうといふんだから、今夜くらゐは起きてゐてくれたつていいぢやアないの……」
「齢だからね」
常四郎は七十になる實母のトキを大ツぴらに庇ふのではない。寧ろ初枝に同調して、非難してゐるやうにも取れる。いや、それよりも言葉を補ふ態度ぜんたいが無氣力で、なるべく初枝の抵抗を招くまいとしてゐる。常四郎は打ち切りたいのだ。この危險な女房のヒステリー圏内を瞬時も早く脱したくて内心ハラハラするのであつた。
ところで、ちやうどいい鹽梅に、そのとき突然、梯子段がぎしぎし軋んで、客の降りてくる氣配がした。多分、厠に立つのであらうと思つてゐると、いつたん降りた跫音が止まつたきりで、べつにバタンと便所の戸が音を立てない。のみならず、廊下の襖に何となく人の着衣がさやさや

と觸れるやうな感じである。聽き耳を立ててゐると、「あのウ……」と四邊を憚るやうに、宿の誰かを探し求める樣子だつた。

「お客さんだぜ」

「決まつてるわよ……」

聲を殺して聞き耳を立ててゐるところへ、更に男の低い聲で、

「――あのウ、ちよつと……」と確かに、こちらの出ていくことを望んでゐると分つた。

初枝は默つて起ちあがり、早や薄暗い廊下へ顏を出す前から涼しさうに瞳を細めて、たつぷり愛嬌を湛へてゐた。階段の下をそつと覗くと、どうしたものか男の客がきちんと來た際と同じ洋服を着込んだうへ、片手にスプリングさへ抱へ込んで立つてゐた。

「あら、お歸りでございますか」

「うん。都合で、ちよつと私だけ歸るけど、連れのはうは泊めて貰ふことにします……」

男は片手を胸のポケットに突ッ込むこなしで、いやに卑屈な眼のいろをした。そして、

「取りあへず、お勘定だけしとくけど、みんなでおいくら？」

と、囁いた。

「有難うございます」

突嗟に初枝が胸算用で數字を擧げると、客は革の大きな札入れを摘み出して、眼の前で、しゆーッと百圓紙幣を拔いて出した。

「ぢやア、これ。――遲いけど、私だけ歸りますから、あとはよろしく賴みます。私は、電車なくても、どうにか歩いて歸れるところだから、歸ります。都合で、明日またお邪魔するかも知れませんけど、とにかく、よろしく賴みますよ……」

男は、何度も念を押して、どちらがお客だか分らぬやうな鄭重さで頭を下げつつ、玄關で靴を穿くと、こつそり表ての闇のなかに姿を消した。

初枝はいつたん開いたペンキ塗りの門扉を閉めて、ヒヤリと身に沁む夜の外氣に身を縮めながら玄關へ入らうとして、ふと踏み石の上から二階の窓ガラスをそつと仰いだ。先刻の客を通した部屋だが、殘つた女がまだ起きてゐるらしく、窓ガラスには、ぼんやり電燈の灯が映じてゐる。いや、よゞ見ると白い擦りガラスの表面には客に出した白地の寢卷がぼんやり觸れて、もさもさ小刻みにうごいてゐるやうな氣配である。一瞬、皮膚の表てをこするやうな興味を感じて、初枝がぢいッと二階を仰いでゐると、そのとき突如、門の外の暗い路上で、男の聲が低く聽えた。

「おい、もう寢ろよ……」

初枝がハッと思ふ前に、二階のガラス戸がガチャンと音して、すうッと女の姿が消えた。おそらく女は自分のもとから暗闇の町の彼方へ、そゝくさと立ち去つていく相手の姿をそこから見送つてゐたにちがひないのだ。微かな情緒が初枝の胸の底に湧いた。初枝は何となく滿足しながら、宿屋商賣も氣分的に惡くないな、と考へ込んだ。彼女は急いで玄關に入つて、柱のスイッチを輕く引いた。玄關が暗くなる。かうして、やうやく彌生ホテルの開業第一夜は終つたのである。

2

彌生ホテルは、他人を混へぬズブの素人の經營ながら、ほゞ順調な繁昌を示しつつ、日を過した。お客はやはり連れ込みが大半で、さして上客とはいへないけれど、澁谷や新宿邊で飲んだ男女が終電間近の電車に乘つて飄然と泊りにきた。新宿のパンパンガールも何度かきた。他には、富山の藥賣りが宿賃を本人から決めてかかつて、玄關脇の二疊の板の間へ泊り込むことが度々あつた。他に變つた客といへば巡査や小田急の驛員などが、得態の知れない女を連れて、所謂御休

息といふ遊び方で、宵の八時頃やつてきて十一時頃にふらりと歸つて行つたりした。かういふお客は飲まず食はずで寢るだけだから、手取り二百圓しかならないので、あまり有難い部類でなかつた。總じてフリの客が多いが、お馴染さんも少しづつ出來て行つた。

ところで、彌生ホテルにとつて淺からぬ因緣を生じたのは、例の開業第一夜にきた職人風の連れ込みである。男は、ただの職人ではなく、實は自ら人を使つて世田ヶ谷の太子堂で木工會社を經營する人間だつた。醉ふと大型の革の札入をひつぱり出して、やたらに他人へ名刺を振り撒く癖があつたが、その名刺には、日之出木工會社社長、と肩書が入つてゐた。社長は聊か大げさであるとしても、じつさい十數人の男女を雇ふ小工場であることは間違ひではなく、その後、彌生ホテルへやつてきての飲みツぷりから考へても、かなりの收入を擧げつつあることが明らかだつた。男の名前は入澤である。この入澤には妻子があつて、戰時中に栃木へ疎開させてあつたが、終戰後も住宅の關係で妻子は呼ばず、自分もずつと不自由な工場へ泊り込んで、只管金儲けに勵んだお蔭で、近頃仕事も相當な發展を見せてきた。金廻りもよく、氣分にいくらか緩みも生じて、手もとで使ふ女工の折部ミサと酒の上で關係が生じてしまつた。二度三度と、近所の宿屋へ泊りに行つたが、その何度かの逢瀨に選んだのが彌生ホテルといふことになつたのである。

もつとも、單にこれだけならば、彌生ホテルと特殊な因緣を生じるわけもなかつたけれど、その夜、彌生ホテルの二階の部屋でミサと一しよに横になつての睦言に、ミサが突然、もう自分は、ただの女工としてあの木工場に働いてゐるのはいやだ。どこかに、ちやんと部屋でも探して樂をさせて欲しい、と搔き口說いたのである。ミサもいやだつたに違ひないが、實のところ入澤も、それそろ同じ雇ひ人の口の端にのぼることを憚つてゐた。とはいへ、お互に獨立の住居もなく、工場の一部に住込み同然の生活を送つてゐるこの雇主と雇人とは、公然と木工場で同棲生活は樂しめない。だいいち、それは栃木の妻子に筒抜けになる怖れがある。そこで、入澤はミサのために、どこか適當な貸間でも探さうといふことになり、その貸間が見付かるまで、彌生ホテルにゐるがよからう、といふことに話が決まつた。

それからミサは、毎日ずつと彌生ホテルの二階六疊の松の間に住み付くことになつた。ミサは、べつに横着な女ではないけれど、永い間の貧乏生活に飽き飽きして、急に生活といふものを動物的に樂しまうといふ氣構へを示しだした。朝は十時頃まで寢込んでゐるし、朝晝兼帶の据膳を食べてしまふと、錢湯に行き、かつてはあれほど憧れてゐて手も出せなかつた高價な色々な化粧品を弄ぶこと自體を樂しんだうへ、それからやうやく目下の自分に最も必要の迫つてゐる貸間

探しにいくのだけれど、どういふものか根氣に乏しく、ほんの申譯に周旋屋や建物會社を二軒三軒と歩いたばかりで、あとはずるずると新宿や澁谷などで映畫を見たり買物をしたりして、暗くなつてから宿屋へ戻つた。

ミサが入澤に連れられて、始めて彌生ホテルへやつてきたのは十一月の下旬だつたが、かうして十二月の半ばを越しても、これはと思ふやうな貸間は見付からなかつた。もつとも、ミサの怠慢ばかりではなく、部屋そのものも、じつさいには無いのである。もちろん入澤が付いてゐるので、一萬圓や二萬圓の權利金は出す氣でゐるが、出しても、有りさうでゐて、いざ探して歩くとなると、色々條件に缺けてゐたり、先方から斷られたり、或は現に空いてゐる筈の周旋屋の廣告が、行つてわが眼で確かめると、今月いつぱいには必らず空けるが、それまで暫く手金だけ打つといて貰ひたい、といふやうな危かしい口が多いのだつた。ミサは氣乘りのしないまま、それでも四軒五軒と違つた周旋屋を訪ねてみたが、どういふものか、同じ一つの貸間の口が方々の周旋屋の取扱ひになつてゐるので、みすみす無駄足を踏むことが多かつた。そこでミサは目新しい周旋屋で、新しい廣告の貼札をチラと眺めて、あゝこれは、前に見てきた下高井戸のあの家だわ、と直ちに見當が付くくらゐまでになつてきてゐた。

入澤は三日に一度、時には晝間も自轉車を飛ばして彌生ホテルへやつてきて、部屋に通ると坐りもせずに先づ口をひらくのは貸間のことにきまつてゐた。

「どうだい。あつたか？」

「ええ……」

ミサの重い、緩漫な應じ方で、早やその首尾がありあり解ると、入澤はがつかりして、さもやりきれないといふ風な投げやりな物腰で坐り込んだ。

「困るぢやアないか。もつと、馬力掛けて歩いて見なくちやア……」

「歩いてるけど、だめなのよウ」

「だめといつたつて、當つて歩くより仕様がないよ。他人のことぢやアない。自分の住む部屋なんだぜ。而も、ただで置いてくれる所を探せと云つてるんぢやない。金は出すといつてるんだから」

「お金出しても、無いときは無いんですよ。これで、あたし、相當歩き廻つてゐるんだもの」

「有りさうなものだな。とにかく年内に何とかして移るやうに運んで見ろよ。じつさい、こんな宿屋にゐて、三度々々、据膳食つてると人間がだめになるぜ。何も、おれは金の掛ることをとや

かく云ふんぢやアないけれどな……」

さうは見事に云つてみせるが、內心、入澤のいらいらしてゐる原因は、やはりこの宿へ支拂つてゐる馬鹿々々しい出費である。入澤は五日に一度の割で、彌生ホテルの勘定書に眼を通して、四千圓から五千圓くらゐの金を、おかみの初枝に手渡さねばならなかつた。部屋代は一日二百圓にして貰つたが、いざ長期滯在の形になつてみれば、何から何までヤミづくめの食事代の高價なことは當然のことだとしても、他に寢具料、浴衣代、電燈料、薪炭費、入浴料といふものが一々付け出されてくるのである。その上、ミサにも小遣錢は要るし、煙草は宿の買ひ置きの高價な奴をぷかぷか吹かすし、又、入澤自身にしても、泊り込む日は義理にもビールの一本も飲まねばならない。而も、ビールを註文すれば、欲しくもないのに、必らず刺身か酢の物を見つくろつて出されるのである。その料理が馬鹿に高い。さういふわけで、五日に一度の宿屋への支拂ひに、およそ四五千圓の金がわけもなく消えて無くなるのがきまりであつた。

入澤は勘定書をちやぶ臺の上にひろげて、時折、忌々しげな眼のいろをして見せた。そして必らず口にするのが、かういふ言葉だ。

「おれは金を惜しむんぢやアない。けれど馬鹿げた使ひ方は、氣分的にいやだからな。だつて、

おれは彌生ホテルを儲けさすために木工場をやつてるんぢやアないさ。そりや、おれも、ミサのために茶ダンス買つたり、鏡臺でも買ふんだつたら、倍の金が掛つても、もつと氣持が愉快だからな……」

3

年が明けた。ミサは依然として松の間に頑張つてゐて、まだ部屋は見付からぬままでおつた。正月の二日になると、入澤は小ざつぱりした背廣を着込んで、一杯機嫌で彌生ホテルにやつてきた。二階の松の間へ通る前に、おかみの初枝が茶の間に呼び込み、お祝ひとして銚子を一本つけて出した。入澤は飲み終つて二階へあがる直前、ビール二本を註文してから急にそはそはと内ポケットに手を突ッ込んで、氣前よく千圓の札束を摘み出した。

「奥さん。これ、わたしのお年玉。……何か買つておくんなさいよ」

「何です、これは？」

初枝はちよつと驚いて、眼を圓くした。しかし自然に手は出るので、押し返しもせず受け取つてから、

「まアまア、入澤さん。そんなにして戴いたら困りますわ」
「ナニ、いいさ。あれがお世話になつてるんだもの」
「冗談ですわ、入澤さん。お世話するのは商賣ですもの。ほんとに、こんなことして戴いて悪いですわ」
「いいさ。大したことないんだもの……」
表面、麿揚にうなづいてゐるけれど、入澤は胸のうちで馬鹿けたことをしてしまつたと後悔してゐた。おれはどこまでお人好しだらう。ほんとに、ミサを世話するのはこの家の商賣で、まして相當高い代金を支拂つてゐるのだから、と入澤は考へ込んだ。不愉快でたまらなかつた。正月早々、又何となくおかみの口先三寸で、見事操られてしまつたやうに入澤は考へてゐるのだつた。
翌朝、といつても十時頃に、初枝が遲い朝飯を食べてゐると、突然、呼び鈴がヂヤヂリ鳴つた。鳴れば、お客だ。箸を置いて玄關に出てみると、見馴れぬ女がぽつんと一人、淋しさうに突ツ立つてゐる。宿屋稼業であるからには見馴れぬ人間は當り前だが、初枝の頭にぴいんときたのは、これは通常の泊り客ではあるまい、といふ意味である。初枝は心持ち腰を踢めて、

「いらつしやいまし」と相手の反應に注意を拂つた。
「あの、わたし入澤でございますけど……」
この一言に、初枝はひどく狼狽して、これは事だ、と考へた。異變がすぐさま連想されて、何とか早く二階の入澤に通じたいと心で焦つた。さもなければ入澤がミサと一しよに降りて來て、丹前の肩先にタオルでもひツかけて廊下を通りでもすれば大變である。相手は續けた。
「多分、こちらにお邪魔してるといふことですけど、ちよつと、わたしが參りましたとお傳へねがへませんか……？」
初枝は、とぼけたやうな顏付きを示したものの、胸のうちは必死である。入澤にドヂを踏ませたくないといふ心は、自家の打算と二にして一だ。
「お父さん、お父さん！」
と、初枝は突嗟に思ひ付いて、茶の間の常四郎を甲高い聲で呼んだ。
「どうしたんだい」
出てきた亭主の審かしさうな顏に浴せて、
「ねえ、お父さん。入澤さんはどうなすつたらう？　いま、奥さんが訪ねて見えたんですよ。こ

こんところはお見えにならないけれど、お父さん何かお聞きしてますか」
「うむ……」
お人好しはお人好しでも、さすがに常四郎も事態のあらましは朧氣に察知した。うかつに口を滑らせては大變だと氣負ふ心が常四郎を固くさせた。彼は、みやうにギクシャクした氣張り方で、土間に佇む入澤の細君とも故意に視線の會ふことを避けたのである。
「おれ知らねえよ。べつに何にも聞いちやアゐねえんだから……」
「あゝさう。それならそれでいいんですよ。ともかく、かうして見えだんですから、もし誰かが何かうかがつてるかと思つたんです」
答へて、再び入澤の細君に向ふ初枝は、眼顔で、二階の入澤に一種の危險を告げてくれるとよいのだが、と常四郎を促した。しかし常四郎はそれとは氣付かず、ただ何となく昂奮して廊下をうろうろするばかりである。初枝は、入澤の細君に向つて云つた。
「それぢやア奥さん。もし、見えましたら何かおことづけでも申上げておきますから……」
「はア、ではお願ひします。わたし、けさ方、栃木のはうから出て參りましたんですが、すぐ木工場へ戻るやうに傳へて戴きたいんですけど……」

「畏まりました」

細君は半ば疑惑を捨て切れぬ面持ちで、いつたん外に出て行つたが、晝過ぎ再び訪ねてきた。もうこのときは、すでに初枝も入澤に通じてあるから先刻のときより十分おちついた應對をした。入澤の細君は納得のいかない顏付きで、いやに奥の間を覗き込みたさうな態度を示した。突然、栃木の疎開先から出てきて、木工場に寢泊りする職工の誰かから餘程確かな噂ばなしを聞いたらしく、場合によつたら家探しでもやりたいやうな口吻を弄するのだつた。

「でも、確かにこちらへお邪魔してると聞いてきたんですけど、そんなことありませんの？　こちらへ泊めて戴く以外、どこへも行くところがない筈ださうですからね……」

細君の言葉づかひが、いくらか以前より、ぞんざいになつてゐる。初枝はそれが忌々しいと思つた。

「あら、だつて現に見えてないものを、どうすることも出來ないですわ。——すると奥さんは何ですか、手前のはうで旦那様をかくまつてるやうにお考へになるんですの？」

「いえ、べつに、さうだとは申しませんけど……」

細君の眼が泣きさうになつてしまつた。初枝は内心、舌打ちをした。初枝は、その眼にまざま

ざと見覺えがある。じつを云ふと、かつて初枝は常四郎の正妻ではなく、以前の女房を思ひ捨てた常四郎と無理矢理一しよになつた際に、やはり常四郎の細君が、こんな眼をして二人の隱れ家へ押しかけてきたことがあるのだつた。初枝は暗い氣分になつた。初枝はさういふ自分の思ひ出を一掃したい心に驅られて、殊更手強くこの細君を追ひ返さうと試みた。

入澤の細君は仕方なく出て行つた。その悄然たるうしろ姿を見送つてから、初枝はともかく二階の入澤と相談して、この際一應、入澤に木工場へ歸つてもらつたはうが無難だと考へた。入澤の細君は彌生ホテルを出て行きはしたけれど、何だか近所をうろうろしてゐて、何どき入澤の姿を見かけて飛び込んで來ないとも限らない、と思つたからだ。二階へあがつて、初枝は自分の考へを入澤の耳に通じた。入澤は頷いて、暫く思案してゐたけれど、初枝の云ふことも道理であるから一先づ木工場へ戻つてみる決心をした。

支度をして梯子段を降りてくると、あとからミサが、何かぶつぶつ呟きながら一しよに廊下へ降りてきた。初枝が氣の毒さうに入澤の顏に笑ひかけつつ、玄關の靴を揃へてゐると、廊下に立つたミサが、「意氣地なし！」と小聲で入澤を攻めてゐる。

「冗談ぢやアねえ」と入澤は備へ付けの、長いセルロイドの靴べらを弄りながら、「意氣地がなく

て歸るんぢやアねえ。あとのことを考へるからなんだ。ナニ、又、すぐに引返して來ちア……」
「あんた、奥さんの顏が見たいんでせう？」
「ふぜけちやアいけねえ。――ねえ、奥さん」と靴に足を通してから初枝に助け舟を求めた。
初枝は含み笑ひを置き捨てにして、わざと氣を利かして奥の間に引ッ込んだ。殘つた二人は、なほ玄關でぶつくさ呟き合つてゐたが、そのうちミサは、出て行かうとする入澤に、今夜何時頃に戻つてくるか、と念を押した。
「うん。まア、夜になると思ふが……」
「ふーん、だ。それぢやア奥さんと仲よく一しよに晩御飯食べるんだわねえ？」
「仲よくは餘計だな」
「道理で、いそいそ歸るんだわねえ？」
「いそいそは餘計だな」
ミサがヒステリックな口調になつた。
「あんた。ほんとに仲よくしちやアいやよ」
「大丈夫だよ……」

「ぢやア、仕様がない。奥方の御機嫌取つていらつしやい。その代り、すぐに戻つて！」
「うん」
入澤が閉口して玄關を出ようとすると、出し抜けにミサが呼んだ。
「あんた。ちよつとちよつと」
「どうしたんだい？」
振り向く入澤を繁々見つめるミサが、いやに芯の詰つた聲で、
「似合ふ、あんた……」と呟いた。
「何さ？」
「とても素敵。——やつぱり、あんた、ちやんとした洋服着ると素敵よ……」
「ちよツ、暢氣なことを云つてらア」
入澤は出て行つたが、約束通り夜になると引返してきて、玄關へ上ると同時に初枝の耳に、かう囁いた。
「奥さん。實は、あとから女房の奴が押しかけてくるかも知れねえ。弱つたけれど、もし來たら一應、お宅の部屋へ上げてやつておくんなさいよ……」

「あなたがいらつしやる、といふ事になつても、いいんですか」
「うん。何もかも打ち明けて來たんだよ。つい、口を割つちやつたんです」
「そいつは拙いことになりましたわねえ」
「ナニ、いいさ。遲かれ早かれ嗅ぎ付けるんだし、どうせ、ここに居ることは、うちの女工から動かぬネタを握つちやつてゐるんだから……」
「よござんす。一應お通しいたしませう。で、あなたを出せと仰言つたら？」
「出ます」
と、入澤は決心して、それから急に大事なことを思ひ出したといふ風に、
「ですが、奥さん。これだけ必らずお願ひしますが、萬一、奴がここに泊ると云ひ出したら、絶對に空いた部屋がないと斷わつて貰ひたいんですよ」
「よござんす。——お泊めしちやア、それこそ事だわ」
「絶對に頼みますぜ」
入澤は念を押して、追はれるやうに梯子段をあがつて行つた。

4

夜の十時頃になつてから、果して入澤の細君が、ショールの上に淡い粉雪の名殘りをとどめて、玄關へ入つてきた。夜に入つて寒さが急に募つた模樣で、暗い戸外にチラホラ白いものが舞つてゐるやうな天候である。

初枝は、入澤との打ち合せに從つて、先づ細君を玄關脇の二疊の板の間へ案内した。ここは富山の藥屋が泊まる部屋だが、普段は、小型の長椅子とテエブルを置き、チャチな應接室らしく裝つてある。しかし、いつたん長椅子に腰を降ろした細君は、いかにもこの二疊の板の間が不服らしい樣子だつた。番茶を持つて行つた初枝を捉へて、直接、入澤の部屋へ通りたいと申入れたが、初枝はキッパリ首を振つた。

「いいえ、それは困ります。手前どもでは、萬事お客樣のお指圖以外のことは出來ませんので……」

これには入澤の細君も文句がいへない。無念さうにそつぽを向いて、

「ぢやア、すみません。早く入澤をお出しになつて下さいませんか」と慄へる聲で、やつと云つ

た。

初枝が二階へあがつていくと、早くも氣配を察した入澤が廊下に出てゐて、進んでいまから階下へ降りようとしてゐるところだ。それはいいが、ミサが一しょについて出てゐて、そんな入澤の首ッ玉にしがみ付いて、子供みたいに駄々をこねてゐるのである。

「行つちやア、いや……」

「おい、止せよ」

「いいえ、離さない。ここに居て！」

「冗談云つちやアいけねえよ。ほんの暫く我慢してゐな」

さすがに初枝も呆れ氣味で、

「まア、奥さん。いま、そんなことを仰言つてゐちやア」と、思はず分を超えた忠告口調になつてしまつた。

「すみません」

ミサは急に悄げ返つて、しょんぼり自室へ入つてしまつた。入澤は苦笑を壓へてその姿を見送つてから、

「來ましたな？」と初枝の耳に囁いてみた。
「見えましたよ」
「仕方ねえから會つて來ませう」
「大丈夫ですか。しつかりなさいね……」
入澤は降りて行つたが、一ト足遲れて階下の茶の間へ入つた初枝の耳に、早や二疊の板の間から激しく啜り泣く入澤の細君の聲が聽えた。初枝は冷たく堪へてゐたが、前の瀬戸火鉢に嚙り付いて川柳をひねくつてゐた常四郎が、見るからにその泣き聲に影響されて、一種の動搖を示してゐる。初枝はそんな常四郎を見てゐるうちに、俄かに胸がムカムカするのを、どうすることも出來なくなつた。
「あんた！」
「何だね」
初枝はちよつと考へて、この意氣地なしの常四郎を、一擊にして參らせる效果的な言葉はないものかと探し求めた。
「いいんですか、お父さん。うちは商賣が宿屋ですよ。どんな人だつて、泊めねばならないんだ

し、強盗だつてパン助だつて、お金になるなら、それでいいのよ。——下手に、人情を起しちゃア、あたしたちの顎が乾上つてしまふんですよ……」
「そりやさうだとも」
と、亭主は應じた。形勢が不穩である。下手に初枝を怒らせたら、又一騒ぎせねばならない。
「ナニ、そりや、お前の云ふ通りだよ」
「そんなら、いま來てる入澤さんの女房なんかに、つまらない同情なんかするのは止めて下さいよ。あれで、入澤さんは、うちぢやア、第一番の上客なんだからね」
「上客だとも。——全くいい人だなア。おれも、あの人の、さつぱりした氣性が大好きよ」
「人柄を云つてるんぢやアないわよ。可笑しな人ね。あたしは入澤さんのふところ具合を云つてるのさ。——間抜けな、お父さん……」
「ほんとに、おれも間抜けになつたよ。これも達也がゐなくなつてからのことだ。ほんとに、おれも達也が居りや、もつと氣持がしやんとして、かうも老いぼれなかつたかも知れないからなア」
「いいんです。達也の話はもう止しませう。お互ひ樣よ……」

云はれて、常四郎はピタリと止めた。達也といふのは常四郎の一粒種で、先妻の子供である。八年前に滿洲へ應召したまま、いま以て復員しない。けれど、亭主が達也のことを託つならば初枝も胸の鬱ぐ相手が一人ゐるのだ。いま、初枝が「お互ひ様よ」と呟いたのはそのことで、初枝の連れ子に富美子といふ十八の娘があつた。終戰直後まで一しよに暮してゐたのであるが、格別、繼父の常四郎が冷たく當るわけもないのに、氣儘に家を飛び出して、初枝の妹筋にあたる親戚に移つたまま、何としても歸つて來ない。たまに、ふらりと初枝を訪ねてやつてくることもあるが、近頃、無驕の筈の富美子がいやにテカテカした立派な身なりをしてゐるので、初枝はそれとなしに懸念してゐた。しかし、とにかくその心配は沈潛して內攻するので、夫婦の間でお互に子供のことを口にするのは一種の鬼門になつてゐたのだ。

すゐうち、玄關脇の板の間で喋つてゐた入澤が、「奥さん、ゐます？」と云ひながら茶の間へぬうツと入つてきて、

「弱つた、奥さん。何としても腰をあげねえや。この分ぢやア今夜とても歸りませんな。入澤、一代の不覺ですわい……」と頭を掻いた。

「お部屋、全部ふさがつてゐて、無いんだと云つてみたら？」

「云ひましたとも。――だいいち、お互の恥だとも云ひ聞かしてやつたんですけど、絶對に動きませんな。部屋がなければ、この板の間でも結構だから泊めて貰ふと云ひ張るんです」

「弱つたわねぇ……」

大げさに眉をひそめる初枝の背後で、茶ダンスの上に置いた目ざまし時計が、かれこれ十二時近くを示してゐる。

入澤は初枝相手に、あゝでもない、かうでもないと散々對策を論じ合つたが、もとより名案のあらう道理がないわけで、結局、本人がさういふ以上、二疊の部屋に泊めるより方法がないと決まつた。ところが、いざ話がさうと決まつて、初枝が板の間を片附けて寢られる支度をしにいくために立ちあがると、急に、入澤がいいことを思ひ付いたといはんばかりに、いくらか彈んだ眼のいろをした。

「さうだ。奥さん。わしだけ今晩、ここを脱け出して太子堂へ歸りますよ……」

「木工場へ？」

「さうよ。こりや、ゐないに限る。このまま、ずるずると居た日には、何事が起らんとも限らないや。ここは一應、力づくより、女房の奴に肩すかしを食はせるに限りますぜ」

入澤の云ふことは道理であつた。もし、細君を泊めた上、夜なかに入澤とミサが食ツ付いて寢る二階の部屋へ、どんなことから取り亂した細君が亂入しないとも限らない。さうなつたら一大事である。初枝は入澤の分別を賞讃した。

それから間もなく入澤は洋服に着換へた後、こつそり彌生ホテルを脱けて出た。細君は二疊の部屋で眠つた。何事もなく朝を迎へた。二階のミサはもちろんだが、初枝はやはり入澤の細君にも食事を提供せねばならない。一通りの膳を造つて玄關脇に運んでいくと、急に初枝には人情が湧き出した。泊めて、食事を供する以上、入澤の細君もお客である。その、お客だといふ意識の上に、漠然とキノコの生えるやうな人情の芽が吹き出したのである。

しかし、その日、遂に入澤は彌生ホテルに寄り付かなかつた。入澤の戸惑つた顏が見える氣がした。二階のミサと、玄關脇の細君とは、お互に顏を合せることもなく、終日、ぼんやり閉ぢこもつて暮してゐたが、更に翌日、入澤がなかなかやつて來ないと、午後遲くなつてからミサと細君とが換る換る太子堂へ電話を掛けるために、近所の屋敷へ電話を借りにいくのだつた。だが、夜になつてからも、入澤は姿を現さなかつた。

三日目の朝、今度はそろそろ初枝が心配になつてきて、自身で太子堂へ電話を掛けると、入澤

はすぐに出かけるといふ返事をした。待つてゐると、その日も來ないで終つた。翌る日、つまり四日目の晝過ぎである。突如、表てで、しつかりした靴音が起るとみるや、呼び鈴がヂリヂリ鳴つた。一種の勘で、それをメリのお客ではないと察した初枝が、もしかすると入澤かなと考へながら出て見ると、意外なことには、その人間は生死不明になつてゐた達也であつた。

「あら、まア！」

さすがに初枝は感動の情を露骨に示して、すぐさま常四郎を呼び立てた。常四郎は老眼鏡のワクを片手に摘んだまま飛び出してきて、イキナリ、軍服の達也の身體にしがみ付いた。眼鏡のワクを持つた片手を離しながら、あとの全力を達也の一身に集中させた。早速、三人で茶の間に入つた。

この騒ぎがあつたお蔭で、ミサと入澤の細君とは、暫し一蒙の關心から外れてゐたが、二三日して、やはり初枝が不安を感じて、わざわざ太子堂の木工場へ出かけてみると、入澤はカーキ色の作業服を身にまとひ、女工たちと一しょになつて、しきりとおが屑のなかで立ち働いてゐるのだつた。そして、初枝を作業場に案内して、近くここへ新式の動力をもう一台備へ付けるつもりだ、といふやうなことを熱心に說き立てた。歸り際に、入澤は門の外まで送つて出て、初枝の耳

にかう囁いた。
「奥さん。どつちにしても、金のはうは責任持ちます。絶對に間違ひないから、御心配なく。——とにかく、二人とも、よろしく頼みますぜ……」
支拂ひは大丈夫にせよ、肝腎の入澤が姿を見せず、ミサと細君とが徒らに頑張つてゐることは初枝にとつても氣詰りだつた。どつちか一方が出てくれるのが望ましく、一家の者が何となくやきもきしてるのを察した達也が、或る日、急に常四郎と初枝の二人に、かういふことを云ひ出した。
「ぼくに任せてくれませんか。きつとお客さんに說いて聞かして、どつちか一方、出て行つて貰ひますから……」
「ふーん」
と、常四郎は頼もしさうに、そんな達也を惚れ惚れ見つめた。
「で、何かい。お前、どつちも出ないと頑張つたら、どうするつもりだな？」
「ナニ、さうなつたら、ぼくの力で、一方だけ出して見せます」
「達也さん」

と、初枝が横から口を挿んだ。

「あなた、それぢやア、どつちの方に出て貰ふつもりなの？」

「もちろん、二階さ。あの松の間の女ですとも！」

達也は、一種の力をこめて、初枝の顏をまじまじ見つめた。單純な云ひ方ではない。十數年來、考へあぐねた鬱積を一擧に跳ねのけるやうな氣負ひ方を達也はした。初枝は何となく威壓を感じた。

「ほう、そりや、どういふわけで？」

初枝も然し負けてはゐない。

「どういふわけと云つたつて、二階は要するに本妻ぢやアないでせう。本妻がちやんと頑張つてゐるなら、先づ身を引くのは、二階の女からですよ……」

さう云ひ放つて、達也はやうやく復讐を成し遂げたといふ氣になつた。達也は、實母を差し置いて父と無理矢理一しよになつてしまつた初枝に、今頃、情念の上の仕返しを目論でゐた。二十九歳といふ年齡が許す業とは思はず、これも戰場生活のお蔭だと自分で感じてゐるのである。達也はゆつくり腰をあげて、茶の間を出ていく際に、かう附け加へた。

「ぼくは戰爭で鍛へられて來ましたよ。正しいものと正しくないもの、――この二つを斷乎として見分ける勇氣だけが、復員みやげといふものです。すべては戰爭が裁くんです。ぼく個人の思惑ぢやアありませんよ。辛からうが何であらうが、戰爭といふものが正邪をハッキリ裁くんです……」

出て行つた達也の跫音が梯子段を上つて行つた。初枝は慄へた。當四郎もハラハラしてゐた。しかし達也の復員以來、常四郎は初枝に對して、やや正面から相手を見据ゑて物のいへるやうになつてきてゐる。自信はないが、或る精神の安定は摑んだ氣でゐた。

二十分程して、再び達也が梯子段を降りてきた。がらりと茶の間の襖をひらいて、

「成功です。二階の女は、明日いつぱいに出るさうですよ……」と笑つた。

その晩、達也復員の噂を耳にしたらしく、富美子が着飾つた洋服姿で彌生ホテルにやつてきた。身なりは相變らず立派だつた。白い、ずつしりしたオーバーを脱ぎ、ピカピカ光る合成樹脂の大型のハンドバッグと一しよに、無雜作に玄關の廊下へ放り出すので、初枝は慌ててそれを抱へて、富美子のあとから茶の間へ付いて入るのだつた。

親子四人が揃つて一堂に會するのは、終戰以來、始めてのことである。繼父繼母で、片親の違

ふ達也と富美子は、しかし肉親の團欒を欣ぶといふより寧ろ珍しい異性に接した思ひで、いやにキンキンした笑ひ聲を立てるのだつた。夜十二時近くまで喋り込んで、富美子は久々に泊つていくことになつた。幸ひ二階の杉の間と楓の間が空いてゐたので、富美子は四疊半の杉の間へ寢かせることになつた。達也は階下で、常四郎たちの隣室で寢た。

夜なかに、初枝が眠を醒まして手洗ひに立たうとしてゐると、突然、隣りの部屋から達也がすうツと唐紙を開け、廊下へ出たらしい氣配がした。達也も便所か、と思つてゐると、靜かな跫音がミシミシと小さな軋りをあげつつ、梯子段をあがつて行つた。初枝は何となく胸騷ぎがした。晝間、松の間のミサと談判をやつてきて、明日中に立ち退かせるといつてゐたが、どんなことから間違ひを仕出かさぬとは限らない。初枝は醉興と考へたが、ふいに常四郎の鼻をあかしてやりたい氣持も生じて、俄かにさツと寢床を出ると、滑るやうに廊下へ出て、跫音を忍ばせながら眞暗な梯子段をあがつて行つた。

松の間の前までくると、室内はしいんとしてゐる。と、思ひがけない方角から達也らしい囁きが低く起つた。杉の間である。初枝は殆んどわが耳を疑ふ氣持で、そツと杉の間の唐紙の前へ忍び寄ると、ちやうどそのとき、電燈を點じたままの室内から達也のこんな聲が洩れた。

「復員してから、ぼくはすべてのものを信じない。正義も神も道徳も、何もかも空しいと思ふんだ。いまのぼくが心から信じるのは、ただ肉親といふものだけだよ。——富美ちやん、この氣持、解つてくれる？」

そんなことを口にじながら、事實は何の血のつながりもない兩人が、ぴたりと食ッ付いて接吻するらしい氣配だつた。

初枝はそつと廊下を探り、殆んど擦り足同然の歩き方で、暗い階段を降りて行くのであつた。

あとがき

「絶壁」は端なくも、所謂、モデル問題を惹起して、ひろく世間の注目を浴びたけれども、作者として本意ではない。しかし、私は、この問題から直接間接、感ずるところが少なくなかつた。

それは、一見、この問題を論議するかに見える幾多の意見が、實際には、この作品を深く讀み込むことを、讀者の前から妨げてゐた點などもその一つである。たとへば、モデル問題一般を、流行作家の多忙さから來る虚構化不足、といふ風な前提で云々するのも、私としては今以て不服である。

そのやうな前提は、少くとも、この「絶壁」とは何の關係もないのである。私は、この「絶壁」を一年半も考へ續けて、始めて筆を執つたのである。それは、私として躊躇なく明言し得る。而も、それは、作者に對して、社會的

な抗議を發したモデルの某君自身さへも、おそらく胸奥深くに於ては、さう感じてゐたことだらう、と想像する。

「絶壁」は、そのやうな作品である。ただ單に、一朝一夕の構想で成つたものとは、本質的に異なるものだ。これを、私は秘かな誇りとしてゐる。だから私は、この作品が、いかに社會的な問題を惹起したとて、何らの動搖も生じなかつたのである。問題自體のあらはれ方は不快であつたが、私は、この「絶壁」に關する限り、いまだに、あと味がわるくはないのだ。世間が騷げば騷く程、私自身の心境には光風霽月と喩ふべきものがあつたのである。

この心境は、遂に何ものにも亂されなかつたし、今後も亂されることがないのである。

昭和二十四年九月

作者